き殺さん計畫なりしと白狀したれば、四十三人は即座に其首を刎られ、城外に居る其味方に示さん爲めに、其首級は城壁の上に立てたる長棒の上に梟されたり。有馬の道々には、今は兵卒を配り置きて幕府の命を待ち居れり。若し此騷亂持續せば、隨分甚だしく血を流すことゝ相成るべし。

目今爲すべき處置に付きて種々の風說あり、願はくは新なる訓示を得んことを。

平戸オランダ商館　ニコラス・クックバッケル

一六三八年一月十日

◎閣老内膳殿へ此書を達せられんことを請ひたる別書を副へ、クックバッケルよりムラサメ(村雨か)三郎左衞門殿に送りし書

内膳殿の安着せられたるに就き、唯慶賀を表せん爲めに此使者を遣し奉る。又二種の酒及び菓子を贈りたれば、我名義にて内膳殿へ進上せられんことを願ふ。若し我力の及ぶ事ならば如何なる御用にても告げたまはれかし。我等は常に忠直に勞に服せんことを喜ぶものなり。

一六三八年一月十七日(十二月三日)

ニコラス・クックバッケル

◎商館長よりバダビア總督フォン・デエメンへの書

數日前、曾て臺灣の捕縛事件に我商館を助けたるものゝ一人なる閣老板倉内膳殿は、他の二人の紳士と共に殿下の發せる命令により有馬天草に向け江戸を出發せり。同時に二人の奉行飛驒殿、三郎左衞門殿も亂を鎭め、又、亂後、叛民を罰し、又其地方民を治めん爲めに江戸を發せり。然れども此騷動は有馬及び唐津の二君主の過ち又は其政治の惡きより起りたるなれば、外の諸大名の助勢を受けず、先、始めに各自手勢を率ゐて其管下の亂民を鎭定せよと殿下は命じたり。殿下は一人も辜なき者の血を流すことを好まず、有馬唐津の二君が命を賭けて亂を鎭めんことを望めり。余は此地の代官等並に外の紳士より聞くに、殿下は有馬の君の集め得べき兵士は唯二千五百人、會津の君は一千人、兩方にて四千人とせよと命じ、而して有馬の亂民は凡そ九千人、天草のは凡そ一萬三千人と數へらるゝことを知りながら下の如く言ひたまひたりと。

汝等唐津の主及び有馬の主よ。我既に汝等に領地を與へたり、又、今汝等の力之を治むることを得ずんば、亂の爲めに汝等の生命を棄つべし。

併し叛きたる農民並に耶蘇敎徒をたしかに全く鎭定せんために、殿下は有馬の

隣藩にて龍造寺及び筑後の君主達に命じて、兼々精兵一萬六千人を有馬の地に備へおかしめ、同じく肥後の嗣君にも天草の隣藩なれば、必要の時には、二萬の兵士を送りて唐津の君を助けん事を命じたり。されど此等の諸大名は唐津及び有馬の君主が敗れたる後までは、攻擊に向ふを許さず、又一人たりとも反賊たる上はあまさずに打ち取るべしと命ぜられたり。殿下は此命令に由つて一方には惡しき政治の點に就き、又一方には叛亂の點に就き、兩成敗を加へんとするの念慮なり。叛亂の報、江戸に達せし時、將軍は令を西國の諸大名に下して、悉く任地に歸りて其民を鎭撫せしめよとありたれば、我等も、時々刻々、平戸の君主の歸還を待ち、厚く之を歡迎せん爲めに、盛なる宴會を催さんとて其準備全く成りたりき。

大村の地にても騷亂の起らんことを恐れて農民及び平民はすべて其所持の鐵砲を取り上げられ、耶蘇敎信者の嫌疑者は數人捕縛せられたり。

余、又、之を聞く、有馬天草の者共は、將軍、役人を遣はし、彼等の罪科の罰として死を命ずるならば、彼等は欣然として之に從ふべきも、若し然らずして領主等が自身に叛徒を罰し、之を剿滅せんとするならば、彼等は誓詞を立て、血判を押し、決して

降服せず、全軍、滅盡する迄は水火を冒しても最後の抵抗を試むべしと云へりと。此勇ましき勢ひを聞きて、君主、殊に唐津の君主は恐れを懷き、今月二十日に平戸を過ぎしに、快晴順風のあるに拘らず、今なほコッチ(口の轉訛ならん。平戸より稍〻南の小港にて船は通常こゝに碇泊す)に碇泊しつゝあり。

有馬の主は既に數日、其領地に居り、城中にあり、將軍の命に從ひ、十二月七日即ち一六三八年一月二十一日初めて亂民を討伐せり。

唐津の主も同じ命令を受けたり。衆人多く此君を尊敬せず。兎に角、我等は二君が速に亂民に打勝ちて其領地と其收入とを永久に持續せんことを望むなり。若し然らずば、我東印度商會は正しく一八八三七九クローリンの金額を損失すべし、これ唐津の君の求めたる貨物の代價にして我等の未だ受取らぬものなり。四五日前、我等は役人を唐津に派して、渡したる貨物の勘定を乞はしめたるも、戰爭其他の費用にて財用足らず、使者も空しく歸り來るべきを憂慮す。我等は閣老內膳殿及び長崎の代官達の到着せるを聞くや、彼等の通路たる平戸より六哩の內地に通詞をやりて書翰、酒少許、蒸溜水及び菓子を此貴人等の官吏に渡し、その

人より我名義にて進達せられんことを求めしに、我使者の着せし時には、貴人の一行は早や南に向ひて通り過ぎたる後なりし。併し此等の少々の贈物は此貴人等の氣に入るべきを思ひ、更に使をして之を携へしめ、有馬と長崎とに送りやれり。未だ使者還らざれば、音信を得ず。

同日、我船オーデリテル急信を得、平戸代官我等に報じ、有馬天草の亂の間は、官の米倉を閉ぢ、極めて緊急なる場合の外は何人にも米を渡し與ふるを禁ずる告示頒布せられたりと告げたり。我等は入用ならば他の場所より米穀を買ひ取れとの代官の令なり。されば此時より後は我等は唯僅に米穀五百四十俵を得たるのみなり。されど思ふに我船ベッテンは既に此方に運搬中なる二千六百俵につぎて三千五百俵を載せ來るならん。又命じおきたる小麥も得らるゝならんと、日々待ち居れり。此船にて我等は貴下に、しめ上げたる臺帳及び諸帳簿を送らんことを望み、今之を決算しつゝあり。(下略)

一六三八年一月二十四日　平戸商館　ニコラス・クックバッケル

◎十二月十三日即ち一六三八年一月二十七日クックバッケルより長崎代官フェ

ンドノ(末次平藏殿)に送りたる書。

一月十一日付にて火藥を送れと要求せられたる貴書を十三日受領せり。由つて今火藥六俵を貴下に送る。

代官大學殿及び大膳殿より及ぶ限り此事件に助力すべしとの忠告を受けたり。されど我大船は恰も出發したる後なれば、貴下の要求の少しく後れたるを不本意に思ふ。今殘り居る最小の船は、此書狀と共に發送する火藥を載せたり。今はこれ以上の火藥を御用立つること能はず。

何事にても、御用あらば、速に命じたまへ。常に喜んで忠實に之に服すべし。

◎十二月二十日即ち一六三八年二月二日クックバッケルより長崎代官平藏殿への書。

今月十五日の貴下よりの急書を二十日に受領せり。其書には我等の有せる火藥を盡く發送すべきを請求せられたるも、先便已に御返事仕りたる如く、此地に殘れる唯二艘の船の外はすべて出發したれば、不本意ながら、此上に火藥を得るの途なきなり。

帳簿決算の繁務あらざりしならば、カロンを早く長崎まで遣さんと思ひしも、果さゞりき。委細はカロン口上にて申述ぶべし。

商會の評議にて日本に於ける商會の事業に就き、種々の事柄を報ずる爲め、且つ、口上說明の方、我事業を書面にて述べんよりも、能く理解せらるべしと思ひたれば、此度カロンをバダビアに遣すに決したり。貴下若し何物にてもバダビアにて求められたきものあらば、御要求に應じ、精々注意、取り計ふべし。カロンすべて口上にて述ぶべければ、これにて擱筆す。

◎正月二日即ち一六三八年二月十五日クックバッケルより長崎代官平藏殿への書

新年の賀詞を述べ奉る。數日前カロン無事に還り來れり。有馬に居られたる奉行飛驒殿、三郎左衞門殿は我等の採りたる勞にて滿足せられ、又カロンの伺候せしを喜ばれたりと聞きて我等は大に喜べり。

我等は閣老伊豆殿の此地に來られんとすと聞けり。若し伊豆殿、來りて我船を見んとせらるゝならば、我等は喜んで自ら行くべければ、願くは何日に此地より船

を出發せしむべきか此使者に告げられよ

幕府より要求せられたる鐵砲を數日前、平戸の代官より有馬へ送りたり。我等は目今、有せる中の最大なる鐵砲を贈れり。

其外に用事あらば我等は何日にても智識の及ぶ限り盡力すべし。願はくは常に助言を與へよ。これに從ひて事を辨ずるは我等最大の幸福なり。

◎クックバッケルよりバダビア總督アントニオ・フォン・デエメンへ贈りたる書翰

我船オーデリテル出發の翌日、閣老內膳殿幷に長崎奉行等へ贈りたる急書に對し、代官平藏殿より親密なる返答を受けたり。今此譯文を此書狀と共に貴下に進達すべし。

同時に平藏殿は、前に云ひたる閣老の命により、有馬の軍にて目今、火藥全くなく、日に所々より其送達を待ち居る故、我船より火藥十ピコル(斛)を片時も速に送れと請求し來りたれば、我船ベッテン幷にデリップより與へ得べき分量即ち六俵丈の火藥を送り遣せり。

我等は貴人等に使者を遣し、オランダ人の力の及ぶ限りは、何事も命に從ふべしと、此方より申出せり。これ此人々は我等の忠實なる臣民として殿下に事へんことを望む故なり。かく我等が日本人の風習に從ひ、努力する所ありしを以て此人々は滿足に思へるが如し。

然るにオッペル・コープマンなるカロンの今月四日(十二月二十一日)長崎に達せし時(其四、五日前、代官平藏殿特に使を發し招かれたる故なり)には、少しも厚遇を受けざるのみならず、却て曩に閣老の江戸より到着せられたる時に、我等二人、又は我等の中一人の長崎に行きて自身に殿下に奉事せんことを請はざりしを以て苛責せられたり。

閣老の長崎より有馬に出發せられし時、代官(平藏殿)は一己の考へにて、專ら我等の利を謀りて、若し必要なる時は、殿下奉公の爲め我鐵砲火藥彈丸を我等は喜んで獻納すべき事を貴人等に保證したり。表面には此事承納せられざる如くなれども、代官は我等が日本の爲めに喜んで勞に服するといふ證を得んことを望み、且つ此點に於て常に我等を稱揚せり。

カロンは極めて辭を卑くして我等の過怠を謝し、我等は閣老內膳殿及び兩奉行へは何事に因らず服役せんことを請ひ、若し閣下より其意を機に遲れず示されしならば、我等の一人は必ず此地に來りしなるべき旨を述べ、カロンは更に、若し必要ならば、貴人等へ敬意を表せん爲めに有馬に赴くべく、又此事に就きてはそれぞれ余より命令を受け居れりと云へり。平藏殿之に答ふらく、此の事に就きて書を送り又は談話して、オランダ人に對する友誼を公然、表示する譯に行かず。これ日本人の目に直に猜疑を起せばなりと。由つて今の時に於て、十分に幕府に事ふることは、日本に滯在中にオランダ人が費すべき總ての贈物よりも遙に商會の爲めに效力あるべきを諷示せり。

此助言(平藏殿)に從ひて同夜、早速貴人等に贈るべき一書を作り、何事にても要用あらば、謹んで命を奉ずべしと云ひ、其書翰を持たせて我が役員の一人を有馬に遣したるに、鄭寧なる返書あり。又貴人等が我等の申出を甚だ滿足に思ふと述べられ、若し我等の爲すべき事あれば、平戸代官まで通知あるべしと云へり。

今月十日(十二月二十七日)に至り、最大なる鐵砲五挺幷に附屬せる火藥彈丸を贈

れとの要求を受けたるを以て、我船デリップに備へ置けるものを直に送致せり。平藏殿は又余に自ら行きて閣老伊豆殿に敬意を表すべしと敎へたり。伊豆殿は大炊殿、讃岐殿に次ぎ、位階第三を占めて頗る將軍の寵遇を蒙れり。彼は平戸の嗣君の大叔父に當れる左門殿と此地に來らるゝなるべし。平藏殿は此等の貴人にして長崎に達するならば、速に急使を以て之を余に報ぜんことを約せり。余等は其時に兩奉行の承諾を經て、我商船出發の時日、生絲のこと幷にマニラの我計畫等に就き嘆願書を呈出すべし。凡て此等の件は、閣老の江戸幕廷に久しく居らざりしと、殿下の疾病、及び有馬、天草へ此等の貴人の出發せる等の爲めに今猶少しも捗らざれば、平藏殿は今我等にして再び請願をなすときは、幾分の利益を商會に得ることもあらんかと云へり。平藏殿は又閣老はいまだ大船を見たることなければ、我商船の中、一艘を長崎へ廻送せんことを望まるゝやも計り難きことを余に告げたれど、かゝれば、我等は日々用意を爲し其命を待たざるべからざるも、正月後、六七日即ち本月二十一日若くは二十二日には、我商船はバダビアへ向け出發すべき筈となれる故、カロンは、長崎まで此商船を送ること叶はぬやも計り

難ければ、此旨、恕せられよ。若し此日限を過ぎて猶滯留せば、我商船は遂にバダビアに達すること能はざる虞れありと平藏殿に述べたるに、平藏殿は、之に答へて、それはさまで重き事にあらず。兎に角、商船は臺灣までは達し得べし。此くの如き高貴なる役人の歡心を得んと務むる方、斷へず自己の商利をのみ念頭におかんよりも、寧に商會の利となるべきを考へよ。オランダ人は今まで概ね自己の利に偏したる方針のみを執り、第一に其商業に注意し、恭順禮法等の事柄をば、第二段の事と考へ來りたるが如しと。又曰く伊豆殿も深く此オランダ人の特性を察知し居れば、此度は寧ろ意を幕廷及び禮法に注ぐ方、智ならずや。凡て商業及び利益も之より起り、又商會の益も之より進むべし。若しオランダ人にして漫りに思慮に過ぎたる返答及び請願を此等の貴人に爲すならば、こは正しく商會の不利を招くに相違なし。オランダ人は、居常餘りに利益を口にして、恰も何人も先づ、彼等に利を與へざるべからざるが如くに云ふも、蒔かぬ種子は生へず、何人も働かずしては何物も得ること能はず。人々其受くる利の爲めには、何かそれ〴〵の骨折りを爲さねばならぬなりと。平藏殿の論鋒此くの如し。併し平藏殿は又言へり、こ

は我商船を無理に引き留め置く爲めに說けるにあらず。商業の爲めに閣老の到着を待つこと能はざれば、我商船を出發せしむるとも全く我等の自由なり。平藏殿の言は決して命令にはあらで懇切なる助言なるなり。かく言へばとて毫も己れの利を謀らんが爲めにあらず。唯己れの父が嘗てオランダ人の讐敵にてありし程に自分が又オランダ人の良友たることを示さんが爲めに外ならずと。平藏殿が常に我等の爲めに奔走し又力の及ぶ限り我商會の利益を謀りしことを思へば、此件に就きても、彼の誠實なることは確實なり。

かく詳細なることを書するは、此貴人が如何に嚴にして且つ密なりや、又若し己れの喜び樂しむもの、又は己れの想像を飽かしむることあれば、よし他人に大なる損害を及ぼすとも、更に意に介せざることを貴下に示さん爲めなり。我等は報知に接し次第、必ず我等單身か、又は我船と與に長崎に赴くべし。現金支拂が遲延せざれば、我商船は時に晩れず、此地よりバダビアに到着し得べきやうに出帆せしむべし。必ず三月二十日頃、臺灣より最近の急信を發し、長崎にての事業、商會の他の商業上の取引幷に殘金及び現在負債の記錄と共に一年の平均決算等に就き詳細に報告すべし。

天草島の反亂は全く鎭壓せられ、生擒凡そ五十人程を除き、餘の亂民は有馬へ渡り、其地の逆徒と相結び、生死を俱にせんと決心せり。

唐津の君主の兵士及び逆賊に與みせざる者共にて、暫くの間は天草を制するは充分なり。肥後の君主は其兵士を率ゐて既に有馬に來り、他の將軍と會せり。又人々の說には、薩摩よりも七萬の兵士來り、陸上には十分なる場所なきゆゑ、兵船を連ねて海岸に陣せりと云ふ。亂民は老幼悉く合せて凡そ三萬人と數へられ、今は敗壞せる有馬の古城に楯籠り、日々痛く幕兵を惱ませ居れり。今月三日(十二月二十日)には龍造寺の軍六百人程の兵士にて遽に攻め、城を陷れんとせしに、其兵士共は忽ち或は傷けられ或は殺されたり。此城攻めは閣老內膳殿の命令にて試みしにあらず。此事を前より知り居りしは唯、長崎兩奉行のみ。その爲め殊に殿下は、決して無辜の血を流すことなく、糧食を絕ち、之をして飢渴に逼らしめて賊を滅せよと嚴命せられたれば、此等の貴人の間に、端なくも、爭論起りたりと云ふ。然れども、殿下の命の如くせば三ヶ月餘も費すべく、捕へたる亂民を鞫問せしに、此日

數間は、糧食充分なるべしと云へり、オッベル・コープマン・カロンは反亂の位置及び區域を明示し得べき、有馬と天草との二枚の地圖を受領せり。長崎の人々は、又日々、閣老伊豆殿及び左門殿の到着を待ち居り、且つ耶蘇信者殄滅の爲め、更に幕廷の命令を傳へ來るならんと恰も始めて卵子を生み、始めて雛を孵化せし牝鷄の如くに恐れつゝあり。長崎人は常に何事も最初に命ぜられ、他の人々に先だちて苦しまざるべからざるを恐るゝなり。

一六三八年二月十七日　平戸商館　ニコラス・クックバッケル

◎クックバッケルより臺灣の監督ヨハン・フォン・デルブルヒに贈りたる書翰

余は我商會の爲めに願ふと雖、我船デリップを時に後れず、バダビアへ向け出發せしむること難かるべきを報せんとす。これ一には月々、否時々、都より金錢を得んことを待ち居ると、一には殊に平藏殿、我等の其船と與に長崎に行くことを望み、且つ此地に後命を待つべしと云はれたるとに因れり。急速に我船ベッテンを送り遣りたる後、余は直に長崎に行き、謹みて平藏殿に猶我等の船を送ることの必要なるべきかを尋ね、成可く此事を免かるゝやう請はんと企て居るなり。されば極

めて遺憾なれども、バダビアへの航海は恐らくは爲し能はざるべしと知られよ。ベッテンに積載せたる貨物に就きては、積荷の書付を參照せられんことを乞ふ。此船には一日一人、一斤の割合にて五十八人分三ヶ月半間の米穀を備へ置けり。

一六三八年二月十七日　平戸商館　ニコラス・クックバッケル

◎クックバッケルよりコッチ港に碇泊せるベッテン號に乘り込み居たるオッベル・コープマンなるフランシス・カロンへ贈りたる書翰

只今我商船二艘共（若し其方（カロンを指す）いまだベッテン號にて出發せぬならば）速に有馬へ廻送せよと平戸の君よりの命令あり。これ昨日、長崎なる平藏殿より受取りたる書面とは甚だ相違せり。それには今月二十三日（正月十日）、我船デリップ號を送れと認めありたればなり。

由つて潮の工合の宜しき時を認めて、片時も早く是非とも出發すべし。コッチ港より見えぬ邊まで達したるならば、再び碇泊するも差支なし。併し如何にしても平戸の海岸、猶更長崎近邊の海岸をば避けざるべからざることをくれ〴〵も注意すべし。

明日、余は我船デリップ號にて定められたる場所、(有馬の)に出發すべし。閣老伊豆殿は正月四日に有馬に到着せり。

其方幷に他の諸友のバダビアまで多福安全なる航海を爲さんことを祈る。

平戸商館　ニコラス・クックバッケル

一六三八年二月十九日

◎有馬の城に近く碇泊せるデリップ號に乘り込めるクックバッケルより平戸商館内コーブマンヂヤン・フォン・エルゼラクへ贈りたる書翰

今月二十一日(正月八日)、我船デリップ號に乘り込みコッチ灣を出發したる後、二月二十四日(正月十一日)午後、天草有馬の反逆を起せし農民共が楯籠れる城の傍に到着し、水の深さ八尋程の處に碇泊せり。二日前我等は通詞レモンを樺島の近傍に上陸させ、貴人等に我等の到着を報せしめしに、暫くして彼、歸り來り、閣老伊豆殿、左門殿(平戸の君の大叔父)特に長崎の兩奉行等、彼を厚遇し、且つ此等の貴人は、我等到着の迅速なりしを感嘆せられしことを告げたり。

翌日、我等は上陸して貴人の旅宿に來れと招請せられたれば、命の如くせしに、こは全く我等の使者の彼の意を誤解したるにて、貴人等は、入れ違ひに我船に來り

たれば、我等陸にて此事を聞き、急ぎ、船に引き還したる途端、恰も我船より還り去らんとする其貴人等に出會ひたり。閣老及び長崎の奉行等、我等を厚遇し、余に我取締役の一人と與に、海岸の防禦工事及び砲臺を視察せよと請はれたれば、我等は直に赴き見て、其夜口上にて閣老伊豆殿へ我說を述べたり。翌日に至り海上より我砲を放ち、亂民の城塞及び家屋を擊てと命ぜられたり。

昨二月二十八日(即ち正月十五日)、貴人等殘らず臨檢せる處にて、特にオランダ人の爲めに作れる海岸砲臺の一より、二箇の砲にて彈丸二十八箇を放ちしに、此發射の法を見て、貴人等は頗る喜べる如くなりき。此地に到着以來、我等は日々陸に上り、貴人等の目前に喚び出されたるが、我等は猶此後數日間も此の如くならんと恐るゝなり。

夜に入れば、伊豆殿幷に左門殿より隔番に番兵を遣されたり。其何等の理由によるかは知らざれども、我等に取りては却てありがた迷惑なり。昨夜の如きは、我等は自己の船室を掃除し置き、却て取締役の室に睡臥せざるべからざりき。昨夜、來りたる如き氣懊しき奴輩を見ては、益〻不快を感ずるのみなれども、我商會の利益

が之によりて增進するならば此くの如き煩勞をも亦之を忍ばざるべからざるなり。昨今の模樣にては、餘程の時日によらざれば、全く逆徒を鎭壓すること能はざる如くなるが、聞くが如くむば、此百姓一揆の畢るまでは、我船は又此地に滯在せざるべからずとか云へり。若し然らば我船は此定期風にて臺灣に向け發することと叶はざらん。是れ上帝の止め給ふ處なるべし。我等、船にて此地に來り、何事をも爲さずに暮すは實に無益の事たるはオッベル・コープマン・アウグスチン・ハフレルよりの談話にて知らるべければ、此にて筆を止むべし。

ニコラス・クック バッケル

一六三八年三月一日逆徒の築きたる城に程近く有馬に碇泊する商船デリップ號の甲板上にて認む。

◎クックバッケルより臺灣の監督ヨハン・フォン・デルンブルヒへ贈りたる書

全能なる上帝は我船ベッテン號及び其積荷を安全に指導せられたるなるべし。此船、二月十九日コッチ港(平戸)を發したり。必ず時日を誤たず、且つ安穩に臺灣に到着し、余の書翰及び諸書付類(今其謄寫を送る)をオッベル コープマンなる、フランシス・

カロンより、貴下に呈したるなるべし。又カロンは、既に閣老伊豆殿幷に左門殿より我二艘の商船(即ちベッテン及びデリップ)と與に余の平戸より有馬に來るべきを命ぜられたる事、並にカロン出發までの成り行きの如何等を疑ひもなく貴下に告げたるならむ。商會の利を謀るに、平戸の君主及び代官の最も喜び望みし如く、余、自らも又デリップ號に乘りて有馬に行くの得策なることを知りたれば、我等は即ちベッテン號出發(臺灣へ)の後二日、平戸を去り、二月二十四日(正月十一日)反賊の城壘の傍に達し、其地に碇泊し、又我等の到着前二日、樺島より、我商會の端艇にて我通詞、レモンを海岸に送り、前記の貴人及び長崎兩奉行に我船の到着を報せしめたるに、通詞は貴人等の厚遇を受け、貴人等は我船の速に來れるを痛く喜びたり。翌日、我等貴人等に謁せしが、彼等は皆鄭重に我等に挨拶をなして、壘柵を視、城に近づく道を定め、曩に平戸より送りたる五箇の銃砲を据付くべき場處を撰び、且つ幕軍の壘より火器を放ちて、亂民の藁葺の小屋及び家宅を燒拂ひ得べきや否やを報せんことを余に請ひたれば、我等は此日、其場所を巡視して、口上にて所見を貴人等に語れり。

海と陸との位置を視察せしに、余は直に我銃砲は殆ど實効を奏する能はざることを知りたり(船長及び船中の諸友も皆說を同じくせり)。何となれば家屋は唯藁と莚とより成り、城壁の下部は、粘土もて作り、頂上の障堡は重き石にて築きたる、頗る高き壁にて圍まるゝを以てなり。貴人等は海よりも陸よりも、火器を放つのみにて充分奏効すべしと云ひあひたれども、實際、幕軍又は我等の砲臺より如何に發砲すとも城を落し得べきや覺束なし。

幕兵は日々城攻の道を作り居れるも、甚だ緩慢にて捗取らざれば、我等は若し此戰ひの終る迄歸着叶はぬことゝすれば、尙、永く此地に引き留めらるゝなるべきを恐る。風說に據れば、殿下は反民を平ぐるに幕軍に死傷少きやうに爲せと命せられたりとの事なれば、此事信ならば、此季候の間には我船(テリップ)の出發叶はざるや明かなり。

然るに三月十二日(正月二十七日)砲臺にて働き居りしに(到着後日々此處に來りし如く)、平戸の代官より閣老伊豆殿及び左門殿の名義にて、我等が船と與に平戸に歸ることを許されたるの報知を得たり。これ商會の利にして最も喜ぶべし。我

等はされど兎に角に代官を經て閣老に尙、暫く此地に滯在せんことを申出で、又、翌日、我等自身に口上にて再び此事を請ひたるに、貴人等は我等の功勞を謝し、且つ言つて曰く幕軍の攻道は、今は殆ど反賊の障壁に達したれば、彈丸の却て、幕軍に危難を生ずるに至るの恐れあり、最早、銃砲を用ひるの要なしと。此等の理由にて我等は出發を許されたるなり。

貴人等は余が頗る力を盡して將軍の爲めに勤めたるの勞を認め、特に我等の事業を詳記し、日々早飛脚にて、之を殿下へ進達する故、二日前、鐵砲破裂の爲めに腹部を打ち碎かれ、一言を發することなくして即死したるギリスの死も亦殿下に報ぜられたり。

此くの如き親密なる談話の後(貴人等は、予が銃砲の操縱を見る時には常に親密なる談話を爲せり)、余は別を告げ、直に平戸へ向けて出帆せり。

かく我等の懇切なる待遇を受けしは全く貴人等の我等の所業を頗る滿足に思はれたる證據なり。然れども幕府の攻道、既に賊壘に近きたる故、最早我等の銃器を要せずといへる申譯は果して眞實なりや否や疑はし。何となれば仄に聞く所

によれば、肥後の君及び龍造寺の君(此二君主及び伊豆殿、左門殿の輔助の爲めに來りたる同じ位階の二君主とに軍務は總て委任せらるゝなり)は、大軍既に集り唯決戰を待つのみの時に當りて、外人を招きて其援けを乞ふことは、如何にも日本人の恥辱ともなれば、此際、オランダ人を放還するを以て得策とすと論じたりといへばなり。

三月一日(正月十六日)亂民矢文を幕軍に射て、日本國中に忠にして勇なる者極めて多きに、何故なれば殊更に、オランダ人を招き寄せて征討の援けとなせしや、其故知らせよと云ひ來れり。

我等、更に信ず、伊豆殿、左門殿は、我到着前には、オランダ人の有せる此の如き名高き船、幷に同時に長崎より廻されし四艘の大船とを用ひなば、反亂を鎭壓する、何の難きことか之あらんと思はれたるなるべきも、我等は實際、此くの如き過分の望みに應ずること能はざりしなり。

以上二つの重なる理由にて我等は放ち還されたるならん。然るに余が其後、我等の執りたる事業を報告し、且つ曩に出したる請願の件に就き談合せん爲めに、長

崎に行きたりし時に、平藏殿は余に告げて云はく、嘗て自ら有馬の軍に到りし時、オランダ船の既に樺島の近傍に來り居ることを聞きたれば、豫てより親密にせる伊豆殿及び長崎兩奉行に告ぐるに、オランダ人は日本人に巨額の貿易額を有し居れば、永く其船を抑留し置かば、非常なる損害を蒙らしむるに至らんと。これ解放に至りし所以ならんと。これも亦遽に信じ難し。

平藏殿は、貴人等が我等出發の許可を與へしは、自身が右の談話を熟考せられたるに因るなるべしと云へり。兎に角其理由は何れにもせよ、我等が速に還ることを許されたるは、我商會には頗る幸ひなる事たるは明かなり。

日本人の言、少くとも此貴人等の言にして信じ得べくば、此度我等の勞役に酬ゆるの利益は遠からずして我商會に來るなるべし。

有馬を出發したる時までに、此一揆の爲めに、殿下の兵、殺されたるもの無慮五千七百十二人に及べり。二月十四日(正月元旦)の城攻の時には、後に殘り戰ひし者の多人數は或は傷けられ、或は殺されたり。目今殿下の軍勢は、奴僕人足を除きて八萬餘人あり。而してこはヨーロッパの風とは異なれど、皆整然として其陣を張れり。

此農民及び基督信者の大亂は、思ふに昔の大阪籠城よりも、夐に大なる困難及び影響を惹起するなるべし。此戰爭は唯、農民のみにて起りしにあらず、追放せられたる貴人、役人幷に人々の話には、僧侶なども多勢、農民に黨したりといへり。戰亂の始めに反賊共は烈しき進擊を爲さんと試みしが、肥後の君主に嚴しく追立てられ、遂に此古城に楯籠り、防禦に心を碎くに至りぬ。壘壁の四方には赤き十字架を附けたる無數の小旗を飜へし、其外、木造の十字架幾箇ともなく建て連ねたり。尙、落城の後俘虜中に交り居る貴人及び僧侶に就きては、他日の報を待つのみ。最早、長々しき鄙簡には倦み給ひたらん、希くは有馬軍に滯在中の日記抄錄を參照し、委曲を知り給はんことを。

一六三八年三月二十五日　　平戸商館　　ニコラス・クックバッケル

◎クックバッケルより、總督アントニー・フォン・ヂエメンへ贈りたる書

フランシス・カロン既にバダビアに到着して、閣老伊豆殿及び左門殿より我船ベッテン號及びデリップ號を、反逆を企てたる農民の楯籠れる有馬の城壘の近傍へ送れと要請せられたることを、貴下に告げたるべし。此招請を許諾することは商會

の利益なりと考へ、二月二十一日、コッチよりデリップ號に乘り込み、余自ら赴くに決し、其月二十四日、我等、其地に達せり。到着前二日、樺島より我端艇にて通詞レモンを遣し、上に記せる貴人等幷に長崎兩奉行等に我到着を報ぜしめたるに、通詞、歸り來りて、貴人等が我船の速に來れる事、殊に余自ら乘船して來れるを喜びて、親切に通詞を待遇したりと云へり。

此貴人等長崎奉行と與に、翌日、我船に來り、船中殘る隈なく巡視して大に之を嘆賞し、鄭重に我等に挨拶し、而して又我等に幕軍の壘柵を視、且つ敵城への攻口をも檢せんことを請ひ、又曩に平戸より送りたる五個の銃砲を据付くべき場所を撰び、又、幕軍の砲臺より火器を發射して、亂民の藁葺の小屋幷に家宅に火を懸け、之を燒捨て得べきや否やを報ずべきことを命ぜられたり。其日、我等は此場所を巡視し、意見を口上にて貴人等に語れり。(以下すべて前書と同一なれば略す)。

有馬に闌人を招き寄せ、且つ其船舶銃砲を使用するを見ては、何人も日本帝國には、其國兵のみにて百姓一揆を鎭むる力なきやと訝かり疑ふ理なれば、さてこそ貴人よりも、曩に有馬に來れと、我オランダ人に與へたる命令を幾分か修飾せん

爲めに、平藏殿の云へる如き說を採りたるなるべく、閣老伊豆殿は、長崎に逗留中此事を說明し、實驗にてオランダ人の心術を試みんとてさてこそ其援助を求めたるなりと云へりと。オランダ人もポルトガル人も共に基督信者なるに、同じ敎旨を奉ずるオランダ人が果して能く亂民征伐の命に從ひ得べきやこれ一疑たりしに、其後我等が能く勞役を執り十分に他意なきを證したれば、政府の人々も今は心を變じ、我等に關しては以前と異れる考を懷くに至りたり。

我等有馬に滯留中は、每日貴人方のみならず、尋常の者共さへも我船に來りて見物せり。餘りに多勢なりける故、遂には閣老伊豆殿幷に左門殿は、平戸の代官達に言ひ付け、此二閣老が自筆にて書かれたる許し狀を持たぬ輩には、何人たりとも乘船を許さゞるに至りたる位なりき。其後は人々多數の小舟を僱ひて我船の周圍を漕ぎ巡り見て滿足したり。我等は屢〻オランダ國民の聲譽の爲めに我船の更に一層大にして且つ戰鬪に適せる船ならばやと思ひたり。若し我等にして臼砲及び破裂彈を以て、城中の倉庫を打ち破り、あらゆる藁家を燒きて灰となし得たらば、我オランダ人の光榮は非常なるものなりしならん。

四月十一日(寬永十五年二月二十七日)幕軍襲うて終に賊の城壘を陷れたり。幕軍の兵士は大約八萬人を數へ、其外に奴僕人足等の大勢ありき。

亂民は老幼合せて大約四萬人と稱せられたるが、悉く屠戮せられたり。四人の首魁の中、以前佛像を彫刻して渡世せる一人のみ死を免れたり。此者は生擒せられて江戸に送られたり。

幕軍にても亂民の數と同じ位の討死あり。こは農民と戰ひて死せし者のみならず、味方の銃砲の爲めに殺されたる者も多かりき。こは左の事情の爲めなり。殿下が定められたる城攻の期日の前一日、飛驒殿は賊が棄てたる城砦の內にある家屋に火を懸けんと、三十の兵士を從へ進み行きけるを、龍造寺の君も亦之を見て閣老伊豆殿及び左門殿の知らざる中に殘らず手勢を引率して敵兵を打ち破らんと出發せり。然るに其日の早朝、兩閣老は明日まで城攻を待つべしと決したり。已に龍造寺の君と肥後の君とは、先鋒の爭論より不和なりけるが、此拔駈を見て、幕軍全體騷擾を起し、遂に賊を擊ちしばかりか、大將の命をも聞かずに幕軍互に討合ひ烈しき戰鬪を初めたるなり。

反賊の首魁三人の首級は野崎にて棒の先に曝され、其外數千の首も亦其地に懸け並べられ、長崎の港灣は幕兵又は反賊の死骸にて覆はれたり。重圍の間反賊は日々城内にて經文を讀誦し、一週に二度敎旨を說けり。此說敎を爲す者は肥後の國に生れたる十六歳の少年にして、反賊共に推戴せられ總大將と仰がれしものなり。城壁の四邊には赤き十字架を畫ける小旗幾個ともなく飜へされ、又木製の十字架も建てられたり。多くは其形小なるが、中には大なるもありき。日本帝國の風習に從ひて城即ち重なる障堡は直に取り毀たれて平地と爲りぬ。

有馬の君主は將軍の命にて切腹を仰付けられ、凡そ二ヶ月前、江戸にて之を行ひ、其舊領は濱松の君主に與へられ又唐津の君の領なりし、天草島は、一種の懲罰として奪ひ取られ、新に他の君主に賦與せられたり。

龍造寺の君主及び飛驒殿は、將軍の命令を履行せず、隨つて無用の人血を流したりとの糺問を受けて、先日幕廷に召喚せられ、二君主ともに各自己の邸に禁錮せられ、殊に飛驒殿は此外、種々將軍の命に違背せりとの咎めを蒙りたり。

近日中、此事、局を結ぶべし。我等は再び此背命者にて、且つ嫉妬深き大名(飛驒殿を

指す)の爲めに煩はさるゝ事なく、更に商會の事業に便益ある他の役人に、其職を授けられん事を望むなり。尙其他詳細なる事柄は願はくは日記簿を參照して知られよ。

一六三八年十一月九日　　平戸商館　　ニコラス・クックバッケル

幕府は初め、此騷亂を些々たる事件と輕んじ、參州額田一萬一千石を領するに過ぎざる板倉内膳重昌を征討軍の總督に任じたるが、内膳戰死し、亂徒、益猖獗を逞うするを見るに及びて、俄に周章し、助けをオランダ人に求め、將來必ず利益あるべきをほのめかして彼等を釣り出しおき、さて攻城の道も次第に進捗して最早其助力を須たざるに至りて、更に外人の手を借るは不面目なりとて之を解雇したり。其間の消息は、オランダ人も已に觀破したる如く、其書中に記載せられたるを見る。

一一、慶安元年オランダ使節參府

一六四八年慶安元年)九月二十五日オランダ使節アンドレウス・フリシウス及び

アントボニウス・ブロークホルストは、日本皇帝に上る贈物を載せたる三船に搭じて長崎を發せり。一行はオランダ人二十人、大阪より江戸までの道中の導手として、坊主三人、通詞三人外に日本人三十四人なり。平戸を經、馬關海峽を通過して東向し先づ兵庫に達し、大阪に着せしは翌年一月十三日なりき。オランダ人新來の報に接したる日本の男女は、之を見物せんとて犇々と河上の橋に集まれり。一行は美はしき船に移りて大阪に上陸し、一月二十日朝早く、荷物のみを前送し、一行中オランダ人、坊主其他四十四人は乘馬し、從者三百名之を護衛せり、而して一行の馬匹は百二十八頭を要せしと云ふ。淀を經て京都に到り一商人の宅に泊す。此帝都は大阪を距る十八リーグの美濃國にあり。こゝに帝居あり。これ一五八二年六月二十二日、暗殺せられたる帝信長の定めたる所なり。是より大津を經て桑名に到り、舟行ミアに到り、濱松より、益〻東して遙に沼津に到り、三島に着し、今までの馬を棄て、新に馬を雇ひ入れて箱根に上り、小田原を經、神奈川に到りし時、一行は、貴女の一行と遇へり。これ皇帝の姪にして、大老の近親に嫁せん爲めに都に赴くものなりき。彼女の從者は皆美々しく裝ひ、其若干は着飾れる馬に乘り、其鞍は

黄金もて縫箔され、其手綱は眞珠及び金剛石にてちりばめられ、兵隊は皆弓矢槍劔を帶べり。此貴女の一行は男子のみならずして、牛馬の牽ける車にのれるなほ數多の貴女あり、馬車は八角形にて車輪二つあり、其行列のオランダ人の前を通過し終るまで三時間を要せり。

・

かくて使節の一行は十一月終に江戸に着し、オランダ東印度會社代表員の常宿に泊す。それより使節は直に着京の義を知事シキンゴドノ及び式部長三郎左衛門殿に報じたり。市の入口より其宿所に至るまでは少くとも四リーグあり、街路の兩側には民家櫛比せり。そこには五十三の門あり、各門の距離は百八十歩づゝにて、夜にはすべて之を閉づ。江戸は北緯三十五度三十八分にあり。入江に近く、小川多し。そこに浮べるは小さき舟のみにて、水は少しと雖、貝類を產すること夥しく、其價貴し。此地にては、人口の多きため、供給も少からざれども、すべての物價は不廉なり。

民家の多くは泥土もて作らる。貴人の邸は壯麗なり。かゝる邸宅には多くの門あり、其中殊に形も大にして、且つ美飾さるゝはこれ皇帝のみ出入するの門口なり。

此門の開かるるは一年の中唯皇帝を迎ふる時のみなり、常には之を封鎖す、江戸は關東地方にありて、日本の他の都會と同じく外壁をめぐらすことなし。市街は可なり長くして巾五十間あり、其兩端に門あり。住民は若干の金錢を己れの地主に納むるの外、全く租稅を免せらる。民家は又多くは木造なれば、日本にては火事多く、時としては全市灰燼に歸することすらあるも、人民は、又直に其燒燃し易き木材を以て再び家を建つ。各市街には又必ず一個の大倉庫あり、こは石造にて火災の用意に貨財をこゝに藏めおくなり。

一行は皇帝病氣の爲めに容易に謁見を許されざりしが、漸くにして四月六日に至り明朝、進物を持して宮城に出頭すべし、皇帝病氣なれば、若君代りて引接せらるべしとの命ありたれば、命の如くに赴きけるに、途上には無數の人民相並びて見物せり。やがて宮殿に至り、四段の階段を上れば一の廣き室あり、其半分には美なる疊敷きつめられ、若干の貴人ありて見番せり。爰を通りぬけて使節及び其一行は數多の美室に請ぜられ、待つこと一時半にして、最初にフリシウス次にブロークホルストが皇帝の樞密顧問四人の前に召し出されたり。四人は帝の名代な

れば、使節は之に進物を奉呈し、終りて皇帝の世嗣なる若君に謁見し、少時語を交へて退出せり。只一商人と、オランダの一鍛冶及びコルネリウス・メーと云へるものゝみが後に殘りて、使節の贈物中の一品なる銀製の船の操縱方を日本人に敎授せり。これに要せし時間は二時間なり。

皇帝の宮殿は壯麗驚くべし。外壁は大石にて組み立てられ頗る高く、且つ、厚く、其上に箭眼を穿てり。外壁の外に水なき廣き濠あり、一橋を架す、橋に數個の穹窿あり。鐵門は厚き鐵の釘もて堅固にかためられ、立方體にして、二階あり、上階の各側に二つの長き翼あり、强き護衞兵之を守る。外壁の內側にも亦無數の警房ありて第二の濠にのぞむ、第二の外壁よりは多くの塔突出し、衞兵亦これに配置さる。第二の城門あり、其中に第三の濠あり、石橋を架す。橋の外に更に第三の門ありて他の石壁の間にはさまる。すべて以上の外壁は皆單純なる壁防にあらずして亦一の城廓なり。第三門より進みて行けば帝の殿あり。皇族の宮殿の間に一ときわ目立ちて莊嚴なるは帝の宮なり。三つの頗る高き塔もて飾らる。塔は各〻方形にして九階をなす。中央の塔は最大にして其上に二匹の鯱が尾を天にして安置せらる。

鯱は金板もて被はる。之に對して廣き一宮あり、其柱は鍍金され、天井は奇怪の彫刻を施され、屋根は又さながら黃金の如くに輝く。皇帝の外臣又は其陪臣を引見する時には、常に此殿に於てす。此宮の側に女房の室、數多、立つ。

四月七日の引接終りてより翌朝使節は又シキンゴドノ及び三郎左衞門殿よりの命令により再び上殿せしに、皇帝より使節への贈物あり、絹衣を贈られたり。出發前使節は舊例によりて皇帝の樞密顧問の各〻を見舞ひしに、又數多の贈物あり。一行は此度是非共日光に赴くべき豫定なりしも、其意を遂げずして、一六五〇年四月十六日江戸を發足して長崎に歸りぬ。

使節の一行は歸途、京都に內裏を訪へり。內裏は天に聳ゆる多くの屋根を有し、其周圍には石壇をめぐらせり。石壇には多くの像ありて飾らる。入口は廣き十五の銅の階段を上りたる處にあり、其各側に同樣の構造を有する番屋あり。何れも方形にして廣き室、數個の廣き窓、及び巧に塗られたる壁を有し、屋蓋は壁の四隅に突出し、鍍金されたる板もて蔽はる。此等の番屋のつぎには花園あり、之には一種異樣の壁を繞らし、壁の隅には八角に建てられたる宴會堂あり。此花園の觀者の

心を樂ましむることは名狀すべきにあらず。前記の銅の階段の頂上の各側に八個の壯大なる柱よりなる門あり、奇怪の彫刻を施せる金板もて之を葺く。中央の屋蓋は少しく他の上にあり、これにも色々の形像飾りつけらる。門の穹窿は各側豐かに鍍金されて頗る美に、床も磨きたる大理石もて被はれ、さながら鏡の如し。此門を通過すれば、高く廣き庭ありてこゝも同じく石にて美しく敷き詰めらる。これに續きて存するは即ち宮殿にして、其破風の端は他の一切の建物を拔きて雄視せり。門は頗る大にして各側に色々の像を刻める方形の柱あり、門に連接せる壁も亦刻まれ、之に載するに鍍金せる屋蓋を以てし、其端にも鍍金の玉あり、殊に各隅には二匹の臥龍飾りつけらる。第一の屋蓋の上に二階あり、こゝに、五個の大なる室房ありて、其各〻は前面に五個の二重窓を有す。隅には同じく鍍金せる伏龍あり。其上に第三階あり、此中央には一の廣く高き窓を有し、各側には二つを有す。此階の屋蓋は方形の塔にて終り、塔の屋蓋は尖れり。前面の左右側には贅澤なる裝飾を施したる屋蓋あり、こは皆黃金板を以て葺きしものなり。此金屋の後背に低き宮殿ありて、內裏(天皇の積りならん)は茲に住へり。其殿內の華麗なるは筆

のよく悉し得べき所にあらず。窓は皆最も美はしき絹もて被はれ、壁は印度の風に倣ひて漆を塗り、床には大理石を敷き、其上に疊をならべあり。其珍奇にして豪華なること唯驚嘆の外なし。

使節の一行は都より大阪に至り、これより海路、長崎に歸れり。

オランダ・カピタン即ち長崎商館長の江戸參府は、毎年、一回の定めにして常にフリシウス等の如き順序方法にて行はれ、道中の費用に、贈物の調整に、其經費中々に尠少にあらざりしなり。

一二、延寶元年渡來のイギリス人

オランダ人が日本に於て通商の允許を得たりと聞きて、イギリス人も亦來りて貿易を乞ひ、一六一三年ジョン・セーリスは初めて平戸にイギリスの商館を建てたりしも、商況思はしからず十年ばかりにして全く撤去したり。されど彼等はなほ日本と通商を開くの利なるを忘るゝを得ず、延寶元年(一六七三年)チャールス二世の時に至りて又もや來りて交易を求めたるが終に拒絶せられたり。左の紀行は當時のイギリス人デルボー、ギッベン、ラムスデン三人の手記せる所なり。

一六七三年六月二十九日朝、吾人は長崎の港に入りしに二三の端艇ありて吾人を遮れり。一艇は日本旗を樹て、他はオランダの旗をたてたり。端艇の日本人は吾人が何人にして、何處より來れるかをポルトガル語にて問ひかけたれば、イギリス語とオランダ語とにて、バンタムより來れるイギリス人なる旨を答へたるに、彼等は、其地に碇泊せよと命ぜり。二時間ばかりにして沿岸より九艇の小舟來れり。其中に二人の貴人あり、一人は奉行にして一人は書記官なりと云ふ。數多の通詞を伴ひ來りたるが、其一人はポルトガル語を話し、他はオランダ語を話せり。之を船室に請じたるに奉行は色々の問を發せり。イギリス人なりやの第一の問に向ひ、吾人はイギリス王の東印度商會に與へたる免狀により、四十九年前に日本人より得し如くに、彼等と貿易の途を開かんとて來れるものなるを告げ、又我王及び商會より日本皇帝へあてたる國書をも齎せる旨を語り、最初イギリス人が渡來せし折に、皇帝より賜りし日本文の御朱印の寫しを示したるに日本人は之

を讀みて解したる如く、寧ろ原文を見んことを欲したれば、原文は平戸より撤退の際に、日本政府に送付したれば今有せずと云ひぬ。日本人はなほ問へり、イギリスは今イスパニア及びポルトガルと和合せりや。イギリス王のポルトガルの王女を娶りてより幾年なるか、王子の數幾何なりやと。答へて曰く、吾人は目下、何れの國とも平和なり。王は結婚してより十一年なるも、子なし。西洋にては同盟を强固ならしめんために、他國の王族と結婚するの習はしあるなりと。吾人は日本人を喜ばしめんとて皇帝へ幾何かの贈物をもたらせし旨を告げぬ。彼等又問ふ諸君の宗教は如何。答へて曰くオランダ人と同一の宗教を奉ずと。又若干の貨物をもたらせし旨をも述べたり。日本人去る。

二時間の後彼等再び來りて、若しオランダ人の如くに通商の許を得んとならば、日本の國俗に從ひて銃砲彈藥をすべて日本に引き渡すべし。これ等の品は其まゝにして當分預りおくべく、皇帝の返事着次第、我等は上陸して家を有するを得べしと云ひ、船中のすべての姓名を調べ、一々之を檢してポルトガル人の混ぜざるやを確かめたり。三十日奉行又來りて曰く、イギリス人の去りてより已に四十

九年を經たり。何等の事情を以てかゝる長年月の間、渡來せざりしやと、答へて曰く、イギリスには二十年間内亂あり、又二回オランダ人と干戈を交へたれば、かゝる危險困難なる長途の航海を思ひつくの遑なかりきと。問うて曰く、船中に以前此地に來りしことある者ありや。曰く、一人もなし、海圖の助けによりて幸ひに航路を誤らざるを得たりと。前日に引き續きて此日も日本人は銃砲彈藥の運搬をなし、兵器は一切之を取り殘さざりき。彼等は其一切の預り品を書きとめたり。

時に臺灣にては、我寛文元年(一六六二年)明の鄭成功オランダ人を臺灣より驅除して此地を占領せし出來事ありたれば、日本官吏は又、此方面の消息に就きてイギリス人に質し、かくて後、又もや船員のすべての姓名及び年齢をたゞし、各個人の賣り捌かんと欲する品々、及び商會の貨物を、詳しく知らんことを望み、船主のものに付きても巨細にかきとめて去れり。

七月三日、日本人來りて吾人の知れる西方の新聞を告げんことを望めり。午後彼等は鮮魚、桃、梅、卵、大根、瓜、六匹の鷄、パン百塊を齎らし、其代價一小判半なりと云ふ。餘りに不廉なりとは思ひたれども、好意を謝して之を拂へり。吾人は國旗を飾り喇

叭を吹き鳴すも差支なきやを質したるに日本人は許容を與へたれば吾人は彼等の去れる後之を行へり。吾人は毎日甲板に集まりて祈禱し、讃美歌を合唱せり。七月六日、役人數名、二艘の小舟にて漕ぎ來りてポルトガルの宗教に就きて問へり。曰く、こはカトリコ・ロマノと云ふかと。吾人然りと答ふ。又問うて曰くポルトガル人は、サンタ・マリアなる女子及びサント・クリストなる男子の畫像を拜するや。尙、他にも聖徒ありやと。答へて曰く、かゝる畫像を拜する由は、聞き及べるも、其聖徒幾何あるやは承知せず。吾人は彼等と宗旨を異にすればなり。又問ふ、諸君の宗教を何とか云ふ。曰く改革教と云ひオランダ人のと同一なり。問ふ、聖像を拜せざるか。曰く、然り、吾人は宇宙到る處に其居を占めたまへる天地の創造者たる神を拜して之が偶像をかたどることなし。問、クリストとは何人ぞ。曰く神の子なり。問、マリアとは何人ぞや。由つて之を説明すれば、彼等は又問ふ、オランダ人は、神及びクリストを何と呼ぶか。答、ゴット及びクリスツス。問、イギリス人はポルトガルの宗教を何と呼ぶか。答、ローマンカソリックス。問、ポルトガル人はイギリス人を何と呼ぶや。答、ヘレチックス。此日は恰も日曜にて吾人は國旗を樹てければ、日本人は、今

迄樹てしことなくして今日に限りて旗を樹つるは何事ぞと訝りぬるに、吾人は七日目、七日目の日曜日にかくするが國の習ひなりと説明す。問、如何なる樣に神を拜するか。答、毎朝、祈禱によりてす。問、オランダ人も亦同じきか。答、然るべしと信ずと。凡て此問答を以て日本人は滿足するものゝ如く、數回同一問を繰返したる上にて細かに之を書きとめ、之に相違なき旨吾人をして調印せしめたり。かくて日本人は更に夜中、物を海中に投棄すべからざる事、船員をして謹直ならしむる事、海に泳がしめず、又、喧嘩せしむべからざる事等を警告して去れり。此夕一時半ばかりして彼等は又歸り來り、吾人が今樹てつゝある國旗は入港の時揭げし白と赤との線のみならで、十字をも有するは何故ぞやと詰れり。吾人之に答へて曰く、入港の時の旗は臺灣にて新調せし絹布製のものにて如何にも十字なかりき。これ支那人が日本人はポルトガル人を忌むが爲めに十字をも嫌へば、寧ろ最初の入港にかゝる幟なきを良しとすべしと忠告せる爲めなりきと。日本人は尙も此國旗を見むことを望みて已まず、入港の日は降雨ありて濕潤したれば、破れたりと答へしも未だ滿足の色なければ、之を彼等の面前に持ち來らせしに、始めて

安堵したるが如し。吾人又云へり、此國旗は已に數百年間、イギリス國民の揭揚する所にして、吾人の平戸にありし時にも之を用ひたりき。オランダ人も之を熟知せる筈なれば、就きて問はれたしと。日本人通詞の一人の父なる人は、嘗てイギリス人の通詞たりし經歷を有し、今尙存生すれば、之に訊すべしと語りければ吾人は更に日本人に注意して、吾人の十字章は崇拜又は迷信の爲めならで國民を區別せん爲めのものなれば、ポルトガル人の國旗と十字章とは大に意義を異にせるを述べぬ。日本人問うて曰く、イギリスは曾てポルトガル又はイスパニア政府の治下に屬し十字章を之に受けし事なきや。答へて曰く、吾人は決して彼等に服屬せしことなし。されど此國旗の使用は其起源頗る古ければ吾人は之を用ふるに至りし由來を、今こゝに確かむるに由なし。吾人の歷史を讀みて記憶する所によれば、凡そ六百年以前にありしと思はる。當時イギリス王は三大國民の君主にしてポルトガル王よりは遙に偉大なりきと。玆に於て日本人は初めて滿悅したるが如く、例の如くに一々之を書きとめて調印せしめ、居ること三時間ばかりにして去れり。此早朝吾人は沖の方に當つて五發の射擊の音を耳にしたり。オラン

ダ人の端艇は出でゝ探りしに二艘の帆船見えたり。吾人は其イギリスの船ならんことを祈ること切なりき。

七月七日朝六時、さきの帆船入港したるが、各二百噸のオランダ船にて百四十人の乘員を有し、四十日前バタビアを發せしものなりき。吾人は十字章の國旗を高く揭げたるに十時頃日本の二人の役人は通詞と共に來りて、江戸より返事の達するまでは當分十字章を附せる其國旗の揭揚を控へられたし。あまりにポルトガル人の十字章に類すれば人民誤つて之をポルトガルのとなすが故なり。其他の旗幟ならば、十字の章のなきものに限りて、之を樹つるも差支なしと云へり。通詞は此事奉行又は皇帝の命令によりて注意せるにあらず、日本の友誼を得て貿易の目的を遂げんには此儀必要なるが故なりと附言し、去るに臨みて江戸よりの訓令は二十日以內には着すべし。かゝらんには諸君は上陸して適當の待遇を得べしと云へり。然るに八時頃二人の書記官と七人の通詞とは又來りて、入港のオランダ船が齎せし情報によれば、イギリス人とフランス人とは聯合してオランダに抗敵し、オランダ人は由つてバタビア附近にてイギリスの一船を拿捕し、

イギリス人も亦、セイロン附近にてオランダ船を捕へたりと云へりと告げ、イギリス人は何故に同宗旨のオランダ人と斷ちて羅馬カトリックのフランス人と結ぶに至れりやと問ふ。答へて曰く、吾人のイギリスを發せし時には各國極めて平和なりき。バンタムにありし時にも然り。戰爭の事は今初めて之を耳にせり。其慥なる事實はイギリス又はバンタムよりの通信あるにあらざれば、何れとも言ふこと能はずと。是に於て日本人は長崎オランダ商館長マルチヌスツェーザルが認めし一紙片を取り出して、前述の事實の眞なることを確めたり。然れども、オランダ人は此地の陸海に於ては吾人と和好を保有し得べき旨を誓ひたるが故に吾人にも同樣の誓言をなし、之に調印せんことを求めたり。而して吾人之を肯んぜば、日本人は特別の恩典を以て吾人をもオランダ人と對等に保護しつかはすべき旨を繰り返し警告したり。

七月八日、日本人は三匹の小豚、鹽魚及び鮮魚、ビスケット若干外に酒一樽をもたらしたり。價總計六個小判餘なりと云ふ。吾人は感謝して代價を支拂へり。此地の物價は吾人が臺灣にて聞きしと異り非常に高し。されども些細の品にても已に政

府の命に依りて定められたるものなれば、吾人は之を拒まんにも由なく、吾人の上陸を得、貿易の許可を得るまでは、默して彼等の好意を謝するのさまをなさゞるべからざるなり。通詞の語る所には、オランダ人も同樣に高價を支拂ひつゝありと云ふ。

七月十日、旗の信號を行へるに二人の通詞、一小船に乘りて間もなく漕ぎ來れり。乘船を求めたるも應ぜず、よりて鷄及び清水、其他野菜類を欲する旨を告げしに、明日、贈るべしと云へり。吾人はイギリス、オランダの交戰に就きてオランダ船が如何なる新聞を齎せしやを問へるも、彼等は多く承知せざりき。翌日求むる所の食物を持ち來りたれば、吾人は彼等の要求するがまゝに三個の小判を支拂へり。十九日、バダビアより一船着港せり。航海に五十日を費したりしと云ふ。乘員はすべて支那人にて胡椒、砂糖其他綿布を載せ來れり。吾人は之にオランダとの衝突に就きたゞす所ありしも、詳狀を得る能はざりき。彼等は數日中にオランダのカピタンが三、四の船艦を率ゐてバタビアより來着すべければ、之によりて事情を詳かにするを得べしと云ひ又臺灣にて二艘の支那船と交話したるも戰爭の事

は、嘗て之を耳にせざりきと云へり。

二十日、朝十時頃、三艘の端艇にて諸役人七通詞を伴ひて來りて、曰く皇帝よりの返書到來せるが、其中には、我王がポルトガルの王女と結婚したる事情あるため、貿易は許しがたし、其外に別に通商拒絶の理由なき旨を認めあり、氣の毒ながらこれ皇帝の命なれば、之を如何ともなしがたしと。彼等は又二十日以内に順風を求めて出帆すべきを求めたり。吾人は之に向ひてモンスーンの經過せし後ならでは出帆しがたき旨を答へたるに、彼等は然らば幾日の期を得ば可なるやと問ふに、吾人は四十日は必要ならんと云ひたり。彼等は尙必要なる糧食に就きて訊問する所あり、モンスーンの後まで吾人の滯留を許可せんとするものゝ如し。彼等は幾度も、貿易の許可を得ざりしを氣の毒に存ずる旨をくりかへしたれば、吾人は既にこれまで二箇年の長日月を閲して此地に到來せし事にてもあれば、せめては、舶載せし貨物だけにても此地に賣り捌くことを許されたしと望みたるも、日本人は、皇帝の命とあれば、是非に及ばず、何事も諦められたしとてきかず、終に去りぬ。

三十一日、信號によりて通詞を招き、水薪米、麥、豚其他の品を要求し、吾人の許には最早貨幣なければ、イギリスの綿布、支那の絹布何れにても、日本人の好む品にてしばらく糧食の代價を拂ふことにしたしと述ぶ。我司令官は又すべての士官を召集して會議を開き、何時にても敵に對して戰ひを開始し得るやう、準備すべきを命じ、船員の一揆を防ぐために、なるべく彼等を慰諭し、多少、待遇上の不平ありとも、現在の長途航海にては、如何ともなしがたければ、後日、必ず、其償却をなすべき旨を約することゝせり。今や吾人の生命は船體及び積荷と共に彼等掌中のものなれば、吾人が胸中の愁雲は遂に霽るゝの時なし。神よ願はくは、吾人の前途をして安全ならしめ給へ。

八月二日、通詞は又來りて吾人の此地に碇泊する間、毎週吾人の要する糧食と、此地を發してバンタムに着するまでに吾人の要する糧食とを書き留め提出せよ、然らば、要求通り毎週必要の分を贈り來るべく、但し其支拂としては、イギリス品よりも支那品を以てせられたき旨を云へり。六日、一船の入港するあり、これ、去年十一月十九日、吾人が臺灣よりバンタムに派遣せし同僚船エキスペリメント號

なり。されど此船は悲いかな、オランダ人の爲めに拿捕の運命に遭ひ、船員は全く捕虜となれるなり。八日午後、オランダ船二艘入港せり。各三百噸位なり。九日、信號を以て通詞を呼び寄せ、清水其他を求めしに、日本人は、オランダ人の前日、齎せしイギリス船を知るやを問ひたれば、これ吾人の僚船なる旨を答へしに、彼等は、船上のイギリス人は、皆バタビアに幽せられつゝある事、イギリス人の若干が其地に於て絞罪に處せられたる事、なほ此外にセイロン附近にて二艘のイギリス船、四艘のフランス船の拿捕せられたる事を語れり。願はくは神よ、吾人を此敵の掌裡より救ひ給はん事を。

八月十四日、日本役人、通詞來り吾人の有する珍品を見たしと請ひ、且つこは奉行の命によるにあらず、全く自分等の私に之を買ひ求めたき旨を述べたれば持ち合せの品を出して示せしも、日本人は何れも之を非常に廉に値ぶみして買ひ求めず、吾人の許にありし支那貨物の若干をば、しばし貸して見せよ、明日返濟すべしとて持ち行きたり。

八月十五日、朝、長崎の主立ちたる役人、書記官はオランダ通詞六人、外二人の通詞

を、伴ひて我船を訪ひ來れり。其中の二人の通詞は、曾てオランダ人の通詞たりし旨を吾人に告げたるが、何れも他の人々よりは能くオランダ語を解したり。彼等は船上にある貨物は、公私何れに拘らず、持ち出さしめて之を見物し、その後ヨーロッパの事情、吾人の王、其同盟國殊に其結婚及び王子に就きて質問し、又太陽、月、星の運行、潮流の干滿、吾人が曾て日本字にて認めて彼等に與へし祈禱等に就きて尋ね、又イギリスにては日本字又は支那字を知れるものありやなど問へり。吾人は事實ありのまゝを語り、出來得るだけ簡單に解答を與へたり。彼等は珍品の若干を奉行に示さんとて借り行けり。午後に至りて食料と水とを送りこしたり。通詞の此時正誤する所によれば、バタビアにてイギリス人が絞殺せられしと云ふは全く虛報なりき。彼等はイギリスとオランダとの間に戰爭ありて、イギリス軍はオランダ船十乃至十二艘を擊沈し、全く敵を擊退したりと告げたり。吾人は出發の後嘗て一回も本國よりの音信に接せざれば、其詳報を得んことを待つや急なり。

八月二十二日、朝三百五十噸位の一船バダビアより着せり。此航海四十一日を要

したりと云ふ。其齎らす情報によれば、前に吾人の得たる新聞の外にオランダよりは何等の通信なしと云へり。彼等は又臺灣の國姓爺が頻に支那の沿岸を抄掠し、手當り次第に奪略を行ひつゝある旨を語れり。二十五日、通詞來り、風は北風となりたれば、一二日の中に是非共出帆の用意すべし。出發に際して要する品物を告知せよとありたれば、吾人は求むるものを語り、愈〻出帆の用意にとりかゝれり。八月二十六日、長崎政廳の役人は、例の通詞と共に我船に來り、薪、水、米其他の糧食を齎せり。吾人はすべて此等の計算をなし、支拂了りたれば、書記官は又もや吾人に色々の質問を發し、イギリス、我王、オランダ、フランス其他の事共に就き例の如く問へり。此時の問の中に一の新しきがありき。初め吾人は貿易を許されたりし時より四十九年の間、終に日本に渡來せざりしことを說明して、これ國の內亂による事、殊に此間オランダとの戰爭既に二回あり其間二十年も持續したる事を告げたりしに、日本人は、此間諸君がパンタムとは通商の關係を有しながら、何故に獨り日本には渡來せざりしやと問ひたり。吾人は之に答へて云へり、如何にもイギリスとバンダムとの貿易は持續せられたれども、こは胡椒貿易にて每年本

國より貨物を持ち行きて交易したるなれども、其額や實に微々たるものなりきされど、日本に向つてはイギリスより直航せんこと難く且つ、印度の諸地、東京、暹羅、カムボヂア、臺灣の諸要港に商館を置きて凡ての便宜を取り計らはざるべからざる譯合なれば、其規模の大小、日を同じうして語るべきにあらず。これ吾人の容易に冒險を敢てすること能はざりし所以なりと。日本人は此答を得て滿足したるものゝ如し。やがて彼等は又、風も風位能く、已に求むるだけの糧食をも送付したるなれば、明日は愈〻出帆せらるべし。預りおきし品は後刻返濟すべければと云ひ、又日本皇帝の令なれば出帆に際しては、決して發砲するを要せず、靜に帆を揚ぐべしと注意せり。吾人は、國旗は之を揭ぐるも差支なきやと反問したるに、十字の章さへなきものならば、不可なしと云へり。吾人は問へり。ポルトガル王の王女たる吾人の王妃にして萬歲の曉には吾人は又、日本に來りて貿易を求むるも可なるべきかと。日本人は、此時イギリス人にしてポルトガル人と和交せざる上は、オランダ人、支那人の現に我皇帝の交易を許したまふの例に從つて多分通商の許可を得べきことと想像する旨を述べたるも、必ず許可あるべしとは確言せ

ずして、寧ろ來らざるの優れるに如かずと云ひ、其理由は、日本皇帝の一度、口に發せさせ給ひたる勅語は、日本の諺に云ふが如く、汗の如くにして再び、返らざればなりと說明せり。日本人又問ふ、改革派たるイギリス人が舊敎派と婚を通ずるに至りしは、女性が通常其夫を勸誘して己れの宗旨に入らしむるが故に起因せずやと。吾人答へて云ふ、これヨーロッパにての例なり。何派の人も、依然己れの宗旨に固着すれども、國民全般は之が爲めに聊かの影響を被ることなしと。日本人、問、バンタムのイギリス代理人は、バダビアのオランダ總督の如き權力を掌握するか。其姓名如何。通常バンタムに居留するイギリス人の數幾何と。答、バンタムにては支配人がすべてのイギリス人を統轄せり。イギリス人の數には船の出入に付きて加減あり。オランダ人は、常に印度にて他の國民と交戰しつゝあれば到る所にて武裝し居るも、吾人イギリス人は平和の民にして、彼等とは、事違ひ通商を本務としつゝあるなりと。日本人、吾人に約して云ふ、此地碇泊中のオランダ船六艘の中、何れも、此六ヶ月以內に於ては決して出航せしめざるべし。諸君は六ヶ月を要せずしてバンタムに着し得べく、吾人は其無事の航海を祈るものなりと。由つて

吾人は彼等に其好意を謝して別を告げぬ。さても此氣むつかしき日本人との交際の、如何に煩累多かりし事よ。

八月二十七日、朝、日本役人は、約の如くに、吾人の兵器彈藥を小船に載せ來りて悉く返濟せり。彼等は出港に際しても、外海に於ても、苟も日本の沿岸にある間は、決して發砲することなかれ、逆風に遭ひて長崎に引きかへすことある時にも、入港に際して決して發砲すべからず、若し發砲するに於ては、吾人は何處にても日本人の爲めに國敵と見做さるゝに至るべき旨を、又もや懇ろに諭告せり。吾人は之に服從すべきを約し、彼等の厚情を謝し、是より支那の沿岸に向ひて赴くべしと告げぬ。日本人は歸れり。三時頃、吾人は長崎より四里ばかりの沖に出でたり。これ風位を見て其逆風なるの時には一旦港內に引き返し、日よりを見んが爲めなりき。二十八日早朝、通詞、來りて風も至極順調なれば、此時を外さず、發航せらるべしと云ふに、吾人は準備已に定りしとて愈、日本の國に別れを告げて去りたり。

長崎碇泊の間、吾人はすべて十二艘の船の入港するを見たり。バタビアより八艘、暹羅より二艘、廣東より一艘、カンボヂヤより一艘なり。此外オランダ商館附屬の

もの六艘ありたり。

一三、十七世紀初半期外人の日本民俗觀

これまで掲げたる外人の日本紀行其他は、概して日本民族の或特殊の時代又は、或特殊の地方に於ける觀察に止まり、自己の日本人に對する小交渉を中心とするものに過ぎざれば吾人はこゝに、さきに、日本西教史によりて十六世紀日本に渡來せし外國宣教師の文書をもとゝせる日本民俗に關する一般觀察を摘記せしと同じく、主に十七世紀日本渡來のオランダ人の言によりて作られたる日本國民性の概觀を傳せんと欲す。これさきにも記したる、アルノルヅス・モンタヌスの記する所によれるなり。

日本と呼ばるゝ國は唯一にあらず、三島より成る。其中の最大且つ最富裕なるは、五十三州に分れ、首府の名をメアコと稱せらる。第二の島はシムス(九州)にて九州に分る。其主要なる都市はウォスキム及びフナイウム(府内)なり。第三の島はシコクムとて四州に分る。こゝに有名なる土佐市あり。即ち日本の三島は六十六の小

王國に分れ、此等の小王國は一帝の管治に歸せり。全國は長さ殆ど二百リーグの距離に廣がる。但し其幅は之に添はず、最も廣き處にて三十リーグ、最も狹き處にて十リーグなり。周圍は不詳なり。北より南に連亘し、北緯三十二度より三十八度に至り、東は百五十リーグを隔てゝノバ・イスパニア(メキシコ)に對し、北はスキチア即ちタッタリー其他未知の國に接し、西は支那に向へり。支那の最東端にあるリャムポーより日本の最西の島なる五島までは五十リーグあり。又支那の東岸中、最西に存するアマッケン(澳門か)より五島までは二百九十リーグあり。南には廣き太洋あり。

氣候は大抵冷寒にして雪降り、地はあまり肥沃ならず。常食の米は能く生じて九月に之を收穫す。爲て之を食ふ。國中又數多の温泉ありて病を癒す。

日本人は背稍〻高く、中々に辛苦に耐ふ。これ其體格の强健なる徵(しるし)なり。十二歳より五十歳までは武事に從ふ。鬚を生ぜしめず。頭髮も種々なる形に理す。

如何なる艱難をも忍び、饑渴寒暑には馴れ居れり。小兒生るれば、たとへ、天候刺すが如く寒烈なりとも、之を携へ行きて急流に之を洗ふ。長ずれば母より執り上げ

られ、一切女性との關係を斷たれて、先、第一に狩獵の術を學ばしめらる。

家の床はすべて奇妙に疊をしきつめあり、疊は同時に日本人の臥床にして、彼等はそこに横り、枕としては、棒又は石を用ひ、しかも能く安眠を貪れり。此疊は又彼等の食卓にして其上にて食事をなす。食事に際しては、彼等は支那人と同じく奇習あり、且つ汚穢なり。二本の棒を各手に一本づゝ持ち之にて食物を支へ、ナイフも肉叉をも用ひざれども、棒を取扱ふや實に巧妙なるものあり。食堂に入らんとする時には清潔を保たんために、靴だけは脱せり。海岸の貧民は、非常に粗食にして、米と魚との外を取ることなけれども、内地の人民は毎日、支那人の如くに美食するなり。

食卓被ひ又はナプキンを用ひずして食器は小さき膳の上に据ゑらる。此等の膳は木造にて、其表は色々の色もてぬられたり。飲食に際しては奇異なる身振りをなすの習慣あり。彼等は葡萄酒を知らざるも、其代りに米にて製したる酒を飲用す。殊に日本人の愛好するは茶の粉を混じたる湯なり。こは貴人等の最も熱心に嗜好する所にして、其爲めに客を請じ、邸内には特別の室房をしつらふるなり。珍

器寶物は日本人の誇りとして人に示す所なれども、其茶を尊重することは我等の寶石を珍とするに優ること數等なり。

日本人の用ふる言語は一種なり。されども其發音は種々なれば、方言は非常に多きが如し。彼等は名詞に向ひて形容詞を適用せず。數多の語を用ひて其義を現す。尙之よりも甚だしきは調子が色々なることなり。彼等はアクセントのつけ方によりて意味を區別す。王公貴人は命令的の特殊なる方言を用ひ、平民は劣等の語を用ひ、男女も亦話し方異れり。而して文語は又口語と異りて、筆記する文字は一體あり、印刷する文字も亦別に一體を有して此二つのものは毫も類似の點を有することなし。書物にも種類あり、教義上の書、道德書及び士傳の書之なり。一個の字は一語を意味すること支那語又はエジプトの形象字の如くなれば、日本語を學習理解するの困難なるは實に豫想の外にあり。

戰ひは日本人の頗る喜ぶ所なり。彼等の武器は鐵砲、弓矢の外に刀あり。刀は非常に能く鍛へられあればヨーロッパ流の刀身などは、容易に之にて切斷せらるべし。

日本人は年齢によりて其衣服及び習慣を變ず。成年に達すれば色々の色に染め

られたる上衣を着す。こは長くして踵に達するものなり。外出の際には脚のあたりに之を長きヅボンの如くに結び付け、其上に日本人の所謂キモンと云へる短袖の衣を着く。彼等の靴には踵なくして、大指と第二指との間に角製の輪を附着す。彼等は又金箔の緣を有する扇を携へ、之にて顏面を蔽ひて日光を遮り、又暑ければ煽ぐ。貴人は傘を持ちて街路を歩行するも、平民は夏も冬も全く頭顱を露天にさらして被ふことなし。

日本人の習慣の吾人と反對するもの多きは不思議の至りなり。嗅覺の如きは吾人にありては快し、香ばしと思ふとも、彼等には全く然らず。吾人の甘しと思ふ皿をも彼等は唾棄す。吾人は夏時炎熱の候には清き冷水を飲むに、日本人にありては濁れる湯を飲む。吾人に在つては樂しき音樂、唱歌も、彼等には甚だ快からざるが如く、何處の國にても齒は白きを尊ぶの習ひならざるはなきに、彼等は之を厭ひて人工的に黑く染め、其色、黑ければ黑き程之を以て美なりとなす。習慣も違へば又違ふものなり。吾人は乘馬に馬の左側より乘るも、彼等は右側よりす。吾人は禮として脫帽するに、彼等は靴を脫して踝となる。人に敬意を表する時に吾人は

起立するに、彼等は坐す。吾人は眞珠や寶石を珍重するに、彼等は之を見ること砂礫の如く、却て鐵や土器の方を喜ぶ。彼等は病者にも消化し易き柔き食物を與ふることなく、魚獸の肉には鹽をも與へず、甚だしく粗食せしめて怪まず。此習ひ今は性となれるなれば、何故にかゝることをなすやと質す時は、彼等は口角泡を飛ばして之を爭ふなり。

かく迄も日本人の習慣及び識見が吾人と異れるにも拘らず、其政治の事業に至りては吾人と同樣の制規を有するなり。君主はたとへ貧にても、平時は名譽を以て其王宮に住居し、戰時には多くの强大なる軍隊を指揮す。小君主の上に皇帝あり、小君主は副王なるも、一度撰ばれて其任に當れば、專制を以て其人民を統御す。此等の小君主は、老衰すれば、私邸に退隱す。私邸は果園あり庭園ある養老の樂地なり。彼退隱すれば其繼嗣をして己れに代らしめ、少時より此目的を以て養成せられたる能力を之に適用せしむ。

王權に次ぐは僧侶の權なり。僧は迷信をひろめ、其權力を濫用してすべて教會に關する事務を總攬す。彼等は頭髮は愚か、顎までも剃りおとし、其言語、容貌、身振り

すべて事々しく形式に泥みながら、獨身の生活を營む。彼等は此聖職の外貌にかくれて貪慾豪奢をなすも、一般人民は全く文盲なれば、彼等を以て慈悲の神秘的力を有するものなりと迷執し、かゝる惡魔を支持せんためには、如何樣の犧牲を供するをも厭はざるなり。彼等は又多く葬儀に列し、哀歌を唱へつゝ死者の柩に從ふ。僧は多くの階級及び社會に分たる。されど皆合稱してボンズと呼ばる。多くのものは貴人の出にして餘儀なき事情より僧職に加はりたるなり。

日本にては又青年教育の爲めに多くの小學高等學あり。そが維持の爲めに巨大の國費を支出す。僧侶は、もと、此方面に於て最高の名譽を以て遇せられしも、福音(耶蘇教)のこゝに宣傳せられてより彼等の假面は褫がれて復、往時の聲價なく、寧ろ嫌惡せらるゝに至りたり。

第三の階級は市府の官吏、之に次ぐは商工民なり。主なる都會には、多くの傳令職及び印刷所あり。最下の階級に屬するは農民なり。彼等は其貧なるが爲めに富者に從屬せり。

以上の諸民には多くの德あり。第一に彼等は概して善性なり。親切にして愛すべ

し。其理解は俊速なり。記憶も能く、亦想像力にも富めり。其正確の判斷及び學問等に於ては獨り東方の諸國民に超越するのみならず、吾人西洋人にすらも優る。されば彼等の田舍者及び教育を受けざる兒童の如きにても、其懇切典雅なるに於て宛然一の紳士なり。彼等は我等ヨーロッパ人よりも早く、ラテン語、諸種の工藝科學を知得す。貧なることは日本人にありては恥とせられず、且つ、之が爲めに人に賤めらるゝことなし。彼等は常に其居宅を清潔にし、衣を更へて人を訪ふ。すべて粗野なる語を發し、大聲に語るが如きことを忌み、盜賊、僞誓又は遊蕩も亦甚だしく厭はる。名譽を得るの慾望頗る熾んなるも、亦敢て己れの上長を敬するを忘れず。名譽のためには何事も犧牲にす。僞りて人を訴ふるは、彼等に於ては罪人なり。故に下賤の人にても、人に邂逅する時はこれに相應の尊敬を表し、假令、其人の不在の時にても、決して之を惡し樣に云ふことなし。貴人の會話は主として他の功名、美德の讃美推稱なり。假令、下賤の日雇人にても、其日常敦厚ならざれば、雇主は直に之を解雇す。要するに、かゝる人物を用ひて爭鬪の起るなからんことを心せるのみ。されば人々、たとへ古き怨みを心に懷くとも、決して之を言辭に表さず、僅

に悲しき不滿の面持をなすに止まり、事の善惡曲直にかゝはらず、之と爭ひ、又は人の仲裁を求むるが如きことあるとなし。すべて多言は、日本人にありては、品位ある人々の大をなす所以にあらずとせらるれば、其街道に出でゝも通行する平民にいさゝかのいさかひあるをも見ることなし。夫と妻と、親と子と、主人と僕との間には勿論衝突なし。何事も沈默靜謐に葬り去られ、何事かの小破綻ありとしても、これが友人によりて繕はれ、和解せらる。よし其非行者を罰することありとするも、(かくの如き事は極めて稀なれども)之に對して用ひる語はすべて温柔なり。この故に、日本人には、吾人ヨーロッパに於けるが如き法廷なく、法律なし。彼等は私怨をば公敵に對する戰爭に於て償却す。如何なる時にも己れの不幸困難を愁訴せず、又己れの損失を憂へず。心を食ふなる激しき悲哀、胸裡に存するとも、能く樂しげなる顏貌を以て之を蔽ふの驚くべき能力を有す。即ち此くの如く日本人は無用のよまひ言を連ねて他人を煩はすことを避け、友人ありて何事なりやを問ふも僅に微笑を以て之に酬ゆるか、さなくば、其事の毫も憂ふるに足らざるを示す位が關の山なり。事は稀有なるも、若し何人かゞ人の讒謗を被りたる時には、如

何に內心には之が爲めに煩悶すとも、更に之に頓着せざるが如く、常にかはらぬ面持をなす。これ人事にはとかくに恒なく、移り易きが習ひにして、所謂人間萬事塞翁が馬の譬の如くなるも、此國にては別して轉變の樣急激にして、昨日の富者は今日は無資者となり、乞食は一躍して王位に登り、王侯忽ち無位の凡俗に墮落すと云ふが如き現象不斷なれば、之を目擊せる此國の人民が、たとへ最高の榮位に昇れりとて、曾て最下の境遇を忘れず、不時の變に備ふるの覺悟宜しきより出づることゝは思はるゝなり。思ふに此くの如きは決して年歷や經驗によりて獲得せらるべき德にあらずして、寧ろ自然のものなり。生得のものたるなり。日本人の兒童を見よ。彼等は既に其容貌に於て其會話のさまに於て偉大の精神を包藏するを認むべきにあらずや。されどかゝる美性は又同時に多くの惡質と共存するが故に、常に表に現るゝものにあらざるなり。

日本人の宗敎は偶像崇拜なり。彼等は信仰、敬拜の袖にかくれて惡事を行ふ。殘忍流血は其結果なり。ボンズは即ち此宗敎の說敎者、牧師なり。僧には異見存するも靈魂の不滅を信ずるに於ては皆合致せり。其中の或ものは團體をなして公然運

動し、他のものは又專ら貴人の家の說敎師たり。公然、說敎するものは、未來に於て地獄の慘苦を被るべきを說きて其敎を弘布せんとしつゝあり。以上の二團の外になほアミダ及びシャカを拜する他の一派ありて、祖師の敎を演義す。これにも亦劣等の敎派ありて、專ら俗事に關はり、健康及び富を求むるが如し。之をカミと云ふ。

神は無數に存すとも、なほ日にまし增加しつゝあり、王や其他文武の功業を樹てたる人死する時は、彼は其崇嚴なる葬儀の際に於て神の列に入れられ、ギリシア人、ローマ人が其祖神及び英雄を拜したりしが如くに尊信せらるゝなり。日本人の色々の德の中にても、こゝに注意すべきは彼等の特殊の能力にあり。そは彼等が胸に色々の禍心を包藏しつゝありながら、面には信神熱誠の樣を現し得るの能力にあり。非常なる不幸に遭遇し、必ずや死を以て之に報ゐんと誓ふの時にても、彼等は微笑し、其言語に其容貌に其態度に唯々尊敬愛情を表するのみ。

日本人は最も復讐を好む。彼等は街上を步みながらも、若し目ざす人に遇ふ時は窃に之に近より、やにはに刀を拔いて之を斬り、徐に之を鞘に收めて何事も起らざるが如く平氣にて又步み居るなり。時としては、たとへ、爭ふ事あらざりしとも、戲に刀の切れ味を試めさんとて、所謂ためし斬りをすらも行ふなり。されば戰敗の結果、敵手に落ちたる町又は村の運命は憫むべきものあり。何となれば、敗者は其財產の掠めらるゝは、もとより、其人民も老幼男女を問はず、等しく刀のさびと化するなればなり。之と同じく一黨、又は、一軍も一旦戰ひに敗れたらんか、生き殘れるものは、一人もあまさず、斬りさいなまれ、單に虎口を脫せしものも、土人の殺害を免るゝ能はざるなり。窃盜は日本人の厭ふ所なるも、强盜及び斬殺は彼等の却て誇りとする處なり。故に此國にては、陸上には、强賊の殺人やまず、海上には又海賊跳梁す。

日本の婦人は又己れの子を愛するの情に乏しく、之を誕生するに先ち、若くは生みて徒に之を殺すもの多し。ボンズは墮胎の目的を以て婦人に助力し、之に藥を服用せしむ。若し藥力、効なかりし時には、嬰兒の安產するや母は其頸部を厭して窒息せしむ。これ他なし、兒童を養育するの勞を逃れんが爲めなり。貧困の境遇にあるものに至りては殊に然りとす。

病者、不具者又は旅人の爲めに公設の病院、病舍なく、又私設の施備すらもなければ、此等の人々は人里離れたる所に其居を結びてこゝに靜養せざるべからず。幸ひに病癒ゆれば可なれども、若し死したる時には、屍體は放棄の運命に遇ふなり。

日本人は何樣の犯罪たるに拘らず、三種の罰より外に課することなし。兩足の皺を鞭つ事、追放及び死是なり。死は斬罪なり。されど所によりては、盜賊も大罪を以て目せられ、之を車に投じて普く公衆に示し、然る後之を磔にし、市に近き路傍に十字架にはりつけて立たせおく所もあり。謀殺の嫌疑を被りしものある時は、王は人をやりて其居宅を蟻の爬出づべき隙間もなきまでに取り圍ましめ、二つの處分案を提出す。一は自殺するか一は降服して縛に就くかなり。若し降服する時は、直に赤熱せる鐵印を之に捺して其行く所として彼が大罪人たるを公示すべからしむ。自殺を欲する時は腹を屠り臟腑の表出する頃、頭を傾けて侍臣をして之を斬り落さしむ。介錯は君主に對する侍臣の厚意親切なり。陰謀の謀主にして既に此くの如きの最期を遂げなば、殘るもの共は謀主の死を見て永らうべきにあらずとし、奮鬪して然る後互に刺し違へて斃るゝなり。小兒にありても、私鬪に

憤怨おく能はざる時には又大人の如くに屠腹するものあるを見る。

隨分思切つたるでたらめを書き並べたるものと云ふべし。されど十九世紀に於てすら、ヨーロッパ人の多分は日本を以て支那の一屬邦なりと思ひ居りし程なれば、まして十七世紀に於て當時の旅行家の誇大の談話或は紀行により、之を潤色して小說的に作りなしたる此種の書籍に、かゝる虛僞を傳へたるは强ちに無理ならずとすべし。日本の地理に就きてはモンタヌスは左の如く記したり。

土人は日本の富裕なる此島をニッポンと呼びしも、以前イスパニア人はアルガンタナと云ひ、又耶蘇紀元千二百年有名なる記者パウルス・ウェネーッス(マルコ・ポロ)はジパングリーと云へり。此島は東方に一大洋を隔てゝカリフォルニア及び新グラナダと對し、西の方はコルカ島及び支那大陸に面す。フーグ・リンスホートは日本より支那に向ひて延長する最も近き岬を以て八十ロリーグの距離をなすと云へり。北の方には蝦夷國及びアニアン海峽あり、海峽の彼方はこれアメリカの海岸なり。南には又フィリッピン、ミンダナオ、ギロロ、及びモルッカ等の群島あり。

日本は五州に分る。ヤメッエロ(山城か)越後、越前、關東及び奥州之なり。此外、西國及び四國の二島あり。日本島には都及び江戸の二首府あり。元來五十四國に分裂し居りしも、此程此等の小王國は皆江戸に其宮殿を有する唯一皇帝の統一に歸せり。四國及び西國の外に日本の周圍には尙數多の小島ありて皆銀を產す。ヒウ、タカシマ、イキクチ、カンガ、フィランド(平戸)、メアクシマ(宮古島)、オユノ、コシク、ベロエ、隱岐、ムルガン、アヴァンス、メットガマ、メホミアニシヌ、佐渡等なり。ウルカニア(噴火島)は現に噴火しつゝありて四國と高島との間なるヂエメン海峽の彼方、西に當つて横る。(これ櫻島のことならん)。

日本の北東地方は即ち奥州なり。蝦夷の荒地に接す。兩國の入江は四十リーグ位に過ぎず。蝦夷は山國にして又毛皮を產す。日本皇帝が、鋭意、內帑を惜まず、人をして其內地及び外海を探らしめつゝあるにも拘らず、其廣さはなほ不明なり。探檢者は何處まで進みても更に其窮極する所を知らず。土人も皆蠻人のみなれば、之に地理を質すも自己の住地以外の事を知るものなし。

一五六五年二月二十八日の日付にてエスイタ宣敎師なるロドウィク、フローユス

は其印度の敎父に左の如き一書を送れり。曰く、日本の極北、都より約三百リーグを隔つる所に一大國あり、野獸の皮を着、全身多毛髮髯頗る長き蠻人之に住す。彼等は飲食する時には、杖にて髯を卷き上ぐ。酒を好むこと甚だしく、又戰ひに當つて勇悍なれば、日本人の之を恐るゝこと甚だし。若し鬪ひて傷を負ふ時は、鹽水にて傷所を洗滌し、之を乾すのみ。胸に鏡をかく。こは楯となるなり。劒をば頭のまはりに結び付く。彼等は月を拜す。蝦夷に近きゲスエン地方に秋田なる大市あり、彼等は多數此市に來りて貿易し、秋田人も亦時々蝦夷に赴く、云々。

コルネリウス・ハザルトは又其日本史中に記して曰く、日本はアジアの極東に位す。支那より隔たること、五十リーグ、アマカオ市へは二百九十七リーグ。南方は大洋のあるのみにて、そこには一の陸地も知られざることなれば、日本は之を世界のはてと呼びなすを得べし。數多の島より成るを以て地理學者は之を島嶼の世界と云へり。其主なるものは日本、シムス(九州)、四國にして六十六國より成る。其中、日本にあるは五十三にして都は其首府なり。シムス(九州)に九國あり、臼杵、府內及び鹿兒島は主なる都市なり。四國には四國あり、これ等の全部を合して日本の大

さは全イタリア位のものなり云々。

ハザルトの言は非常なる誤なり。第一に日本を支那の西にありと云ふはあまりの暴論なり。第二に、日本の廣袤をイタリア位に過ぎずとするも妄なり、江戸の位する關東より日本の極北なる秋田に到らんとせば二十七日を要するの事實を見て日本の遙にイタリアよりは大なることを知るべし。

此等の粗雜なる日本觀より出發して一度ケムプエルを繙く時は、何人も先其對照の顯著なるに一驚を喫せずんばあらざるべし。

一四、ケムプエルの日本觀

エンゲルブレヒト、ケムプエルは、一六五一年(慶安四年)ウェストファリアに生れたれば、元來ドイツ人なり。其父は牧師なりき。慶安四年は、由井正雪不軌を圖るの年なり。彼幼時ハンブルグ、リーベック等に學び、クラコーにては哲學士となり、それよりケニヒスベルグにて、四年の間醫學及び自然科學を研究せり。一六八一年スエデンに赴きしが超えて二年、カールナ一世の、使節をペルシアに派する

に及び、隨行して其秘書となり、居ること二年にして更にオランダ東印度商會のペルシア灣に於ける船隊の醫長に轉じ、一六八九年九月バダビアに赴きてジャバの博物を研究せしが、翌年(元祿三年)五月、長崎オランダ商館の附屬醫に補せられたれば、此年秋を以て任地に渡航せり。ケムプエルはこれより日本にあること二年にして、二回とも、オランダ、カピタンに伴ひて江戸に參府し、細かに日本の自然及び社會を視察せり。一六九二年十一月日本を辭してアムステルダムに歸りしは、滿一年の後なりき。一七一六年(享保元年)年六十六にて鄕里に逝去せり。彼が旅行の間に蒐集せし材料及び認めたる手記は中々に浩瀚のものなるが、生前終に出版の運びに至らず、イギリス人某之を買收し、ショイヒツエルと云ふ人之をイギリス語に飜譯して一七二八年(享保十三年)即ちケムプエル死後の第十二年目に公刊したるが有名なる日本史の第一版なり。獨逸の原文は終に刊行せられざりき。此書の如何に重要なるものなりしやは、更に言を費すを要せず、實に此後數百年に亘りて日本に關する外人唯一の典據たりしなり。ケムプエルは如何にして僅々二年の間に材料を蒐集して彼の尨然

たるの日本歴史を作成するに至りしやを其書の自序中に細說して曰く、

日本の內事に付きては事隱秘に屬して容易に之を知ること難し。されば衆往々にして云へり。外人にして他國の事情を探討すること夫れ容易ならんやと。實際に於て余自らも、日本に於てはその他國よりも一層難きものあるを經驗したり。ローマカトリックの宣教師放逐せられ唯オランダ及び支那の商人のみさながら囚人同樣の取扱を受け其他の外國人との交通を全然杜絕せしよりこの方、國人は深く警戒して外人を遇するの法を設け、凡て其監視の下に商業を營ましむることゝなれり。凡そ直接我等と交際する人々は、嚴に誓約して濫りに我等と談話を交ゆることを得ず、國家の事情、宗旨、政事の秘密各國の景況、其他許多の事情、一切之を漏洩するを許さず、各人常に此誓約を服膺す。尙之に止まらず、之を確守せしめん爲めに、年々其誓言を新にするなり。當時日本の外人を待つこと此くの如し。オランダ人が獨り通商を許さるゝこと年久しきにも拘らず更に其國當時の實狀を知るに據なかりしは之が爲めなり。されど日本政府の、戒嚴此くも周到なりと雖、適宜の方法を用ひれば、其間に於て又全く之を得るの道なきにあらず。抑、

日本人は義烈にして、勇猛の性質あり、衆人の崇拜せず又多くの人に知られざる神佛の如きをも尙且つ輕んぜず。而も一度執つて之を信奉せんか其免るゝこと能はざるの鼎鑊をも之を辭せずして頑として其誓ひを變へず。若し夫れ此高慢と其鬪爭を好むの性癖を除けば、則ち、溫和怜悧にして、好奇の情ある多く其比を見ざる所なり。彼等は衷心に於ては外人との通商交易を望み、中にも我學術工藝を習得せんと欲するも、只我等をば商賈にすぎず、最下等の人民なりとして輕んずるなり。これ蓋し嫉妬と不信とに基くなれば、此際友誼を結びて百事を聞知せんとせば、先づ其心を收攬し、之を欺き、貨幣の如きは之を惜まず、彼等に握らしめて其貪心を充足せしめ、彼等を尊重して、之と親通するを第一とす。余はかくして彼等の心を籠絡したり。余は余に近接する諸人に藥劑の事や星學、度學を敎授し且つ洋酒を與へて、頗る自由に余が望む所を之に問ひ、其國の政治、宗敎、風俗、人情、物產等細大遺す處なく聞き、曾て秘密にされし事をも遺憾なく覺知するを得たり。凡て余を訪ふものに質問し、漸次余が素志なる日本志を著述するの材料を蒐集せるなり。余は此事に就き一少年の補助によりて大に裨益を得たり。彼は年二

十四能く支那語及び日本語を修め、余の長崎に到るや、從僕となりて余に侍し、由つて內科及び外科の敎を受けんことを求む。彼は余在留の二年間、常に余と共にあり、江戸二回の參府にも余に隨伴せり。余は此間、充分に彼にオランダ語を敎授すると能はざりしも、彼は讀み且つ書くことには却て遙に我通詞に勝りたりき。余又彼に解剖及び生理の學を敎へ年々我收入に應じて彼に給金及び雜費を與へ、彼をして其代りに此國の政治、宗敎、世態、人情、風俗、歷史等古今百般の事相を提示せしめたるに、彼は余が見んと欲する書籍は之を購求借受し、余が知らんと欲する事實を研査するの任に當りたり。而して余は給金の外、彼に何等の報いる所あるなし。思ふにかゝる事業は、外人の最困難とする所なれども、彼が能く余の意を體して協力勉勵したれば、此日本志も漸くに爰に其大成を見るには至れるなり。

鎖國の當時にありて日本の國狀を究むるの尋常一樣の困難にあらざりしは、之を諒すべし。かくて出來上りたるケムプエルの日本觀の大要左の如し。

日本の版圖

日本本土の諸國諸島の外に尙遠隔の地方ありて、此等は正しく云へば日本皇帝

に屬するものにはあらざれども、兎に角、皇帝の宗主權を認むるか、又は其保護の下にあるものなり。即ち第一は琉球群島なり。こは日本帝ならで、己れの征服者たる薩摩侯に服從す。第二は朝鮮なり。こは高麗の南部三分の一の地域にして、皇帝陛下の名によりて壹岐及び對馬の君主之を政治す。第三は蝦夷なり、こは松前侯皇帝に代りて治む。松前侯の本領は奧州なる一大州の一部分なり。

一、琉球群島を以てリューコニエー即ちフイリピン群島と混同すべからず。此列島は西國なる一大陸の薩摩州及び其附近の島、種子島の南西に橫り、殆ど北緯二十六度に達す。日本人の言にして信ずべくんば、此列島は非常に豐饒にして米は一年二回之を收穫するを得べし。住民の大部分は農民又は漁民にして頗る善良の民たり。一日の勞を終れば、皆米酒の一瓶を手酌し、又樂器をかなでゝ怡悅す。其言語によれば、彼等は支那人の一支族なるが如し。近時、韃靼人が支那中國を侵して之を占領したれば、中國の民は多く東印度諸島に移り、一部分は琉球群島に渡りて主として商業を營み、得意の技倆によりて舟を海上に乘りまはせり。今を距ること數百年、此島亦薩摩侯に征服せられ、爾來其奉行及び守備兵はこの地に駐屯

して善政を施せり。薩摩の人民は收穫の三分の二を其君主に徵せらるゝに、琉球にては、僅に五分の一を徵せらるゝに止まれば、其人民の薩摩侯に心服するも當然なり。されど、琉球人民はかくの如く薩摩に從ひながらも、尙忠義服從を示す爲めに毎年一回支那の君主に貢物を呈しつゝあり。彼等はツングース人及び日本人の如くに自身の內裏即ち世襲の王家を有し、王をば祖神の子孫として崇拜す。王はヤヤマ(八重山か)に居住す。こゝは大島よりは程遠からず。

二、高麗は支那の沿岸に對して韃靼より日本に向ひて突出する一半島なり。日本人によれば、古は三州に分れしと云ふ。其最南、日本に最も近きを日本人呼んで朝鮮と云ひ、中部を高麗、最奧、韃靼に至る迄をフアクサイ(百濟か)と云ふ。時には三州の名の各を以て全半島の稱となせし事もありたり。日本人の記する所によれば、土人は支那に起れるものなり。其主は屢〻變じ隣邦のタタール人と同盟せし事あり、又は之に征服せられし事あり。ミカド仲哀は之を征せんとして陣中に薨じたれば其皇后神功は、亡夫の武器を帶して雄々しくも之を伐ち、終に漸く紀元二〇一年に之を附屬國となせり。然るに幾もなくして朝鮮は、北方の韃靼人と結びて

日本と斷ちたれば太閤の天下を統一するや、日本と朝鮮との關係の歷史を閲して、曾て朝鮮の我に屬せしものなるを悟り、之を口實として侵し、尙支那大陸に入らんと計畫し、先づ、大使を高麗にやりて再び、日本の宗主權を認めんことを求めしめしに、高麗人は之に答へず、却て其大使を斬殺したれば、太閤は怒つて征討の軍を發し、太閤の諸侯は七年の戰役に高麗人と韃靼人との頑固なる抵抗を擊破して、終に高麗をば再び、日本の附屬國となしたり。然るに太閤死して其遠征軍の歸還するに及びて、彼の繼承者なる家康は、高麗に命ずるに三年毎に使節を日本朝廷に遣はし、其主權を承認すべきを以てせり。此時より以降、高麗は次第に韃靼の權力の下に落ち入り、日本の守兵を驅除して朝鮮の最南に至るまで、今は亦日本人の隻影を見ざるに至りたり。高麗の海岸は日本浬約四十八里あり、對馬及び日本大陸との間には岩礁及び小島數多碁布し、其多くの無人島なれども、日本人は此等の島の主なるものに、優勢なる守兵を配置して、之を通行するすべての船舶を誰何し、附近海面の領權を握れりと云ふを楯に、其積荷までも取り調べたり。

三、蝦夷は日本最北の島なり。最初の公方なる賴朝之を侵して平げ、松前侯に其統

治を委任せり。然るに土民は外人の政治を厭ひて松前侯の其地に殘せし守兵を襲ひ、只一人を除きて殘らず之を殺戮しければ、松前侯は三百の馬匹を率ゐる大軍を派してこれを壓服せんとし、蝦夷の君主は、之を聞きて事の爲すべからざるを知り、使をやりて降を乞ひ、暴徒の首魁二十人を引きわたして事落着せり。二十人はやがて頭を刎ねられ、又蝦夷の海岸に梟されたりと云ふ。此一擧によりて土人は漸く日本人を恐るゝに至れるも、とにかく蝦夷は中々頑固噪狂の人民なれば、油斷なりがたしとて、松前侯は有力なる守備兵を島の南方に置きて再擧に備へ又蝦夷の首長に命じて毎年一萬石の價ある貢物を齎せる使節を己れの許に遣さしめたり。此島は北緯四十二度に位して奥州の一大州と相對す。奥州はスガール(津輕か)及びターヤサキ(龍飛崎か)の二海角によりて一大灣をなせり。これより蝦夷へ渡るに僅に一日にして足るも、潮流は或時は西し、或時は東して方向一定せず、且つ其流、頗る急なれば、如何なる日にても容易に渡海せらるゝと云ふことを能はず。蝦夷島の大さは九州位ありと云ふ。其形に就きては余が日本人より蒐集せる材料によるも、亦地圖によるも一定の言をなし難く或人は之を圓形なりと云ひ、或人は頗る不規則なりと云ふ。余はフリースが、かつて日本の北方に發見したりし邦土は此島の一部分には相違なかるべきことを信ず。日本地圖の或るものによれば、北地の西南部はマッキと稱せらるゝも、之が果して島嶼なりや、將た他の大陸に連續するやは疑問なり、其土民は勇悍なる蠻民にして長髮、長鬚、頗る、射漁に巧に、大部分は全く魚類のみにて生活し、又頗る汚穢にして且つ淫猥なりと云へり。但し此點に關する日本人の言は多く信賴しがたし。何となれば日本人は極端に清潔を好み且つ迷信深くして身體を清淨にするに力を注ぎ、我等オランダ人をまでも不潔なりと非難する程の國民なればなり。蝦夷の語は高麗の語に似たりと云ふ。

此島の奥に北に當りて日本人の所謂奥蝦夷あり。かゝる國の存する事は地理學者の疑ふ所にあらざるも、之が韃靼又はアメリカの如何なる地位に當るや、アニアン海峽即ち航海者が北洋より印度洋に赴く海口と想像しつゝある此希望の水路の那邊にあるや、何等の海峽をも其間に置かずして此陸地が直に韃靼又はアメリカに接續せるものなり等の點に至りては、何人も之を確かむるに由なし。

余はムスコビー及びペルシアの旅行及び日本滯在中に此事を專念研究し、モスクバ及びアストラハンにては多くの東方旅行者に其シベリア及びカタヤを經て支那に赴きし時、又はシベリア在留中に何か東方の國に就きて聞く所なかりしかを質したれども、知り得たる所は洵に不確實にして、只之によりて漸く大韃靼が一地峽によりてアメリカならんと想像せらるゝ隣大陸に連續すてふ事を歸結し、氷海と印度洋との間には交通の方法なきものなることを推知し得たるに止まりたり。シベリアに追放されし一人が木に彫りて地名をばスラブ文字もてしるせし地圖ありけるが、これには、東方の海岸より數多の岬突出しあり、其中の一つは餘りに大にして、右の木板面には全形を現はすこと能はざりき。此圖を示せし人は余に告げて云へらく、此等の地方に住する韃靼人より得たる情報によれば、此大岬は地峽に外ならずして、直に隣れる一大陸と連れども、此部分は高き磊々たる峻嶺もて被はれたれば、太古の人民のアメリカに渡れるものは、必ず、其之を通過したるには相違なしと雖、目今の所にては、これを越え行かんこと全然不可能なりと。右のシベリア圖は洵に粗末の出來にして、距離なども能く其度

を測量したるにあらざれども、ツアールに彼の韃靼なる領地の如何に大なるやを示すだけの用には足れり。余の友ウィンウスのツアールの命によりてロシア及び韃靼の地圖を作りしは、全く以上の地圖によりたるものなりき。

余は日本の各所にて見たる北地の地圖によりて比較研究を試みたるに、これ等は凡て大韃靼の地續に一大邦土をしるし、之をして蝦夷が島の背部にまでも延長せしめあり、これが日本の東岸より尙、東に徑度十五度位ひろまれり。此大陸とアメリカとの間には一大空地あり。其地方はカベルサリ、オランカイ、シッチー、フェロサン及びアコリシ等に分たれ、此最後の二州の間には一大河ありて、東南の方、蝦夷島の後へに當りて大海に注ぐ。されど、さきにも云へるが如くもとより、精細に測定せしものにあらざれば、必ずしも皆、信なりと云ひがたきものあるなり。余が日本の北方の邦土に就きて日本滯在中知り得たる智識はこれに止まる。

誤謬も多しと雖、北地の研究に至りてはたしかにケムプエル苦心の跡を見るべし。

日本人種の起源

大抵のヨーロッパの地理學者は日本人は支那人種の子孫なりと云へり。此說の起る所はヨーロッパ旅行家の東方より齎せる二つの說話に根源せり。一は左の如し。支那にて、かつて多くの宗族が皇帝に叛旗を飜せしことあり、其陰謀の發露するや之に參加せしものは其何人たるを問はず、之を誅すべしとの命令下りたれども、連名者の數あまりに夥多にして、死刑執行人も最早其實行に飽厭するに至りたれば、是非なしとて帝は死刑の宣告を追放に變へ、隣邦日本の荒れはてたる無人列島を擇び、かくて其追放人よりして此人口多き强健の民族が生れ出でたるなりと。今一つの說には曰く、支那の諸帝王中己れの權勢富貴の一時的なるを慊らず思ひ、出來得べくむば不死の聖劑を得て我御代の長へならんことを希ふ皇帝あり、彼は其臣下中の敏なる者を世界の諸方に遣して藥を求めしめたるに、帝の侍醫の一人は、我が聞く所によれば、日本の島にかゝる靈藥ありとの事なれども、こは非常に不思議美妙のものにて、純潔なる手ならでは、之に觸るゝや忽にして其功德を喪ふに至ると云へば、此虞なからん爲めに、兎に角、頗る健康なる三百の少年と三百の少女とを擇び之を遣はして齎らさしむべしと說き、彼自らが其

使命を擔ひて出向したり。されどこは、初めより帝の希望を充さんとの忠心ありて說きしにあらずして帝の虛政を脫して此溫和なる風土の地を占領し、其無人の島に植民せんとの、たくらみより計畫せしなれば、一行は一度去りたるまゝ亦還り來らざりきと。此等の二說中、前者はリンスホーテンの傳ふる所なれども、彼は抑、何等の典據によりてかゝる言をなしたるや、之を支那及び日本の載籍に徵するに實に跡形だもなければ、全く信を措くに足らず、作り事として一言の下に之を斥けて然るべきなり。されど第二說の方は、日本人の全然、否認せざる所なり。否、之を非認せざるのみならず、彼等は此醫師が青年男女を率ゐて上陸せし地點の何處にあるやをも指示し、これ紀伊の國の熊野及び其附近にして、こゝに最初の植民地が建設せられたりとなすなり。現に支那より渡來せる風習、工藝學問等を紀念する一の寺院の此地にあるは其有力なる證跡なり。日本歷史中にも秦始皇が普ねく不死の靈藥を求めたる旨記し居れり。此帝は支那の三名君の一人にして、無比の虐政を行ひ、非常に驕奢なる一生を送れり。其例史上に多し。彼は嘗て或大地所を掘らしめて一大湖となし、これに支那酒を滿溢せしめて自ら船に乘

りて之を漕ぎまはせり。彼は又コジャク(阿房宮か)と云ふ大宮殿を造營し、金銀の板もて其床を張らしめたり。其構造の大なる、彼の孫を殺して帝位を占めたるコール(項羽か)帝の之に、火を放つや、三ヶ月の間燃えて消えざりしと傳ふる程なり。日本人は人生の幸福榮華のはかなきを喩ふるに、常に此大宮殿の燒盡を以てせり。長生不死を冀ひしは即ち此始皇帝にして、彼の醫師はかくの如くにして日本には渡來したれども、時は既に遲くして日本人がはや群島を占め終りたる際なりき。其渡來の年は、日本の初代帝神武の後四五三年、耶蘇紀元前二〇九年に當り、日本第八代の帝コーケンの即位第七年なりき。以上の二說話はもとより日本人の祖先が支那人なりてふ充分の證據を提供するものにあらざれば、今少しく有力なる據り所を發見せんこそ必要なるなれ。

こゝに一事の疑ふべからざることあり、そは他なし、すべて國語及び其特質なるものは、獨り其一民族の起源を說明すべきのみならず、なほ、年代の推移するに伴うて如何に一民族が他の民族と合體して增殖するものなりやをも示すの事實是なり。これに就きてはヨーロッパの多くの國民は吾人に其明證を供するなり。例

へばボーランド人、ボヘミア人及びムスコギット人が同じくスラブ種に屬するものなることを示すは單に其國語のみによるが如し。之と同じ理によりてイタリア人、フランス人及びイスパニア人はローマ人の子孫なり。ゲルマニ人、低地オランダ人、デンマルク人及びスエデン人は古代ゴーレ人の子孫たるなり。吾人は尙之に數歩を進めて諸國民の國語を仔細に考察すれば、如何なる革命の此民族に起りたりや、如何なる民族によりて征服せられたるか、何處より、又如何にして一民族が膨脹し來れるやをも、略推究するを得ることを斷言せんと欲するなり。何となれば、移住外人の數に比例して外語も輸入せられ、次第に同化せられて其本來の國語同樣に用ひらるゝに至るが通則なればなり。イギリスの語にドイツ語フランス語、デンマルク語の存在するは、之豈にイギリスが相繼續してデーン人、下サクス人及びフランス人の征略する所となりたるを明示するものにあらずや。ラテシ語と雖、其純性を保存する能はず、ローマ人がギリシャの主となりてよりはギリシャ語も澤山に其中に混ぜり。トランシルバニアの現用語はラテン語と隣邦ホンガリア語との混合せるものなり。ロシア附近の一小國セミガリア人の

りて之を

語、スラブ語及びラテン語より成れり。此現象は世界の何處にあり
や。今、日本語を細かに探究する時は、吾人は其全く純にして、其隣人の
合せざるを發見せむ。吾人の所謂隣人とは即ち支那の東岸の人民に
て、交易をなしつゝあるものを指すなり。此邊の支那人は其南京、チアン
の三大州とも皆それ〴〵に別語を用ひ、日本人は此等の方語をば全然
こと能はず。日本人の解し得るは只支那人の日本にもたらす若干の物品
るも、是等すら多くはバン、バルマ、ボラン、カッパ、フラスコ、ビヅー、タンテ等の
ポルトガル語にして、之を以て、もとより日本人が支那人の子孫なりてふ事を結
論するに足らざるなり。時々支那より移住するの徒もなきにあらざりしも、其數
たるや著大なるものにあらざれば、日本の母語は之が爲めに何等の大轉訛を及
ぼすことなく、かくして支那にさかえたる科學、美術及び文字は次第に日本に移
植せられたるなり。此文字こそこれラテン語が現にヨーロッパの多數國の採用す
る所となれる如くに、高麗、東京及び其他附近の諸國の採る所となれるものなり。
此外にすべて國語には二つの重要なる性質あり、一は構造にして一は發音なり。

しかも支那語の此等の二つのものは、日本語のとは全然異れば、兩國民が同生な
りてふことを確言するの餘地なし。第一に構造及び書き方よりするも、支那人は
其文字を、只やたらに一列に並べて其間に何等の接續辭を用ゐることなきも、日本
人は同じく一列に書くとは云へ、語の間に、特別に接續の目的もて發明せられた
る他の詞を適用す。此詞は絶對に必要にして、假令、支那の書を再版する時にも、人
をして其何たるやを理解せしむる爲めには、之を挿入せざるべからず。發音に就
きて兩語は大に異れり。これを其一般に就きて見るも、將、特殊の文字に就きて見
るも然り。恰も發音の機械が日本人にありては支那人と全く別に造られたるが
如き觀あり。日本語の發音は一般に純なり。明晰なり。これ吾人のアルファベットの
如く二三の文字より多からざるものを以て一綴字をなすものなればなり。然れ
ども、支那人のは、さながら之を謠ひつゝある如く、發音さるゝ多くの子音の發音
に外ならず、之を聞くものをして頗る耳に不快の感を懷かしむ。一々の文字に就
きて見るも同一の差違存す。例へば支那人は吾人のエーチ字を明かに發音し得
るも、日本人の發音はエフと同じ、日本人は又アール及びデーを明かに發音し得

用語はレッツ語、スラブ語及びラテン語より成れり。此現象は世界の何處にありても眞實なり。今、日本語を細かに探究する時は、吾人は其全く純にして、其隣人の語と毫も混合せざるを發見せむ。吾人の所謂隣人とは即ち支那の東岸の人民にして日本と交易をなしつゝあるものを指すなり。此邊の支那人は其南京、チアンチュー、福州の三大州とも皆それ〴〵に別語を用ひ、日本人は此等の方語をば全然解すること能はず。日本人の解し得るは只支那人の日本にもたらす若干の物品に止まるも、是等すら多くはパン、バルマ、ボラン、カッパ、プラスコ、ビヅー、タンテ等のポルトガル語にして、之を以て、もとより日本人が支那人の子孫なりてふ事を結論するに足らざるなり。時々、支那より移住するの徒もなきにあらざりしも、其數たるや著大なるものにあらざれば、日本の母語は之が爲めに何等の大轉訛を及ぼすことなく、かくして支那にさかえたる科學、美術及び文字は次第に日本に移植せられたるなり。此文字こそこれラテン語が現にヨーロッパの多數國の採用する所となれる如くに、高麗、東京及び其他附近の諸國の採る所となれるものなり。此外にすべて國語には二つの重要なる性質あり、一は構造にして一は發音なり。

しかも支那語の此等の二つのものは、日本語のとは全然異れば、兩國民が同生なりてふことを確言するの餘地なし。第一に構造及び書き方よりするも、支那人は其文字を、只やたらに一列に並べて其間に何等の接續辭を用ゐるとなきも、日本人は同じく一列に書くとは云へ、語の間に、特別に接續の目的もて發明せられたる他の詞を適用す。此詞は絶對に必要にして、假令、支那の書を再版する時にも、人をして其何たるやを理解せしむる爲めには、之を挿入せざるべからず。發音に就きて兩語は大に異れり。これを其一般に就きて見るも、將、特殊の文字に就きて見るも然り。恰も發音の機械が日本人にありては支那人と全く別に造られたるが如き觀あり。日本語の發音は一般に純なり。明晰なり。これ吾人のアルファベットの如く二三の文字より多からざるものを以て一綴字をなすものなればなり。然れども、支那人のは、さながら之を謠ひつゝある如く、發音さるゝ多くの子音の發音に外ならず、之を聞くものをして頗る耳に不快の感を懷かしむ。一々の文字に就きて見るも同一の差違存す。例へば支那人は吾人のエーチ字を明かに發音し得るも、日本人の發音はエフと同じ、日本人は又アール及びデーを明かに發音し得

るも、支那人殊に南京地方の人は之をエルと同じく發音す。日本語と高麗及び蝦夷の言語との相違は、日本語と支那語との相違と同じ。

日本人が支那人の子孫なりてふ議論の今一の有力なる反對論は、兩民族の宗教の差違にあり。若し日本が支那の植民地に相違なしと假定せば、無人の日本に移住せる往初の支那人は必ずや支那より其信仰をもたらすべき筈なり。然るに事實は反せり。日本の原始の宗教は神道と云ひ、神及び偶像を拜するものにして全く此國に特有のものなり。日本には永く此一宗教の外存在せざりき。外教即ち釋迦の教說は今之を佛法と云ひて、未曾有の速度を以て日本全國に蔓延したれども、其輸入せられたるは漸く垂仁帝の時代にして、耶蘇誕生の後六年なり。されど、佛法の弘布せる此くの如くなるにも拘らず、神道は却て益〻其地歩を固め、其根葉の牢固として拔くべからざるものあるは、蓋し古代宗教に對する尊信の情が深く人心に浸染せるものあればなるべし。

今一つ兩國民の同一種にあらざるを證するの事實あり。そは國民が太古に用ひし文字の非常に異り居る事なり。日本人のは粗なる通俗の文字なり。支那人のは

單純なる象形なり。しかし、之は根據薄弱なれば、吾人は之に執着せざるべし。なほ提唱したき二つの相違あり、一は日本人の日常の風習の支那人と異ることなり。例へば飲食、衣服、睡眠、頭髮のたち方、禮儀作法等の如し。一は性情が兩國民大に相違せり。支那人は平和中庸の民なり、とかくに哲理瞑想に耽けるの傾向あり、且つ頗る吝嗇なるも、日本人は戰ひを好み、反亂放逸の生活を喜び、功名心强し。

以上述べし所によりて日本人が本來の人種にして、少くとも支那人の子孫にあらざること明かなり。只困難なるは然らば世界の何處より如何にして渡來したるやにあり。吾人は之が爲めに原始の世界に溯りて日本人がバビロンの最初の人民にして、其國語は神が攪亂せし原始の言語の一なることをこゝに斷定せんと欲す。何れの途を通過し、何時其渡來を始めたるかは之を措きて、兎も角此推定は强ちに無理なりとはせられまじ。否、吾人は尙此推定を擴充して原始日本人の日本に渡來するには決して多くの時日を要せしものにあらざるべきを信ずるなり。何となれば、日本人の言語は純にして他の語を交ゆることなければなり。第一に言語の不解となれる往初のバビロニア人は、さしあたり身の處置に困じは

て、彼等の多くのものは、兎も角も、住居となすべき邦土を撰び、可成、豐饒にして樂み多く、又他國の侵襲しがたき、例へば海濱とか、大河の間とか、高山の谷とか、又は非常に遠隔なる地方を得んと欲せしならん。されば遠き氣候の佳良なる邦は自然に第一に占領せられ了りたるなるべし。日本の例はこれなり。第二に此等の人民は邦土を求めつゝ必ずや生活の必需品の豐富なる土地、例せば海岸、河湖の畔等をたどり行きしならん。かくの如き土地は饑渴を充すべき物資に缺ぐることなければなり。

かくの如くして諸人種は必要止むを得ざる事情に驅られて各方面に遷徙せり。原始日本人は裏海の沿岸よりして日本に向へり。彼等は裏海の東岸及び北東岸に沿ひて終にミユンキシラーグ島に到り、これより河流に追隨し、以て東方に擴まれる豐肥の一大國に達したるならん。彼等は此うまし國を見て今トルキスタン人の住める瘦薄炎熱の地方に入るを避け、又イチシ、エネシ、シリンガ諸河に從ひて冷かなる地方の國に入るをも避け、只東へ東へとすゝみてアルグーン湖に到り、これよりアルグーン河に沿ひて終にアムール河に達し、かくてアジアの東

海岸より無人の高麗半島に至りたるなるべし。日本の長門は西極の一州なり。而して高麗と長門との間には數多の島嶼あれば、高麗に至れる原始人民のなほ島づたひに良土を求めて日本に到りたるべきは理の當然なり、初めてこの日本の良邦を發見したる原始日本人は、他の同胞の彼等の後を追うて又もや渡來せんことを恐れて、長く列島の西部に滯在することなく、直に南方伊勢の沃土を見出して、こゝに安平なる鄕土を作りたるなるべし。後の日本人が伊勢を尊ぶは此來歷によるならん。

日本人は農業其他の工藝の未だ進歩せざりし時代には專ら、家畜、根菜、果實、海魚等にて生活を營みたり。彼等の人口の非常に多くなりたるは全く其繁殖の盛なりし爲めなり。されば日本現代の人民は之をバーベルに於ける言語錯亂の後、日本に渡來せし人民の子孫なりと云ひて不可なきも、亦一方には否むべからざる一の事實あり。そは時々新植民の支那、高麗其他の隣國より日本に渡來したることと是なり。支那の學士の書を齎して日本に來れるとや諸種の土人の移住せるとは、日本の史上に明かにしるされたり。されど言語や風習、宗教の之が爲めに毫も

變りたることなければ、人種までも變りたるものとは斷ずること能はざるなり。日本の近海は非常に荒き海なれば、外人のこゝに漂着せしもの亦尠からず。幸ひに生を失はざるを得しものは、危險を冒して歸國するよりも寧ろ日本に滯留するが例なりき。今日は航海の術も大に改まりたれども、尙且つ此種の事故を耳にすること往々にて、何國の人とも知れぬ異樣の異人の漂泊せぬ年はなき樣なり。日本人は數百年前偶然北方に玄海島と云へるを發見せしに、爰にはオニと云へる惡魔住み居ければ、盡く之を誅伐して日本人を移したり。思ふにかゝる黑人は嵐の爲めに此島に漂着せしものならむ。史の傳ふる所によれば、此等の鬼は肩にかゝる長髮を有し、家具なども頗る珍奇なるを所持せり。長きヨーロッパ風の帽子の如きも其一なり。日本人は元來、他國を魔國などと輕侮すれば、此等の黑人を惡魔と稱せしも又偶然にあらざるを知るべし。察するに所謂オニはマラガン人にはあらざりしか。此時代のマラガン(マラッカ人か)人の長髮を好みし事は、充分に知れ亘れる事實なり。彼等は又印度と交易し、其商船は曾にアジアの海岸を航行せしのみならず、尙進んでアフリカ殊にマダガスカルの大島にまでも赴けり。

マラガンの王が自ら東及び西の風及び海の主と誇稱するも之が爲めなり。マラガン語のラテン語のヨーロッパに於けるが如くに全東洋にひろまれるも之によるべし。彼等の被れる高き帽子はヨーロッパより齎せしものならむ。今のカムボヂさ暹羅、ペグ等の古の君主は、其愛を示す爲めに大臣其他の寵臣にかゝる帽子を授くるの習あり、帽子は初めには陸上、ヨーロッパよりオルムズに、それよりマラガン人アルメニア人其他の商人の手にて全東洋に輸出せられしも、ポルトガル人の印度への新航路を發見せし後は、彼等は專ら海上にて之を輸入せり。玄海島の此等黑人の中に貴人ありて、其君主よりかゝる帽子を贈られたるか、或は又偶然の事より帽子が彼の手に入りしなるかは、茲にて問ふべき限りにあらず。又日本の歷史上にも、南方の諸島に黑人居りたりと記するは、蓋し風雨の爲めに、茲に押し流され、其無人の地なりしを以て暫く居を之に定めたるマラガンの商人か、其他モルッカ諸島の住民に相違なかるべし。余の日本渡來暫し前にも、又滯在中にも異人の日本に漂着せるもの多かりしが、かゝる場合には日本政府は其船體も、生死人も皆之を長崎に廻送せしめ、此處にて一切海事の審査を行へり。此地の知事は

此種の國民に免れがたき性癖として猜疑を以てすべての事故を觀察し、船が何國より來りしか、漂流人の用語は何なるかを吟味す。吟味はすべてオランダ商館員の列席にて行はるゝ故、余は嘗て商館長の好意を以て之を見物せし事あり。久しからざる前の事、マニラよりの船の薩摩の海岸にて難破せし事あり、其船には黒人耶蘇教徒の一種なる若干のトバシアン人も居りしが、乘組員は不幸にして大概死し、上陸するもの多く斃れ、三人だけ生き殘れるが長崎に廻送されしに、一人は獄中にて死せり。又同じ海岸に漂着せし他の一船にても三人の生存者ありしに、皆トバコの一語の外は更に其語を解せざりき。此輩又しばらく獄にありて結局吾人の手に引き渡され、吾人はオランダ船にて之を送りかへせり。一人の生存者もなき一船の日本北岸に着せしものも長崎に送られたり。其船の構造の異常なると船尾に三漢字を印せしによりて日本人は其蝦夷の極より來れるものなるべきを推したり。又此程琉球の海岸にて遭難して乘組人の二人が助けられて薩摩に、それより又長崎にまわされしもあり。此二人は頭はポーランド人の如くに刈られ、髭なく、各耳に三つづゝの穴を有し、中々に理解に鋭き典雅の人民なり。日本人の言にして信ずべくんば、尙此外にも奇異の一民族あり、習俗も、形貌も國語も全く別種なり。こは日本所屬の極北の一島クビテシマ(小人島)の住民なり。こは侏儒なり。其何人種に屬し、何處より來りて此島を占むるに至りたるやは、之を確言しがたし。吾人はなほ一のこゝに附記すべき事あり、そは、日本に渡來せし最初のヨーロッパ船はポルトガルの商船にして、風波の爲めに偶然、こゝに立ち寄りしものなりてふ事實なり。

之を要するに、日本各州の人民の形に於て異れるは、永き年代の間に異れる新支族の原始民族の根幹に發生せし爲めなるべく、日本人一般、殊にニホンの平民は其容貌頗る醜惡に、たけ短く、扁鼻を有し、脚太く、眼瞼は厚しと雖、國中の君公の宗族は其貌も形も、ヨーロッパ人の如くに一層莊麗なり。薩摩、大隅、日向の人民は中背にして强く、勇壯に且つ禮讓あり。大日本島(本州のこと)の北方の諸州の人民も之と同一なり。但し、大なる奥州の人民のみは然らず、頗る殘忍無慈悲なりと云ふ。西國の或州、殊に肥前の人民は背低く、やせて恰好よし。容貌も美にして非常に禮儀あり。大日本島の東部の人民は、頭大に、鼻扁平に、筋肉逞ましと云ふ。

日本人を以て白人種なりと論斷するは隨分當時に在つては破天荒の說と云ふべく、議論はもとより粗漫なるを免れざるも、十七世紀に於てかゝる說を提唱したるは、東方を以て全く下賤なる異種族なりと思惟せしヨーロッパ人をしてたしかに呆然たらしめしなるべし。此類の說は今日は我學者の中に之を唱ふる人もありて、或人は日本語は、アーリア語なりと云ひ、又或人は日本人種はアーリア人種なりと云ふもあり。西洋人中にも東洋と西洋との連鎖を發見せんとて種々なる見解を立するもの尠からず。古代ペルシャにては、其主なる崇拜物をミトラと稱せり。こは光明の神にして、太陽は彼の眼なりとせらる。ジョセフ、エドキンなる學士は、ミトラとアマテラスオーミカミとの語音の相似たるを見て同一の母音より成る名稱なりとし、ゾロアストル敎と我神道とに何等かの關係あるべきを揣摩せり。又故イーストレーキ氏は言語學上よりして左の如くに立論せり。

太古一度、埋れしカルデア及びヘブライ人等の言語と、日本語との間には、頗る類似せるもの多し。今其二三を擧げんに、

カルデア語	日本語
カテフ	肩
アニ	船
ハラル	腫れる、胎む
ナガル	流れる
ドウム	默る
ヌム	眠る
クル	切る
タテル	照る

思ふに五千年前、バビロニアの繁昌を極めたりし頃に無數の人民は同國よりして東方に移住し、遠く支那にまでも及びたり。彼等は此時必ずや日本にも渡りしならむ。其證據は日本人とカルデアの人民との間には、其言語及び思想を表すの方法に於て拒むべからざる類似の點存すればなり。佛敎と密に關係せる彼の卍なる形象は又カルデアに發源せしものなり。少くとも四千八百年前

にバビロン人が彫刻したるものゝ中に彼等が尊信したる神々の名を列擧せしものあり、其第一には最も尊き神の名を掲げ、卍符號を以て之をあらはしてアヌ又はアンと音讀せり。支那にては之を卍と變形し、今日はワンと讀み日本にてはマンと音讀す。其意氣は孔子の所謂上帝と同一なりと。

人種の異同は單に言語のみや宗教のみの異同を以て輕々に之を判斷し終るべきにあらざるは云ふまでもなく、此種の議論は、日本人種の西洋起源をたしかめんとするに於て未だ未だ遠しと云ふべし。

日本の富

ケムプエルは更に日本に於ける山海、動植物の產物を數へて曰く、日本國土の產物は、巨大なるものにして、大底の國のに比して優れりとも劣ることなし。地中の產物には凡ての種類の鑛物殊に金銀銅あり、國內到る所に存する溫泉と火山とは其硫黃に富むを示す。金屬中最も多きは黃金なり。各州、之を產出せざるはなし。皇帝は全國の鑛山を所持して其許可なしには、何人にも之を開掘せしめず。其產出額中、三分の二は皇帝の御料に歸し、殘る三分の一は產出地の君主之を收む。大

日本島の北方の州の一なる佐渡は最も多くを產するも、現今は往時の如く巨額に達せずと云ふ。銀は又備後其他の州に產出せらる。日本の東岸にありと傳へらるゝ金島銀島も、果して日本人の誇言するが如き事實ありとすれば、同じく金銀の產地ならん。銅は日本產の鑛物中の最普通なるものなり。眞珠は日本人之を貝の王と稱し、西國は至る處に之を產出す。土人は以前は殆ど之を尊重せざりしも、支那人が之れを以て女子の頸飾などを作り、頗る重んずるを以て始めて其珍物たるを知れり。

日本の氣候の殊に天惠を得たると、又其人民の精勵勉强なることを思ひ見れば、此國に物資の饒多なる、又其野生人工の植物花果に富めるとの敢て偶然ならざるを覺らむ。彼等の祖先は頗る節儉にして、かゝる產物の多くを其生活の用に供せしが、後人民の富の增長するに伴ひて、其趣好も次第に文雅となり、食卓を飾るものも自然に奢侈華美を旨とすることゝなれり。思ふに日本人は世界一流の農夫の列に入るべきものなり。其農業の大なる進步發達を遂げたりしは、曾に人口の非常に夥多なるが故のみに由らずして、亦實に此國人が一切外人との交通通

商を謝斷し、是非共自已の勤勞によりて生を支へざるべからざるの境遇にあればなり。されば從つて此點に於て法令は頗る嚴重なるものなり、牧場にも用ひられまじき程の野及び平地、否、丘陵山嶺に至るまで尙能く五穀及び其他の食料植物を供給す。一寸土と雖、不問に措かるゝはなし。吾人の宮廷への往復の旅行に於て吾人は他國にては耕すべからずとして放棄せらるゝなる地片の殆ど其山頂まで能く耕耘せられつゝあるを見たり。其方法や實に巧妙を極め、低き平地は牛もて之を耕し、坂又は高地なれば人もてし、何れも糞尿を施す。中にも國人の常食物たる米を栽培する爲めに、土地の多く、殊に低地は盡く米田と化せられ、溝を穿ちて水を通じ、以て米の發育を速ならしむ。されば、日本の米、殊に北方諸州の產は全アジアの米の中最良を以て目せらる。土地はすべて播種の前に每年測量せられ、收獲の期が近けば再應、何程の收獲が擧げらるべきかを目分量にて測るが、其測定たるや、あらましの推定にすぎざるも、實に驚くべく精確にして、小作人は到底地主を欺きて收利を貪ること能はざるなり。收獲が若し非常に良好なりし時には、其土地の一片を方形に區劃してそこの中なる米禾を刈り取り、之を測りて

然る後全體の量を推知す。地主の手に入るは六分卽ち十分の六にして、小作人の其勞力の報酬として受くるは殘る四分なり。帝領の小作人は己れ六分を占めて四分を帝室に歸す。但し、耕作奬勵の爲めに未開の地を開墾する者には、最初の二三年が間は收獲の總てを勞役者に付與す。一般に田畠を上、中、下の三組に分つ。なほ又上の中にも上の上、上の中、上の下を分つこともあり。農業に關する此國の法律の多きが中にも、殊に著しきは、一年の期限間に己れの土地を耕さゞるものは、何人たるを問はず己れの尊號を褫がれ又其土地を沒收せらると云ふの條項にあり。日本は其國土の廣大に比して、野生及び家生共四足獸の數は少し。これ野獸の繁殖し得べき地域狹少にして、家畜も僅に車用及び農用にのみ飼養せらるればなり。此國にはピタゴラスの輪廻說一般に信仰せられつゝあれば、人民は決して肉類を食まず、植物のみを日用の食とし、土地を耕作するのみを知りて之を牧場とする事をば知らず。家畜には第一に馬あり、馬は其數少きも、其中の或ものは形體駿速に於て敢てペルシア馬に劣ることなし。薩摩及び奧州產は最良なり。牛は耕作にのみ用ひらる。牛乳と牛酪との用は日本にては知られず。大バッフル(記者

バッフルなるものゝ如何なる動物なりやを知らず)の一種あり非常に大にして背には駱駝の如き肉鞍あり、大都會にては之を人車又は荷車の運搬用に供せり。日本人は驢馬、ミュール、駱駝及び象等を知らず。羊と山羊とは以前平戸にてオランダ人及びポルトガル人之を養ひしことありき。其肉を食ひ、其毛を利用することを知らば非常の國益となるべきを日本人は不幸にして之を知らず。豚は支那より傳來したるもの少許あるのみ。肥前にては、自家の用に供せんとてにはあらず(これ輪廻說の禁ずる所なれば)支那に賣らんが爲めにのみ飼はる。現皇帝の帝位に登りてよりは日本の犬の數の多くなれる事、前代にも他國にも類例を見ざる所なり。彼等は皆其主を有するも街上に横りて往還者の妨害たること甚しく、しかも各市にては、皇帝の命により是非共之を鄭重に養はざるべからず。此目的を以て各町に犬小屋ありて、犬、病にかゝれば之に收容され、死すれば死體は頗る丁寧に山頂の葬場に運ばれ、こゝに葬らる。犬を害するものは罪あり、之を殺すものは、極刑に處せらる。此たぐひ稀なる犬の崇拜は現帝が戌の年に生れたるに原因す。土人は之れに就きて一場の面白き物語をなせり。一日本人は犬の死屍を山頂

の墳墓に携へ行きながら、あまりのいま〳〵しさに皇帝の生れたる戌年、其馬鹿々々しき命令を唄ひたりしに、同行者は彼に同情を寄せつゝも、靜に之を制し、否、されど皇帝が午年に生れたるよりはなほ以て幸ひなり。何となれば、馬ならば死屍の運搬は容易の業にあらざればなりと云ひたりとかや。

之いふまでもなく將軍綱吉の事蹟を云ひたるなり。ケムプエルの初めて日本に渡來せしは、綱吉の元祿三年にありて彼は綱吉にも拜謁したりしものなり。日本には猫の特種ありこは全く家畜にて毛、白く、大なる黃又は黑の班點を有し、其尾は短し。此等の猫は鼠を狩らず、婦人の愛物たり。

四足の野獸にては鹿あり、兎あり、熊あり、此等の肉は、或種の宗旨の者は、一年の或日に限り之を食用に供するを許さる。安藝の宮島は鹿の產を以て名あり。鹿を狩り、之を殺すことは國法の堅く禁ずる所なり。若し其死屍にして發見せられたる時には、下手人は若干日間、神殿に又は他の工事に勞働せざるべからず。此外猿あり、狸あり。狐は頗る普通なり。土人は狐を以て惡魔の使ふ所なりと做す。歷史譚や宗敎譚中には之に關する色々の珍話あり。狐狩は之を獵るに頗る巧にして其毛

を以て筆を製す。

海も亦陸上と同じく人民に多くの食料を供給し、魚具、海藻の類、夥多なり。

ケムプエルは之に續きて精しき長崎の記事を掲げたれども、こゝには之を略して彼の江戸參府記事を載すべし。モンタヌスに載せたる諸種の外人參府記行は、聞き書きなると記者の無責任なるとの爲めに、隨分誤傳多かりき。

ケムプエル江戸參府

日本第一の將軍頼朝の時より、各市の知事、各州の長官に限らず、すべての大名小名の毎年一回王廷に赴き、之に敬意を表するの例あり、此際には、必ず其富、資格に相應せる貢物を携ふるを要す。オランダ人の日本に來住せしや、彼等は又ポルトガル人の爲したりし如く、此古習に從ひ、東印度會社の館長は一人の醫師、一二の書記官を伴ひ、多數の日本人に擁護せられて參府せり。從伴の日本人は長崎奉行が吾人に敬意を表して先導せん爲めに自ら、任命する所なれども、實は又吾人を番視し、吾人の土人と切に語を交へ、之と交通し、彼等に耶蘇教と關係ある十字架聖像等を與ふるが如きことなからんやう警視し、又、吾人の何等かのヨーロッパの

珍品を土人に賣却する等のことなきや、吾人一行中の一人にても國中に逃走して、土人を煽動惑亂することなきや等を注目せしむるを其本務とするものなり。此等日本人は其出發に先ちて必ず一誓言をなし、血判をして聊かも長崎奉行の此訓令に違はず、能くオランダ人を警戒すべきを約するなり。

余自らは幸ひにして二回皇帝の廷に赴けり。一度は一六九一年元祿四年にしてヘンリ、フォン・ブーテンハイムと同行せり。ブーテンハイムは清廉寛仁の君子にして能く日本の事情を知り、且つ日本語に通じ、其任を完うしたり。第二回は翌一六九二年にしてコルネリウス・フォン・オウトホールンと同行せり。コルネリウスはバダビア總督の同胞にて博學明敏の士、又各國の語學に通じたり。余は左に該旅行の主なる出來事を述ぶべし。

吾人の旅行の準備は左の如し。第一は皇帝(皇帝と云ふは常に將軍の義なり)其大臣、都、大阪各地の官吏への進物の準備なり。如何なる品を撰び、何れを何人に與ふべきかの大體の見込を定めおきて、然る後、之が濕氣を防ぐために大なる柔皮の嚢に收めたり。皇帝に獻ずべき物は大底長崎奉行自ら、我倉庫に來り見て之を撰

定し、翌年度の進物に就きては又何々が然るべしとて歸任の館長に命じてバダビアより取り寄する樣にせり。時には奉行が自己の物品をもたらして此方が然るべしとて、高價に之を賣りつけ、又は吾人の物品と之を交換して利得せり。天然又は人工の非常なる珍物のヨーロッパより着荷して皇帝に供せらるゝことも間々ありしも、珍物にても、奉行の評價の宜しきを得ざるために、むげに却下せらるゝことも亦ありき。余の在留中のことより、最近の發明にかゝる二個の眞鍮の火器の着せし事ありしに、奉行は之を試みしめ、其模形を取りし後、かゝる品は、皇帝に提供するには不適當なりとて之を斥けたりき。バダビア傳來の珍鳥も同樣の運命に遭ひたり。すべて此等の品の荷造り終りぬれば吾人の出發の二週日前に先導を下の關に送りて吾人のこゝに至るを待たしむ。

さきにも述べたる如く奉行は使節一行の從者を自ら撰任す。吾人の通詞は二級に分る。上級は八人あり、其他は下級に屬す。通詞中番に當れる者が參府に同行す。カピタン即ち使節は三人の下役を伴ひ得、三人の者は又一人づゝの從者を伴ひ得。かくて馬及び擔夫を雇ひ入る。

余がこゝに特に讀者に報せざるべからざる事あり、余は此旅行に於て必要なる一と通りの準備をなしたる上に、余がバダビアより齎せし一大箱を携帶せり。此箱は余が私用の大なる羅針盤を收めたるものなり。もとよりこは外人の習慣に反し、日本人の好まざる所たるには相違なきも、余は之を以て道路や山や海岸の方角を定めんと思ひたるなり。但し余は嫌疑を避けん爲めに、此箱には何人にも見ゆる樣に角製のインキ入れをおき、これに花枝を挿み置きたり。然るに、余が此行に出發してより、再び長崎に歸るまでに、隨行の日本官吏は余の求めざるに、珍木奇草にあへば立ち止まりて其名、性質、用法等を一々余に說明し、地方の人民に訊してまでも余に敎へくれたる事は、聊か、余の意外とする所なりき。日本人は物の道理のわかつたる人民なり。非常に植物を愛好し、植物學をば無邪氣にして又必要なる學問なりと見做したり。余の長崎に歸るに及び奉行の主書記官たるトンネモレは出島を來訪し、余を見て、シウコベの通詞にて彼が前奉行朝比奈シンダーノシンより今回の江戸參府旅行に余が植物を研究し、有益に時を費したる旨を聞き知りたりとて大に余を頌し、且つ、植物學は自分の頗る好みて奬勵する

所なりと云ひたり。されど余は又白狀せざるべからず、余は旅行の初めよりして同行日本人の好意友情を得んが爲めに如何に窃に苦心する所ありたるかを。余は之が爲めに或場合には醫師として人を助けて彼が心を傾けしめ、或時には余が諸人より受けし些細の勤めや惠みに對し窃に贈物を贈りて其心を收攬したり。日本は七個の大地方に分たれ居り、之を連結するために大なる廣き街道あり、之は二た通りの旅行者の毫も差支なく往復し得るだけの廣さを有す。都に行くものは其街道の左側を通り、都より下るものは其右側を通る習ひなり。此等の街道は旅人の便利の爲めに一定の距離に區別され、各區には皆それ〴〵に一の標あり。江戸の一大橋を以て測定の基本地とす。此橋を稱して日本橋と云ふ。各道各國各郡等の極には標柱ありて何處なるかを明記す。吾人は參府の旅行にて此等の大道の二つを通過し、其間に海路を經たれば、全經路は三部に分たるゝ譯なり。第一に長崎を發して陸路小倉に至れり。それより小舟にのりて海峽を通航し、下の關に着せり。こゝには已に吾人の荷物が着して吾人の到るを待ち居れり。長崎より小倉への道は日本人の所謂西海道なり。下の關にて更に舟に搭じ、八日にして大阪に着せり。大阪は其商業の盛大なるを以て名高き都にして、其人民は富めり。兵庫を距ること約十三日本海里なり。大阪よりは日本の大島を陸行して皇帝の居城たる江戸に着するに十四日ばかりを要せり。大阪より江戸への道を東海道と云ふ。江戸に留まること二十日ばかり、皇帝への謁見を終りて前路の如く西歸し、長崎に着するまで往復全く三ヶ月を要したり。

西海道の大概、東海道の到る處、町村の間には街路の兩側に必ず並樹が植ゑ付けられあり、緑蔭を以て大に旅行者を便益せり。道路は清く、側に溝ありて雨水を湛ふべく、高きより落下し來る水流を假き止むる爲めには長き堤防あり。而して地質粘土性なれば、降雨にあふことなかりせば、街道は常に心地よく歩行せらる。隣村の人民は道路の普請に任じ、又毎日之を掃除す。皇族通行の折は、雨天の時敷かんため豫め路傍所々に砂礫を用意し置く。松の實や枝の落ちたるは日々掃き集められて燃料に供せられ、馬糞は又拾はれて肥料とせらる。

街道は所々にて山を上下す。其峻坂にさしかゝりたる時には籠を用ゆ。されどかゝる險にても、水は清く、緑草艶花に富めば、四方の眺めに飽くことなし。殊に春季

に於て然りとす。吾人は又水流の多くをも横ぎれり。東海道に於ては別して急流多きが如し。此等の地方は流の急なるが爲めに橋を架すること能はず、又舟を漕がんことも不可能なれば、地理に通ずる人々によりて安全なる淺瀨を徒渉し、其徒は、すべての荷物を擔ひ、又、乘物をも肩にし、全力を盡して旅人を輔助す。水流の急ならざるものには、杉の木にて造られし橋を架す。橋は不完全なれば、之が修繕を要すること不斷なり。

吾人の水行は、大日本島の沿岸に沿ひて行はれたり。こゝは日本人の最も、盛に航海する地方にして左右に陸岸を控へざることなし。海岸は岩窟及び山多く、山は頂點まで耕さる。人口の饒多なるを見るべし。各所に各港灣尠からず。其間小島嶼の無數横はり、其多くは不毛の岩山なれども、中には良土を有し、甘泉を有するもあり。かゝるものには人民亦多く居住して山の頂までを耕耘せり。

都市の多くは人口豐富にして能く建造せらる。市街は一般に規則正しく、直角に縱横す。外壁及び溝渠をめぐらすことなし。人民の出入する二つの主なる城門あるも、是又、格別の構造にあらず。夜には、すべて之を封鎖す。時として城門に接續し

て兩側に壁を設くることあるも、こは飾の爲めに外ならず。大都會の城門は結構やゝ壯大にして又護衛を之に配置す。余の江戸への旅行中に余は帝國の君侯の居城なる三十三個の都會を數へたり。其中には自身通行せしもあり、又遠方より望みしだけなるもあり。尋常の都會及び大村の數をば余は七十五乃至八十位と數へたり。余は到る所の町村に於て町の兩側に商店の櫛比する狀を見て、商人に顧客多く其繁昌の有樣を想ひ、之を歎美するを禁ずること能はざりき。大日本島(本州)の本街道に沿ひたる村は人口頗る稀少にして、住民中にも他より商用にて來るか又は雇主を求めて來りて勞働するもの多ければ、町と云ひても、只一筋の人家の列に過ぎず。かゝる村には延長して隣村を全く接合するものもあれば、往々にして二つの名を有せり。

田舍の人民は貧しき小民なり。其家は藁にて葺きし四壁の茅屋なり。奥の方にて床は高まり、そこに爐あり、全部には疊を敷く。街道に面せる戸の後へには繩の列を吊して外部より戸内を見通すこと能はざらしむ。家具とても其有する所は洵に寡く、貧乏者の子澤山にて生活の難澁思ひやらるれども、彼等は少量の米、野菜、

菜根もて滿足して幸ひなる生活を營みつゝあり。

旅行に於て第一に吾人の注意を引きしは、街路に存する高札なり。こは諸侯より人民に布告せる法令を掲示するものなり。吾人は其種々を見たるが中に、最も主要なる且つ最も古き日付のものは皆耶蘇教禁斷の令なり。耶蘇教徒を密告せし者には賞をつかはすべし云々の文句も書きつけられてあり。時としては或事件の犯人を發見せし者につかはさんとて金銀貨の褒美金をそこに連ねおく場合もあり。今一つ吾人の注意をひきしは刑場なり。こは大抵村市の中の西側に横はる。法多ければ罪人多しとは何處の國にても云ふ所なるが、此國にても法官は聰明を缺かず、又人民に對する相應の愛情をも有して、成るべく其嚴法を手加減し刑罰を寛にせんことを努めつゝあれば、多神教の國なるも、重罪犯人の法廷の審問する所となるもの多からず、耶蘇教國に於けるよりも、却て死刑の執行は少し。性來頑固にして死を恐れざる日本人にてありながら、尙且つ、不名譽なる死は之を蛇蝎の如くに嫌忌するなり。但し長崎のみは死刑執行の寡少なる地方を以て誇るの資格なきものなり。これ此地の人が耶蘇教徒の慘殺に見慣れて血を見て

毫も奇まざるに至りし爲めならん。而して其死刑に處せらるゝの徒は主として外國との密商人にあるなり。

又旅人の爲めに主なる町村に其地の君侯に屬する驛舍設けらる。こゝに到れば馬も擔夫もあり、之を宿と云ふ。宿は九州よりも又日本島の方に於て多かりき。即ち大阪より江戸までに余は其五十六を數へたり。沿道には又至る所に旅宿あり。

驛舍の存する所には必ず最良の旅宿あり。

時として旅行中に頗る奇異の現象に遭遇することあり。そは腰部に少許の藁を纏ふのみにて、全身殆ど裸體なりと云ふも可なるべき有樣したる人の、寒天をひた走りに走ることなり。これ等の徒は何か神に祈願する所ありて神佛の殿堂に苦き旅行を企つるものなり。彼等は何等の寄與を人に乞ふことなくして殆ど絶間なく走り續くるなり。帝國の至る處に乞食の群衆を見るも、別して多しと思ふは東海道なり。其中には汚穢なる若者ありて頭髮を刈り居れり。此頭髮を刈るの風は聖德太子より行はれつゝある風俗にして、太子、佛の道を弘めんとするや、守屋之に抗言せしかば、太子は佛徒に命じて盡く頭髮を剃りて守屋の黨と區別せ

しめ、又同時に乞食することの特權をも之に賦與したり。比丘尼と稱する少女の一宗教團體も亦實に此剃髪の乞食族に屬せり。此外、山法師と稱する一團體あり、こは剃髪せず。

帝國のすべての君侯の毎年の參勤は、皇帝、豫め其時を定むるが如く、オランダ人の參府の時も亦一定し居りて、日本の正月十五、六日が發足の日となり居れり。これ即ち陽曆二月の中旬にあたる。愈〻出發の日となれば、我々同館のすべての役人、我等と關係ある諸人、殊に此旅行に於て我等と同伴すべき日本人は早朝出嶋に來集し、間もなく兩奉行も來り、一行は兩奉行と共に出嶋を出でゝ、同伴日本人の指揮官と館長とは乘物に乘り、通詞の長も老年なれば通常の籠に乘り、其他は皆馬背に上る。我嶋の日本官吏其他はかくして次の宿まで一行を見送る。

一行は經路の三部分に於て常に同一ならず、長崎より小倉までの陸行に於ては、經過する地方の諸侯より禮として吾人の許に遣はせし人々をも加へて約百名位に、海路も亦水夫共々にて之と同じ位なれども、大坂より江戸までの旅行に於ては著しく增加して百五十人以上となるなり。これ長崎より大坂まですべて水

路を運ばれし贈物其他の荷物を陸に上げて人馬に之をひかせたる爲めなり。重き荷物だけは常に一行出發の數時前に先發せしむ。凡て一日の旅は早朝より夕方までの歩行續けにて、晝間、喫飯の爲め少憩あるのみに止まれば甚だ長し。九州にては本州の旅行よりも到る所にて一行は善く歡迎せられたり。吾人のパンを食ひ吾人の費用にて旅する一行のものよりも、日本の土人の方却て多くの好意を吾人に表しくれたり。例へば九州にては沿道は皆美はしく掃除されて塵芥の立たぬやう水を撒き、地方々々の諸侯は使をして一行を導かせ、國の境に着しぬれば酒肴をふるまひて別を告げさせたり。大村と島原の港を經由する時には兩侯は殊に己れの遊散船を貸し與へ、且つ、色々の食料をも贈り越せしに、盜心深き通詞共は此機を利用して己れの懷を肥せり。西國の旅行にては何處にても行人は吾人に對して諸侯同樣の敬禮を表し、自ら道を避け、禮して行けり、禮することを欲せざるものありても、先導の日本官吏に叱せられて止むなく皆之に從へり。農民の如きは、路傍に平伏して一行の通り過ぐるまで靜に控へたり。

旅行中の食、住其他の待遇は別に不可なきも、只怨言せざるべからざるは、一行の

自由の狹隘なることにてありき。一行は馬上又は駕籠より四方を眺むるとの出來る外には全然捕虜と同じく、一人にても逃亡することはなきかと日本人は百方其心を配れり。吾人は只一人居ると云ふことすら許されず、大小便の必要ありても日本人は必ず吾人を番せり。一行の指揮官は、前回の參府紀行を研究して何事も當時の例に倣はんことを努め、否、寧ろそれ以上に嚴重に取締り、宿舍の如きも飽くまでも前年のまゝにして、雨天其他の事故の爲めに餘儀なくせらるゝ雖、決して之を變更することなし。かゝる時には人命の危險など云ふことには一切頓着なく、夜半までも旅行を繼續して强ひて目的の驛に赴くなり。

各地の君侯は吾人の到着に對して諸侯大官に對すると同樣の待遇をなし、身に上下を着して町より出で來り、一行の各〻に厚く辭儀す。殊に指揮官及び館長の乘物の前にては、頭を低くして殆ど前額と兩手が地に觸れんばかりにす。かくすることの後、彼は急ぎ歸鄉して其門前に又もや前同樣に迎ふるなり。宿舍に到れば接待者は直に吾人を客室にと導き行く。見物のもの群集するのうるさきと、長途の疲れの甚しきとの爲めに、吾人は客室に導かるゝの一刻も早からん事を望む

なり。こゝにては一室に閉ぢこめられ、屋後の小庭を逍遙するのみにて、一切外出を禁ぜられ、すべての小路、戸、窓、穴等外面を窺ひ得べきものは皆封ぜられ、釘うたる。日本人は之を以て盜賊の吾人を襲ふを防ぐなりと辨解するも、もとより盜賊と同時に吾人をも警戒するものに外ならざるなり。但し吾人の歸途には此餘計の警戒は餘程ゆるめられたり。これ吾人が色々の事にて日本人の機嫌を取りしと、これに贈物して其心を收めたる結果なりとは知られたり。指揮官は吾人の室に次ぐ良室を占め、吾人の室の周圍には同心、通詞其他のもの配置せられ、何人にても吾人の室に入らんものは此等同心等の許可を得ざるべからず。此警邏任務を能く遂行せしものは、翌年の參府にも隨行を命ぜらるゝなり。

年の間、除名せらるゝも、然らざるものは二出發の準備完ければ、地の郡長を呼び寄せて、館長は二人の通詞の面前にて彼に金貨にて宿泊の費を支拂ふ。彼はこゝに於て跪き、手を床に下げ、額をすりつけんばかりにして謝禮せり。晝飯に對しては二個の小判、夜食及び宿泊料として三個なり。大阪、都及び江戸にては滯在中、一日五個の小判を一行の費として支拂へり。

日本にては又旅人が出發に先ちて從僕をして一塵をも殘さゞらしむるやう、其居室を掃除せしむるが習ひなり。

日本人は、吾人一行中の役人奴僕を除きては一般に禮讓に富めり。吾人は此旅行に於て日本人より受けたる鄭重なる待遇を以て、最も文明開化したる國民より受くるよりも更に大なることを感じたり。日本人の行動は下は匹夫野郎より、上は王公貴人に至るまで全國禮儀作法の學校の如しと云ふも過言にあらず。彼等は外人との自由の交話及び交通を阻礙するにも拘はらず、之を遇するや極度の深切と快心とを以てせり。唯或町村にて時に無邪氣なる兒童の吾人を支那人と思ひ誤りて一行の後につき走り、いたづらをなし、唐人べーべーと言ひ罵るものある位に過ぎず。

さきにも述べたる如く、一六九一年二月十日、フォン、ブーテンハイムは使節として愈、江戸參府に決し、兩長崎奉行を訪ひて別辭を述べたるに、二月十四日出發の日となりぬれば、兩奉行は早朝出島に來りて一行を見送れり。長崎よりの道は山路にして馬の通行には困難を感せり。マンゴメと云へる小さき町に着し一小屋

に憩ひて酒肴を馳走せらる。爰は刑場より遠からず、皮商の住む所なり。留ること一時ばかりにして浦上村に到る。これより進みて石柱あり、これ長崎と大村との國境をしるすものなり。それより長崎を去ること三哩、大村灣のトキッに到りて晝飯を喫す。吾人はすべて吾人の食物を準備し來りたるも日本人は酒其他の見も味もせしことなき品をすゝめて之に向ひて支拂はせたり。こゝまでは山地にして山間の谷間は能く耕されたり。別に珍しき事なし。

トキッにありし時、大村侯の使者來り、侯の乘船二艘を以て一行に供すべしと云ひ傳へたれば、一行はこれに搭じてシノンギに到れり。トキッよりシノンギまでを陸行すれば迂回して十五哩あるべし。大村侯の居城はこゝにあり、其後へに聳ゆる一山は火を吐けり。此灣は眞珠を產すと云ふ。以前は黃金も海岸に發見せられしも、今は其邊海中に落ち込めり。ウリシノに到る。此島には温泉多し。皆諸種の疾病に効力あり。佐賀城下に到る少許前に、吾人は初めて肥前の婦人を見たり。皆たけ甚だ短小にして一見、少女の如し。されど風姿不可ならず、容貌も美に、温和の態をなせり。皆白粉を顏面に施して恰も小兒の如し。結婚すれば女子は皆兩の眉

の毛を拔き取るなり。佐賀は肥前の首都なり。其侯を松平肥前守と云ふ。市街を下瞰する一大城廓に住む。此都は大にして長く、人口饒多なり。堅固なる城門あり、長壁あり、されど、こは防禦用としてよりも寧ろ壯嚴を衒はんために建てられしものなり。市街も大にして東と南とに向つて走り、溝渠水流多し。人家は矮小にして商店には黑布を掛く。住民は甚だ小なれども、恰好よし。婦人は殊に然り。アジアの他の女子よりも日本婦人は美なるも、惜いかな、あまりに白粉を施すに過ぎて蠟作りの人形と見ゆ。擧止は温柔なり。其唇の色の鮮なるは面貌の健なるを示す。此地方は日本第一流の米產地なり。薩摩は其大なること九州に於ては肥前の次に位するも、富力と强力とに於ては第一なり。こゝには金銀の鑛山多し。一行は佐賀には休息せずして通過す。

小倉は往時人口多き富裕の都市なりしも、附近の土地が數諸侯の分轄に歸してよりは大に繁昌を失ひたり。海岸を距ること遠からず。西より東に約一日本里の間にひろまる。城は正方形の地點に、濠渠にてかこまれ、石にて築かる。中央に侯の居あり、美なる白き壁にて之をめぐらす。六階の一塔の上には若干の大砲を置く、

これ小笠原ウコンノカミの居城なり。其祿十五萬石なり。城門には二つの戶あり、左右には石もて築きし番屋あり。民家は小にして低く、街路は廣く、正しく、或ものは南に走り、又或ものは西に走る。市內に若干の大宿舍あり、料理屋あり。南より北する一の流ありて海に注ぐ。其西岸には少くとも百の小舟繫がる。大船は泊することを能はざれば皆、下の關に赴くなり、河口に一大橋かゝり、鐵製の欄干を備ふ。

小倉の旅舍に休息すること一時半にして、全く心身の疲れを慰め得たれば、小倉侯の派せる二紳士に導かれて出發し、最近路を海岸に到りたるに、無數の見物人は、はや、そこに集まり、街路の兩側に並びて吾人又は小倉侯に對する敬意より些かも騷擾の態なし。此群衆の間を二隻の舟に分乘して、一行は日沒に先つ少時、九州島に別れを告げて、三里のかなたなる下の關に發足せり。五時間にして目的地に達したれば、はや全く夜となりたり。何故にかくまで後れたるやと云ふに、水先案內が屢〻進路をあやまりたるに原因せり。到れば吾人の着する前五日に此港に回漕しありたる大阪行の大滊船が一行を待ちつゝありたれば、直に之に轉乘せんとせり。小倉、下の關間の狹き海峽は日本の古史上の出來事を以て有名なり。一

行の右手、豐前に當りて一大綠野あり、ヤマシマと云ふ。之を距る遠からざるに內裏なる場所あり、これ往時、日本天皇の御所のありし所なり

下の關は大日本島の西のはて、長門國にあり、山の麓に位する良港なり。日本島は日本帝國をなす群島中の最大なるものなり。其形は顎骨に似たる所なきにあらず。其中五十二國あり、二大道路、一方より他方に向つて橫斷し、一は下の關より大阪に、又都より江戶に至る。下の關より大阪までは山多ければ水行を以て便とす。一は江戶より北の極奧州に至る。下の關の現主を毛利飛驒守と云ふ。其居城は長門より六里にあり。下の關の市街は四、五百の民家より成り、一大市街あり。商店多く、水士の必要品を賣買す。吾人のこゝに達せし時には大小二百以上の船そこに碇泊し居りき。これ西國の船の東向するもの必ず此港を以て起點となせばなり。吾人は又此地に於て多くの石切屋を見たり。彼等は石を切りて硯、板、箱其他の品を製造し居れり。

下の關着の翌日は二月十八日なり。吾人は此日は疲れを休むる爲め、又風向の宜しからざる爲めに此市に滯在し、二人の町吏に伴はれて街上を逍遙し、石材屋を

見物し、又史上の不幸なる一君主を紀念したるアマダイス等に詣でたり。翌日早朝水路大阪に向ふ。其間百三十六日本海里あり。

兵庫は攝津國にあり、明石より五里なり。此港南方に廣き砂の堤防あり、須磨の山より東方、海上に突出す。こは自然のものにあらずして平家等が良港を作らんとて造りし所なり。之に費されたる勞力及び費用は莫大なるものなり。工事中海波の爲めに二回までも破壞され、日本の一勇士、身を海中に投じて海神の怒を鎭め、辛うじて之を竣工するを得しなりと云ふ。此港は下の關より大阪に至る間に於ける最後の良港なり。吾人の到れる時には三百艘以上の船、碇泊し居れり。兵庫市には城なし。其大さ長崎位はあるべし。海濱の人家は茅屋のみなるも、奧の方に當つて稍〻大なるがあり。山には金を產す。

二月二十四日、早朝、出發、大阪の河口に至り、六つの木橋を通過し、河を溯りて大阪の都會に着し、やがて上陸、若干の石段を上り、狹き市街に轉じ、一行の宿舍にと着きぬ。吾人は着匆々吾人の通詞を兩奉行の許に送りて面謁を求め、且つ些の進物を呈せんとを乞はしめしに、折から一人の奉行は參府して在らず、他の小田切サッ

サノカミは翌朝一行を引見すべき旨を答へたり。吾人は、翌朝約の如く役人及び通詞に伴はれ、駕籠に乘りて奉行を訪へり。奉行の邸は城と對し、市の一端にあり。半時間にしてそこに達せり。門前に駕籠を下りて各人絹の外套を着用す。これ日本人が禮式の際につくる所のものなり。進むこと三十歩ばかりにして玄關に至り、こゝにて二人の奉行の役人に迎へられ、まつことしばし、從ひ來れる奉行の役人は皆そこに跪けり。吾人の右手の壁の上には色々の武器かゝれり。これより四室を通過して奥の方なる謁見室にと導かる。室には已に奉行の役人の七人ありて座し居り、二人の書記官は吾人より三歩の所に座して吾人に茶をすゝめ、色々懇ろなる談話をなせり。軈て奉行は二人の子息、一人十七、一人は十八なるを伴ひて次室に現はれ、襖を開きて吾人より十歩ばかりなるに、座を占め、初めて對面せり。彼は打ち見たる所、四十歳位、中背にして廣き逞しげなる顏したる人なり。頗る物靜に叮嚀に物語れり。彼は天氣の寒冷なる事、此長途の旅行に於て皇帝に面謁するを得るは世界オランダ人の外にこれなき旨を語り、長き航海の後、再び、日本の國土に接するは快心の事なるべしなど云ひ、終に彼の手より都行きの通券を

吾人に附與すべきを約せり。一行は深く其好意を謝し、彼に聊かながら贈物を呈し、辭して歸れり。吾人は第二の奉行にも贈物をもたらしたれども彼不在にして之を呈するに由なし。由つて江戸に着次第其處分に就きて江戸滯在の長崎奉行に議らんと思へり。何となれば日本にては萬事思慮の細密を要し、此等大官の機嫌を損するは恐ろしければなり。

大阪は五大帝都の一なり。淀川其北方を流る。此川は大阪の巨富とは離るべからざるの關係あり、日本史上にて地震の爲めに一夜の間に出來上りたりと傳へらるゝ近江の大湖に發して、大阪に於て海に注ぐ。川によりて數多の溝渠大阪市中を縱横す。橋梁の架せらるゝもの百以上あり。民家は此國不變の法令及び慣習によりて二階以上なるはなし。皆木及び泥土によりて造られたり。戸内には机椅子等ヨーロッパの室に供ふるものはなきも、嘆美すべきまでにすべて清潔なり。人口非常に多し。日本人の言にして若し悉く信ずべくば、この一市の住民よりして優に八萬の兵士を擧ぐるを得べしとなり。殷富に於ては第一等にして奢侈の傾向ありと雖、物價は決して他と異る所なければ、日本人は大坂をば娯樂の都と稱し

居るなり。公私の家にては日として演戲の行はれざるはなく、輕業師あり、珍物の見世物あり。市民は喜んで之に其財を散ず。これに就きて一の物語あり。數年前我等印度商會は、皇帝への進物としてカスアル鳥をバダビアより送りこせしに、之を內檢したる長崎奉行は、かゝるものは贈物として不適當なれば、匆々バダビアに返すべしと命じ、オランダ商館にては是非に及ばず、之に從はんとせし折、日本の富人にして珍物を愛翫するもの來り、一千テールもて之を讓り受けたしと申し出で、渡りに舟と商館より之を賣り渡せし事あり。かゝる珍物は大坂にて之を見世物として出さば、一年ならずして賣價に倍する利益を得べしと云ふ。市の東北の極に有名なる城あり、これ太閤皇帝の建築せしものなり。

二月二十七日、出發の準備未だ成らず。吾人は此日、通詞と激論したる結果、四十の馬匹と四十一人の擔夫とを雇ひ入れたり。通詞等は尙多くの人馬を用ひんと主張せしなり。彼等は自分の荷物の多くを吾人の名の下に、而も吾人の出費にて平然旅行せり。かゝる盜賊的通詞なかりせば、吾人の費用は遙に節約出來しなり。

翌日、大坂を發して京都に至る。此地の地方官に進物し、又之に面會せんとて駕籠

に乘りて行く。其邸は神統皇帝(天皇を云ふ)の宮殿の筋向ひにあり。京即ち都は四隣めぐらすに綠の丘陵を以てし、淸き水流其間を縫うて流る。市街の北側に內裏即ち神統皇帝の居あり、西方にも今一の堅固なる城ありて、俗的君主(將軍を指す)の上洛したる時に其居城に充つ。市街はすべて狹しと雖、正しくして、其一端に立たんには、距離の遠きと塵芥と行人の群との爲めに他の端は之を見ること能はず。都は帝國の大工業地たり。市內の一民家と雖、何等かの物品を作り又は之を賣らざるはなく、すべての精巧なる物品は皆こゝの產物たり。人口は僧侶五萬二千六十九人、俗人四十七萬七千五百五十七人なり。

ケムプエルが道中の紀行は、あまりに繁にわたるを以て成るべく之を省略すべし。一行は三月二日京都を發し、大津より伊勢に入り、四日市、桑名、岡崎、濱松、掛川、駿府、三島、小田原、神奈川等を經て江戶に着せしは三月十三日なり。

江戶の市中に入らんとせし時、一行は恰も魚市場を橫ぎれり。かくて不規律ながら全市を北方に貫く一大市街を數多の美しき橋を渡りて行けり。橋の中に有名なる日本橋あり。此あたり、市街は幅五十步ばかりにして實に江戶の中央街路た

り。さすがは江戸とてそこを行きかふ人の數知れず。吾人は進行中に君侯大官貴女の幾多の行列に遭へり。また百名ばかりの消防夫の一隊をも見たり。皆鳶色の柔皮の外衣を著し、各〻鶴嘴又は鳶口を肩にし、首は中央に其位置をば占めたり。市街の兩側にはあらゆる種類の商店あり、店頭には暖簾ありて店の一半を被ひ、賣品の雛形を店頭通行人に見えしむるやう、羅列せり。吾人の稍〻意外なりしは、殆と一人の店より出でゝ一行を見物せんとするものなかりし事なり。察するに強大なる君主の居城たる此地にては、華奢勇壯なる行列を見るに慣れて吾人の一行の如き微々たるものを齒牙にもかけざるの致す所ならむ。吾人は此大道を行くこと半里ばかり、其間東西に之を横ぎれる凡そ五十の他の市街を見て、終に回轉して吾人の宿舍に達せり。一行の爲めに備へられたる室房は一徑路によりて僅に外部と通ずる後屋の二階にして、恰も時針は午後一時を指せり。長崎よりこゝに至る行程二十九日なり。

江戸の市街は海灣に向つて半月形を描き、長さ七里廣さ五里、周圍二十里あり。外廓を繞らすとなきは他の日本市府と同じきも、其代りに數多の廣き濠及び溝渠

あり。又其兩側には土手を築きて其上に樹木を植ゑつけたり。城の方に於ては此等の壕は、門によりて閉鎖さる。人口非常に多し。家屋は可燃性の物質のみにて築遺せらるれば、大火、非常に多く、其ため、すべての民家は其屋蓋の下、日中水槽を備へおき、之によりて災厄を逃るゝの方法を講じ居るも、已に火が充分に蔓延したる場合には、これによりて防止の手段を施さんも最早其甲斐なければ、此度は消防夫は、附近の家屋を預め破壞するの方法を採り居れり。

吾人は宿舍に投ずるや直に其旨を江戸の政府に屆け出でたるに、三月十四日、日本役人は來りて歡迎の辭を述べたり。十七日、一行の指揮官は長崎よりの新聞をもたらして吾人に報せり。曰く吾人の長崎を出發して未だ半月ならずして支那船二十艘入港したりと。彼は又吾人に横字をしるしたる紙片を窓外に委棄することなかるべきを命せり。吾人は連日皇帝諸大官に上るべき贈物の包裝に忙殺さる。毎夜火事なきはなし。二十一日、吾人の大通詞は、江戸政府の政務官を訪ひて、愈〻謁見の日と定められたる二十八日には、登城の際、自分病氣なるを以て特に駕籠を許されたき旨を請ひ、血判を以て誓言して漸くに其許可を得たり。二十三日、

吾人は一通詞を以て謹んで洋酒の一瓶を平戸若君に贈れり。これ彼の父が吾人の商館のなほ平戸にありし時、吾人に寄せたる厚情を謝せんがためなり。此日、正午前一時、天候快晴なりしに突如、激烈なる地震起り、物具の震動しばしがほどは止まざりき。余はこゝに於て此國に於て高き家屋の建造を禁じ、細き材木を用ひ、一大棟梁の重さによりて巧に四壁を支へて、非常の時に備ふる其用意の如何にも周密なるを覺れり。二十七日、皇帝の侍醫の一人、フイランノ・ソサッ、余を訪ひ來りて色々醫療上の質問を發せり。謁見は二十九日に延引せられたり。

三月二十九日、これ日本曆二月の末日なり。御老中として當時威權赫々たる牧野備後守はもと現皇帝(綱吉)の師傅なりしが、今や、最も皇帝の信任を受けつゝあり。謁見の際に、皇帝の言を受け、之を吾人に傳へしも彼なりき。彼は年七十位、瘦せて背高く其顏長く、容貌は凛々としてドイッ人に似、動靜遲緩なれども亦極めて文雅あり。彼は正直謹嚴の人にして、功名心や復讎心に驅られず、又毫も富を積蓄するの貪心なし。謁見の日、吾人は皇帝への進物を宮城に送り、之に引き續きて發足せり。其行列は極めて微々たるものにて多くの人は徒歩し、我等オランダ人三人

と一通詞とのみは、馬に乘り、一人の御者は各〻手綱を取りて右側にあり。往時は御者は一騎に二人づゝ附隨するの習ひなりしも、こは吾人に無用の費を支出せしむるものとして改正せられたるなり。館長は乘物にのり、大通詞は駕籠にて吾人に續けり行くこと半時間ばかりにして最初の圍ひに達す。これ外壁及び溝湟なり。北の方に向ひて城を包むが如く見ゆる、此廣き溝には數多の船浮べり、一大橋によりて之を渡り行けば、二つの堅固なる城門あり。少數の護卒ありて之を衞る。第二の城門を過ぐれば、一の廣場あり。右側に當りて多數の護衞兵あり。こは固めの爲めと云はんよりも寧ろ威儀を繕ろはんが爲めに配置せられたるものとは見えたり。兵士の屯する室には美はしき武器、小銃、槍、楯、弓、矢等飾られたり、兵は皆地に跪きて正規に並列し、二刀を帶し、黑き絹の衣をつく。此第一の圍ひの中には帝國の諸侯の屋敷あり、これよりして吾人は第二の圍ひに移りたるが、こゝにも、第一のと同樣の武裝あり、但し橋、城門、內部の護兵屯所、宮殿等が第一のよりは壯麗なるのみ。一行はこゝに到りて乘物、駕籠、馬、奴僕等を殘し、第二の圍ひを橫切りて本丸即ち帝居に導かれたり。途に一の長き石橋あり、二重の稜堡あり、若干の城

門あり、行くこと二十歩ばかり、其間、道の兩側に、非常の高き塀あり、かくて百人番に到る。これ帝居の護兵の大屯所なり。一行は命によりて此番所に待てり。城内の大官會議が終へられ次第吾人の皇帝謁見が行はるゝ筈なり。二人の侍士吾人に煙草及び茶を供して慇懃に接待し、やがて他の諸役人も來りて一行に挨拶す。ここに待つこと三十分ばかりの間に、御老中初め諸大官は、或は徒歩して、或は又乘輿して宮殿にあつまれり。吾人はこれより終に二つの門と一の方形の廣場を通りて宮殿に導かる。第一の門よりこゝまでは數個の階段あり、門と宮殿の玄關との間は甚だ狹くして眞に若干の間隔に過ぎざれども、護兵を初め數多の朝官群集し來れり。これより吾人は進んで二つの階段を昇り、先づ入りたるは廣き一間にして、それより右側の一室に入れり。こは皇帝に向つても、亦老中に向つてもすべて對面を求むるものゝ許可を得る迄待ち合はす所なり。茲は中々に大なる且つ高き室なるも、四圍の襖をしめきりたらんには、頗る薄暗きものとなり、僅に隣室の上部の窓より光線の洩れ入るものあるに過ぎず。されども國風によりて施されたる裝飾の美は目もさむるばかりにして、壁と云はず、襖と云はず、構造は實

に念の入りたるものなり。待つこと一時間以上、此間に皇帝は、謁見室に出御あり、我館長のみが導かれて御前に出づるの時一同大聲にてオランダ・カピタンと呼べり。これ皇帝に近邇して館長に禮を致さしむるの相圖なり。こゝに於て彼は皇帝へ奉献したる進物を前に置き皇帝に對して坐し、額を地につけ、一言を發することなく、恰も蟹の如くに其まゝあとに引きさがれり。吾人の此強大君主に對する謁見は此の如くに自卑せるものなり。彼が國内の他の最強大の諸侯に對するも亦之と同一の尊大を以てす。凡て諸侯の謁見に際しても、其名一度呼び上げらるれば、諸侯は默しつゝ坐したるまゝ手と足とのみにて皇帝の前ににじりより、前額を床にすりつけて拜禮したる上にて、又、同一の態度にて後へに這ひさがるなり。謁見室はモンタヌスが彼の書オランダ使節日本紀行中に描きたるものとは全く異れり。高き玉座、それに登る階段、玉座より垂下さるゝ毛氈、玉座の安置せられたる建物を支ふる大柱、諸侯が皇帝の前に平伏する時座する聯柱等の記事は、全くモンタヌスが作り事なり。目に觸るゝものすべて奇異に富榕ならざるはあらざれども記事の如きはこれなし。余が第二回の參府の折には、長崎奉行の好

意を以て室を參觀することを得たれば、余は細かに之を視察し、疊の數、襖、窓等一々數へおきたるが、床に敷かれたる疊の數はすべて百にして、皆同一の大さなれば、謁見室は又百疊敷の名あり。室の一面は小き庭に面し、之と反對の側は他の二室に連續し、二室共に同一の庭に向つて開く。其二室の一は大にして御老中が臣下に對面する時用ひる室にして、一は小に、こゝには皇帝の御座あり。謁見の際皇帝の風貌を熱視せんこと甚だ難し。これ光線が充分に皇帝の御座の所まで達せざると謁見の時間短くして、且つ謁見者があまりに禮を低くするために、頭を上げて帝を見るの機なければなり。之に加ふるに御老中初め諸大官威儀を正して肅々とそこに居並びたれば、客も周圍の森嚴に自然に氣を呑まるゝなり。

往時は使節が皇帝の爲めに行ふ事は謁見だけにて、終を告げたるものなるも、二十年此方、使節謁見ずみの後、別室に待ち合せたる使節の一行が加はりて、更に宮殿の奥深く導かれて、皇后其他の貴女に異人の樣を見參に入るゝの習とはなれり。此第二の謁見にては皇帝と其他の貴女達は簾の彼方にあり、老中其他の大官のみは、皆堂々と席に居並ぶ。其次第は次の如し。カピタンの臣從の禮終れば、皇帝

は己れの居間に退き、間もなく吾等三人のオランダ人も同樣呼び出されて、カピタンと共に數個の室を通り抜け奥深く導かれ、終に色々の彫刻を施し、又鍍金されたる一の廊下に達し、こゝにて待つこと十五分ばかり、又もや若干の廊椽通路を通過して、やがて一の大室に到る。到れば坐せしめられ、皇帝の侍醫と稱する剃髪の坊主數人入り來りて、一々吾人の姓名、年齢、其他の事を問へり。吾人はこゝに更に待つこと半時ばかり、此間に、宮中の諸人は第二の謁見の行はるべき所に集ひつゝあり。吾人はかくて數個の暗き廊下を導かれたり。此等の廊下に沿ひて親兵の連綿たる列伍あり、皇族の居間に近けば、此列に續きて數多の士人あり、彼等は禮裝して頭を垂れ居たり。此謁見室は數室より成り、若干の室は十五疊を敷き、他の若干は十八疊敷なり。疊にも亦こゝに坐する人の格の高下によりて高低あり。中央の部分には疊なく、從つて一段と低く、茲には漆を塗れる板を敷き、吾人はこゝに坐すべく命ぜられたり。皇帝と其皇后とは、吾人の右手なる簾の後にあり。余が皇帝の命にてそこに舞踏を演ぜし時は、余は簾の隙間を通じて二度、皇后を見るを得たりき。彼女は美はしき黑き目を有せる、顏の色鳶色なせる美人にして

其頭は甚だ大なりき。彼女は定めし背高き人にして、年の頃三十五六なるべし。簾は葦にて織られし掛物にて、其背面には美なる透明の絹布をかけたるものなり、其一方には裝飾の爲め、一方には又、後方の人物を匿す爲めに簾には彩色にて色々のものが描かる。皇帝自らは陰暗の所に其位地を占められたれば、彼にして我知らず發したる低き聲なかりしならば、吾人はそこに人ありとは知らざりしなるべし。丁度吾人の前面にありては他の簾の後に諸皇族諸貴女あり、簾の葦の間には所々、紙片を結びつけて隙間を大にしたるを見たり。余は窃に其紙片の數を勘定したるに、三十ばかりありたれば、簾の後には同數の人物が居りしなるべし。牧野備後守は開きたる室内に吾人の右手、疊の一段高きに坐したり。余は之に因りて皇帝が右手の簾の後にありしを覺れり。吾人の左手の別室には、他の老中及び高官あり。正規に二列をなして居並べり。吾人の後へなる廊には以下の各役人あり、皇帝の坐されたる室に入る廊には又諸侯の子息達、皇帝の扈從及び僧侶あり。先づ第一に外國勤務の委員が來りて吾人を謁見室前の廊に導き、御老中の一人がこゝに吾人を迎へて前記の中間なる空地に引き、吾人を坐せしめたり。吾人

はこゝにて日本風に敬禮し、床に頭をすりつけつゝ皇帝の御座の簾に向ひていざりよりたり。大通詞は吾人よりは少しく前にありて吾人の左側に席を占む。此普通一般の拜禮の濟むや、備後は、皇帝の名にて吾人を歡迎する旨を云ひ、大通詞は直に其辭を吾人に通じたれば、使節は己れの主の名にて之に挨拶し、殊に日本皇帝がオランダ人に商業の自由を許さるゝの惠を謝せり。大通詞は地に平伏しつゝ日本語にて皇帝に聞ゆるやう聲高く此語を傳へ、備後は又もや帝の言を述べ、大通詞之を吾人に通譯せり。もとより大通詞が直に皇帝の言を吾人に通達する方便ならんも、帝の言葉が非常に尊くして卑しき通詞如きが之を直達するは勿體なければ、老中の仲介を要するものとは見えたり。一と通りの挨拶終りて後は、莊嚴の宮殿は忽ちにして滑稽の場所と變り、吾人は無數の馬鹿らしきくだらぬ質問の矢面に當れり。例へば、彼等は第一に吾人の年齢、姓名を問ひ、之を書けとて紙とインキとをもたらせり。書き終れば紙片とインキとを備後にわたせと云ふ。かくて備後は更に之れを簾の下より皇帝に上れり。これよりカピタンはオランダとバダビアとの距離、バダビアより長崎への距離、バダビアに於けるオテ

ンダ東印度商會の總督と、オランダ公と何れが有力なる等の質問を受け、余自身も次の質問を受けたり。曰く汝の見て以て最も危險にして最も療治し難しと思ふ內外科の病は何なるか。癌・腫及び內部の膿瘍の治療は如何にするか。ヨーロッパの醫師には、支那の醫師が數百年前になせし如くに、長生不死の靈藥を探索せし事なきや。若し之れありとせば此問題の研究は今日何ほどまで進歩せりや、ヨーロッパにて發見せられたる最新の長命術は何かと。余は之に答へて如何なるヨーロッパにても多くの醫師が長壽延命の藥を發明せんとて長く努力したり。余自らは經驗が智識を增すを以て最後に發明せられたるものを最良と信ずと云ひしに、日本人は其最後の藥劑は何なるかと問ひ、余は由つて、其一種の水劑なる旨を述べ、其名までを云ひたるに、日本人は非常の注意を以て之を聞き、余をして之をくりかへさしめて其名を記憶せり。次の質問は發明者の名、其國の何處なるかにして、余はオランダのシルウイウス敎授なりと答へしに、日本人は汝之を作り得るやと云へり。こゝに於て館長は余に否と云へとさゝやきたれども、余は然りと答へ、余は勿論調劑し得るも、此地にては不能なりと云へり。日本人は更に、バダビ

アには之を得べきかと問へるが故に然りと答へしに、皇帝は次の便船にて速に之を取りよせよと云へり。これまで皇帝は吾人より遙に隔りて貴女の間に居りたるが、次第に吾人に近づき來り、吾人に出來るだけ近接して、簾の後方、吾人の右手に坐し、命じて吾人の禮服なるカッパを取り去り、起立して全身を見得るやうにすべしとありたれば、吾人は其言のまゝにせしに、更に歩め、止れ、互に辭儀して見よ、舞踏せよ、飛べ、醉漢の態をせよ、日本語にて話せ、オランダ語にて話せ、繪を書け、歌へ、等の命令あり、吾人は之に從ひたるが、舞踏の時に余は舞につれて高地ドイッ語にて戀歌を歌へり。此外皇帝初め朝廷の慰みの爲めに色々の藝を演じたるが、使節のみはこれには加はらざりき。これ彼が主君の代表者たれば、其權威を辱しむるが如きことを避けたるによるなるべし。其外、彼は容貌、莊重にして犯しがたきの威風を供へたれば、日本人の目にも、此士君子をして左樣なる滑稽なる行動を演ぜしむるは、非禮なりと見えたるものならん。吾人の演戲は約二時間も續き、饒て終りたれば、日本人は菓子を載せし小き盆に象牙の棒を二本添へたるをもたらし、之を吾人に與へたり。菓子の殘餘は歩行に困難なる吾人の老大通詞

命によりて頂戴したり。吾人はこれにて上衣をつくるの許可を得、待ち兼ねて急ぎ身仕度し、別を告げて歸れり。

第二の謁見の終りを告げしは午後三時なりしも、吾人はなほ御老中を訪問せざるべからずして本丸を辭せり。護兵は過ぐる毎に鄭重に吾人を見送れり。老中への進物は既にそれ〴〵配達しある筈なり。到る所、役人は懇ろに吾人を接待し、茶、煙草、菓子を供せり。吾人の導き入れられたる室には、簾や障子の陰に見物人が匿れて群集し、吾人のヨーロッパの風俗の何かを演示せんことを求むるもの〻如かりしも、吾人は備後の邸にて少しばかりの舞踏せると、城の北方に住める最も年少の老中の所にて吾人の各〻が歌を歌へるとのみなりき。それより再び駕籠及び馬にのり、北方の城門より町に出で〻、左方に堅固なる外壁と濠渠とをめぐらせる道路を經由し、非常に疲勞して宿舍に歸れるは夕六時なりき。

三月三十日、朝、吾人は又結束して殘餘の諸訪問を行へるに、到る所、玄關にて一二の家士に迎へられて謁見の室に請ぜられ、室の四周には見物人、群れり。座定まるや否や、茶と煙草との馳走あり、それより其邸の役人出で來りて主人の名にて恭

しく挨拶せり。此日訪問せる諸大官は皆大にオランダ人を最負する旨を公言し、驕奢莊嚴の禮を以て客を待てり。街上には二十人の武裝せるものありて、吾人の通行を妨ぐることなからんやう、群衆を追ひ拂ひ、邸内に入れば、前日とは異りて此度は殊に奥深くに引かれ、謁見室の前面には長き簾かゝりて、其後に家族親戚など見物し居れり。座に就くや否や、七人の僕は盛裝し、皆一列になりて吾人に煙草と煙管とをもたらし、次に色々の馳走を携へ來れり。かくの如くにして酒食の饗應にあづかること約一時半にして、日本人は吾人に歌と舞踏とを所望したるが、吾人は其前者を拒みて舞だけをしたり。此日の歸宿は夕五時なりき。

三十一日、朝十時、吾人は又騎馬して長崎の三奉行の邸を訪へり。其中二人は不在なりき。吾人は此時、彼等の各〻に十個づゝのコップを贈れり。奉行シノカミの邸を音づれたる時は、奉行は大衆と門前にあり。吾人の二通詞によりて充分に打くつろぎて遊ばれたき旨を吾人に告げ、非常に厚く之を遇したれば、吾人は自在に、彼の家中を見物しあるき、其庭園を逍遙し、恰も長崎奉行の邸ならで吾人の江戸の友人の家にあるが如き心地したりき。

四月二日朝、さきの日の謁見の時と同一の順序に於て吾人は宮城に赴き、使節は皇帝に謁して別を告げたり。此間吾人は應接間に扣へおりて、多くの諸侯朝臣に接したり。一行に贈られたる諸家の贈物多し。四月五日長崎への歸途に就く。

一行は、東京を出でゝ、田舍道にさしかゝりたるに、百姓は今や泥まみれとなりて田の耕作に餘念なかりき。經由する所の數村には入口に竹の高き竿の上に掲示せられたる高札あり。諸侯の一人、近々玆に到來あるべく、すべての宿舍は其一行の用に供せらるべければ、當分何人も此地の宿屋に入るを禁ずとありき。品川附近の刑場を過ぎたるに、オランダ人の一行は、曩には見ざりし慘狀を目のあたりにせり。刑戮せられたる罪人の死屍は半ば腐敗したるまゝに委棄せられて、鳥獸これを食まんとて群り居れり。刑場より一里半も隔りたる所に人間の一頭轉がり居りき。一行の歸路には別に記すべき事なし。此旅行一月餘を閲し五月七日五島に歸着せり。ゲムブエルは歸來日本人のオランダ人及び支那人に對する密商を取締ること嚴重にして、些少の品を此等の商人より購ひたりとの廉を以て日々死刑に處せらるゝ者、又發覺を恐れて自殺するもの

あるを知りぬ。

明けて一六九二年の春ともなり、オランダ人參府の期、又もや近づき來りたれば、二月初めよりケムプエル等は、旅行の準備に從ひ、三月二日を以て出島を發足し江戸に向ひたり。

ケムプエル再度の參府

ケムプエルは使節に伴ひて三月十五日、水路大阪に着し、十七日、奉行を訪ひたるに、一同は武器を夥多聯ねたる二室を通りぬけて一の小房に請ぜられ、待つこと暫時にして愈〻謁見室に導かれたるが、主人もやがて出で來りて、初めは遠く離れて坐せしも、直に近より互に二疊を隔てゝ席を占め、辭儀終れば、彼は丁寧に客人の生國や年齡を問ひ、次で彼は語を改めて、ケムプエルに家人中一人の病人あり、十年來の宿痾に惱まされて、未だ以て全快せざる旨を告げ、如何にして之を療治すべきやを問ひたれば、ケムプエルは兎に角診斷せんことを望みたるに、奉行は病ひは身體中の秘所に屬すればとて、精しく症狀を告げ、之によりて宜しく判斷し、施藥せられんことを求めたり。ゲムプエル、由つて求むる

が如くにせり。奉行は又此時、吾人の帽子を取りて、打ちかへして之を眺め、一同をして又横文字を書かしめ、繪を描かしめ、又歌を歌はしめ、なほ進んで舞踏し、且つヨーロッパの風俗習慣の樣々を、實演せんことを求めけるが、一同は之を拒みたり。奉行は五十位の背高き青白の人物なりしと云ふ。彼は最もオランダ人の衣服を珍奇とするもの〻如く、之に就きて色々質問し、カピタンをして懇ろに請うて其上衣を脱せしめて之を見たりき。京都に行きて所司代を訪ひたる時には、日本人はオランダ人に示すに晴雨計を以てし、其性質、使用法等を問ひたり。此晴雨計は實に約三十年前、オランダ人の贈る所なりしなり。三月三十一日、一行は終に江戸に着す。以下は一行の江戸に於ける行動の撮要なり。

四月上旬、吾人の一僕は長崎にて吾人に事へたりしと云ふ一人の人を伴ひ來り、治療を求めたり。此者蓋し街上にて一巨犬に其脚を咬まれたるなりと云ふ。余何故に犬を打たざりしやと問へるに、彼笑つて自分とても犬の爲めに生命を失ふを欲せざればなりと云へり。日本にては一般に家鷄を殺す事を禁ず。犬は殊に現帝の鍾愛せらるゝ所なれば、之を殺す者は其罪死に當ると云ふなり。犬若し死す

れば、其所有主は己れの家人の死の如くに之を町の長に屆け出でざるを得ず。

四月二十日は愈〻謁見の日なり。前日來の降雨止まず、外出困難なれども、吾人は行裝を整へて出發し、第二の城廓を過ぎて第三のに入り、茲にて十時半まで待合せて濕潤せる靴と足袋とを棄てゝ新しきと換へ、之より宮殿に導かれて正午まで留まれり。カピタンは第一に只一人、呼ばれて御前に出で、拜禮し、且つ進物を上りたること常例の如し。彼は軈て吾人の室に還り來り、此度は一同、さきの謁見の室を回りて遙に奥の方に行き、廊下にて第二の謁見の時の到るを待てり。廊下は吾人をして眺めを自在にせしめんとて、凡て其庭園に向へる窓を開放しあり、吾人は座居するの窮屈を免れん爲め、そこを徘徊しつゝありたり。此時、貴人若干、來りて吾人に挨拶し、又、色々の質問を發し、談話酣なるの頃ひ、吾人は召されて謁見室に入れり。室の裝置はさきにも述べたるが如く、皇帝と二人の貴女とは、吾人の右手の簾の後にあり。老中の筆頭なる備後殿は、吾人の正面に坐せり。一同の拜禮型の如く終るや、備後殿は皇帝の名にて吾人に挨拶し、然る後色々の事を演ずべく、注文せり。曰く、眞直に座すべし。上衣を脱すべし。姓名、年齡を語るべし。立つべし。歩

むべし。轉廻すべし。踊るべし。歌ふべし。互に辭儀すべし。怒るべし。喫飯に招待するの眞似すべし。互に交話すべし。父子の親しき態をなすべし。二親友又は夫婦が相禮し、又は別るゝの態をなすべし。小兒と遊戯すべし。小兒を腕の上にのせ、又は其他之に類する事をなすべし、と。尙、吾人は例に由つて滑稽なる眞面目の問を受けたり。例へば、余の職業は何なるか。余は嘗て何等かの危險なる病を醫せし事ありや、(此問には余は然りと答へたれども、そは長崎に於てならずと云ひたり。長崎には吾人は囚人同樣の取扱を受けつゝあればなり)。吾人の家は如何なる家なりや。吾人の習慣は如何なる點に於て日本人のと異れるか。吾人の死者を葬るの場所は何處ぞ。而して其時は何日にあるか(之には吾人は常に死者を自由に葬ると答へたり)。吾人の君主の健康如何。彼は如何なる人物なりや。バダビア總督は彼よりも上位にあるか否らざるか。吾人もポルトガル人同樣の祈をなし、偶像を有するか(勿論此問は否定せられたり)。オランダ其他の外國にも日本同樣、地震あり、雷電あり、火事あるか、又、落雷の爲め觸死者あるか等の如し。此等の問答濟めば吾人は又讀むこと、箇々或は合同して踊る事を命ぜられたり。使節は小兒は幾人ありや、其名は如何、オランダより長崎までは何程の距離ありや等の問を受けぬ。此間に皇帝の命によりてならん、室を冷にする爲め、閉ぢたる窓戸を開かせ、なほ吾人に帽子を被り、話しながら室内を歩行し、又吾人の鬘を取り去るべしと命ぜられたり。余は此間、屢〻皇后を見るの機會を有したり。皇帝も日本語にてオランダ人は自分の居る室を殊に鋭く見つゝある旨云はれたるものゝ如く、吾人は彼が其もとの座をすてゝ吾人の正面にありし貴女の所に移りしを見て之を推したり。余は次に今一度簾に近きて鬘を脱すべく命ぜられ、續いて一同は、飛び上る事、踊る事、泥醉漢の態をすること、及び共に歩行するの樣を實演せしめられたり。日本人は又使節と余とに備後の年齢は幾歳位と見ゆるやと問ひ、使節は五十と云ひ、余は四十五と云ひたるに衆は笑へり。次に彼等は吾人をして夫婦の如くに接吻せしめ、貴女達は笑ひを以て之を見、頗る滿足せるものゝ如し。更に日本人はヨーロッパにて一般に行はるゝ目下に對し、目上に對し、貴女に對し、諸侯に對し、又王に對する敬禮の類を例示せんことを求め、之に續きて余は殊に歌を歌ふべく所望せられて之に應せり。聽て道化は終り、吾人は上衣を着、一人づゝ簾の前に至りて、吾

人の王公に對すると同樣の禮を以て別を告げて去れり。時に午後四時、謁見室にて喜劇を行ふこと二時間半なり。吾人はこれより備後を初め二三の接待員を訪ひ、歸宅したるは夕頃なりき。

四月二十二日、なほ、取り殘したる諸官を訪ひて進物を呈す。二十四日、宮城に赴く。百人番にて待つこと三十分にして、カピタンは御老中の前に呼び出され、御老中は屬僚をして例によりて一場の訓示を朗讀せしめたり。訓示は主として吾人が決して支那人及び琉球人の船に妨害を加ふるなかるべきこと、オランダ船にはポルトガル人や、切支丹宗僧侶は一人たりとも載せ來るべからざること、此等の條件を奉じて間違なき限りは商法自由たるべしと云ふにあり。朗讀終れば日本人は使節に三つの三寶に載せられたる三十の寛袍を賜ひたれば、使節は匍匐しつゝ恭しく之を受け、寛袍の一をば頭の上に高くあげて深く謝意を表せり。使節は、之より吾人の待てる所に歸り來れば、皇帝の命にて晝飯を下し置かるゝにより、しばらく待ち居るべきの命あり。よりて半時間ばかりも待てば、別室に招致せられたり。こゝには禮裝せる二士ありて吾人を迎へたり。これ多分、將軍の内膳の

主なる官吏なるべし。

皇帝の厨房を主宰するものを御側坊主といひ、彼は喫飯の時には皇帝の次に坐して、すべての食物を毒味す。通詞及び其他吾人に侍するすべての日本人も、彼等同志にて食事すべく、他の室に導かれたり。吾人の坐に就くや否や、若干の貴人は吾人を見んとて來りて交話せり。かゝる間に松の木にて造れる小さき膳各人の前に列せられ、種々の食物が運び來られたるも、吾人は、此日、歸宅の遲延を慮りて預め餘計の朝食を取り來りたれば、些も空腹を感ぜず、只申し譯ばかりに手をつけたるに止まりき。食事の間見物人は又來りて吾人の帽子、帶劍、衣服、すべて吾人の身につけたるを檢せり。食事は日本皇帝と云ふが如き强大君主の莊嚴驕奢にはふさわしからぬ粗食にて、一私人の食膳にもかゝる惡食はあるまじとまでも思はるゝものなりき。食事終れば又もや控室に導かれて、こゝに待つこと一時有餘、これより多くの通路廊下を經て謁見室のほとりに到り、そこなる廊下にて待たしむ。居ること半時間ばかりなるに年の頃三十ばかりなる白及び絲の絹衣をつけたる僧、室内に入り來り、鄭重に吾人の姓名年齢を問へり。吾人は之よりして

謁見室に呼び込まれ、先、日本風に敬禮したるに、簾に近よりてヨーロッパ風になせとの御意あり、之に從へば、此度は歌を歌へとの命あり、由つて余は余が嘗て殊に尊重せし一貴女の爲めにものしたりし一を擇びて歌へり。こは其末段に於て彼女の美と其他の諸德を頌し、之を幾百千億の財貨を以てすとも其貴きには到底比するに足らずと云ふの意を詠じたるものなりき。皇帝其意を譯すべき旨を余に命じ給ふ。余即ち云へり、こは、實に天の皇帝、皇族及び全日本朝廷の健康、幸福、繁昌を保全せられんことを祈る外臣が誠實の心を致すものに外ならずと。是に於て以前の謁見の時の如くに吾人は上衣を取りて、室內を步むべく命ぜられ、使節も此度は之を行へり。續きて吾人の友人、兩親、又は妻に邂逅し、又は袂別する態、互に罵りあふ樣、友人と論爭し、やがて又和解する態などを演ぜり。これが終れば、一人の僧、余に近づき來り、余は彼の健康を診斷し、之に就きての余の見を述ぶべく命ぜられたれば、脈を取つて檢せしに、疑ひもなく健康者なりけるが、余は彼の顏面及び鼻の赤きより推して其好酒家なるを知り得たれば、餘り多飲するとなかるべきを忠告せしに、皇帝を初め、一同は哄笑せり。是に於て別室に控へたる二人

の侍醫が備後の命によりて呼び出されたり。二人共に僧の如くに髮を刈り、一人は一眼眇なりき。余は先、彼等をして彼の脈に觸れしめ、次に彼等の脈を檢したるに、何れも健康なり。唯一人が少しく冷え性なれば、酒類を用ひて興奮し、血液の運動を活潑ならしむるを要し、他の一人は又熱性にして頭痛の持病を有するの違ひありたり。之より彼等は醫學上に就きて余に色々の質疑をなし、終れば、一同に饗應あり。吾人は其少しばかりを味ひたるが、大通詞は食ひ殘しを悉く紙に包みて懷中し、さて吾人に上衣を着て退城すべきを命じたれば、一同は又簾に近づきて式の如くに敬禮して去れり。吾人の通詞はあまりに多く御馳走を携帶せしめに吾人と同行すること能はざりき。これより諸大官を訪ひて其邸に歌舞せしこと亦先年の如し。

かくて一行は四月二十七日、江戸を發足して五月二十一日長崎に歸着せり。ケムプエルは此年十月三十一日愈、日本に別を告げてバダビアに赴き、それよりヨーロッパに歸りたり。

ケムプエルの日本の國民的性情に就きて下せし評言は、上の紀行の所々にも

見ゆるが、彼は尙卷末に於て己れの觀察を附記せり。由つて其大要を記すべし。曰く、日本人は大膽又は武勇と稱すべき性質を有せり。但し茲に所謂、武勇とは、敵の壓服する所となれる時、敵の爲めに加へられたる凌辱に報ゆるの力なかりし時等に於て自裁するてふ生命の輕視を云ふ。日本の內亂の歷史は此くの如き驚くべき行爲の例に富めり。余は今茲に薩摩の七青年の武勇譚を其例として示さんと。ゲムプエルはかくて濱田彌兵衞が臺灣に渡りて大膽にもオランダ知事ピートル・ニーツを生捕りたる事實を述べたり。彌兵衞等が此事蹟は餘程西人を驚動せしものと見えて、ツンベルグも其日本紀行中に此事を揭げ居れり。ゲムプエル又曰く、日本人は、戰爭に於て勇あり。確心あり。彼等は愛も憎も尊敬も輕蔑も子々孫々之を傳へて、凡ての凌辱は必ずや報いられずば止む事なく、相手の一方が絕滅するに至つて始めて熄止す。平氏及び源氏の爭ひは其例なり。自然は又此國をして他の侵襲より防禦せしめたるが如く、四圍、荒き風波を以て包圍したれば、稀に外人の來り寇せし者あれども、曾て成功せし事なし。日本人は非常に勤勉にして且つ困難に耐へ、缺乏に支持するを得。食物は

菜根龜貝海藻の類にて、普通の飲料は水なり。帽子を被らず、脚を蔽はず、シャツを用ひず、軟柔の枕を使用せずして木製のを撰ぶ。眠らずして數夜をあかすことを得、其他、難儀のすべての種類に耐ふるの力あり。されど彼等は又甚だしく禮讓作法を尊び、身を持する周密、其衣も住も頗る淸潔なりと。彼は日本の鎖國の却て仕合せなる所以を說きて曰く、日本が俗的君主(將軍の義)の下に統一されれ、其國を閉鎖してよりは、天下亦豪傑の士の起ちて、覇權を奪はんとするものなく、一般人民の頑冥にして治めがたき事も止み、外には諸外國人及び通商を許せる諸人の種々の言說を以て人民を惑はす虞あるにもあらざれば、爲政家は今は全く其手足の羈束を釋かれて、己れの欲することをなすを得、開國にて改めて新しきを輸入し、各人の業務に制限を加へ、工業的精神を喚起せしめ、又新しき技藝の發明を奬勵し、同時に數多の監督者を置きて人民の行動を監視せしめ、之をして上に服從せしめ、殆ど、全國をして禮儀作法の學堂たらしめんと努めたり。此の如くにして俗的君主は國內に叛亂の憂ひなく、己れの國土の

位地と其剛勇なる臣民の武力に依賴して、凡て外人の嫉妬猜忌を事ともせずに、今日に至りたり。內にも外にも一の恐るべき敵を有せざる日本は仕合せなる國家にあらずや。琉球、蝦夷、高麗其他すべて附近の群島は皆日本の優越權を承認しつゝあり。されば日本人の此自國繁昌の有樣を往時の歷史と照し合せて、彼等の國が專制君主に統治せられ、外國とのすべての通信通商を杜絕したる現在の世ほど、幸福なる境遇にありしことなきを確信するに至りしも、理りなりと云ふべし云々。

第三　十八世紀より開國に至る

一五、ベニョーヴスキーの日本渡來

十八世紀の末、ロシアの北方經營が漸く活氣を呈し來らんとせし時に、我南海の各地に接觸し、鎖國の日本を騷がせし一外人あり、ホンガリアの人ベニョーヴスキー是なり。彼に當時の事情を記せし紀行文あり、其經歷は殆ど一の小說なり。其何程まで眞なりやは今に疑問なるも、彼が日本の或地方に就きて記述する所は中々に興味あり。

モーリッツ・アウグスト・ベニョーヴスキー伯は一七四一年、ホンガリアの一小市ウエルボワに生れぬ。騎兵大將サミュエル・ベニョーヴスキーの子なり。幼にして軍隊生活に入り、七年戰爭の起るや、オーストリアの一士官として從軍せり。後、惡親族の爲めに父の遺產を掠められ、怏々の極、西ヨーロッパに遊びしが、ポーランド（ポワ）が隣强に對して兵を擧ぐるや、一七六七年、走り赴きて之が爲めに盡瘁し、翌年、大佐として勇敢にロシア軍と戰ひしも、不幸にして戰ひ利あらずして虜にせ

られ、一七六九年冬を以てカムチャッカに追放を命ぜられたり。以下は彼が一七七〇年十月十六日オホーツク港着後の紀行なり。

オホーツクはオホータ河に臨む。爰に一の堡壘あり、四百八十人の守兵を置く。人口は殆ど追放人のみより成りて戸數三百二十二あり。我等の一行はサンクト・ペオトル・イ・サンクト・パーウェル號に搭じて十一月二十二日出帆し、二十七日遙に樺太を望みつゝ、十二月二日、ボリシャヤ河口に到り、河を遡りてボリシェレーツクに至る。四日、知事ニーロフに面して追放人にして守るべき箇條を聞かされぬ。追放人中にクルーチェフなるものあり、余は彼の世話になりたるより最も之と親交し、二人終にカムチャッカ逃亡の計を旋せり。これに加盟するもの次第に多く、余は其首領を以て推されたり。こゝに着せし六日目に知事に敬意を表せん爲め、我等の居留地より之を往訪したるに、知事は余の語學に通ずる由を聞きしと見えて、余に委ぬるに其子女を教授するの任を以てしたり。ニーロフの第三女アファナシアは齡正に二八、頗る美なり。最も余の境遇に同情を寄す。余の知事の子女に教授することゝなるや、此一小市の夫人連は余を教師として語學、數學、地理の一學校を設

立せんとするの企さへも起し、間もなく、其學校も開校せられたり、生徒の數二十三人なり。

第十九日、事務官は、余に命ずるに千島、アレウト群島及びカムチャッカのオホーツク海沿岸の地圖をものせんことを以てし、且つ之が爲めに官廳所藏のすべての圖書文畫を繙閲するを許せり。余は喜んで之が任に當れり。此日、事務官より余にロシア人諸外人の手に成れる日記、航海記等を送致し來る。

一七七一年一月四日、余の同志ステファノーフは來りて海上生活に老熟なるボサレーフ、イスマイロフ及びラビンの三青年が一漁船を奪ひ、アレウトに赴きて植民せんとするの計畫ある旨を告げたれば、余はステファノーフをして彼等の余等と其行動を一にせんことを要請せしめたり。かゝる間に知事及び其一家の余に對する信用は益〻高まり、知事夫人は余に其三女と結婚せんことを要求し、知事自らも終に殊に余を解放する旨を宣言するに至りたり。余は是に於て請うてカムチャッカの南端ロパトカの附近に地を耕し、爰に追放人の爲め一植民地を建てんことを計畫せり。此時に當りて逃亡の同志は次第に增加して三月には五十九人と

なれり。即ち月の八日、余は政廳に出頭して舟を艤して必要品を運び、新にロパトカに植民地を作らんことを乞ふ。これ此くの如くにして大に事を擧げんとの趣意なれば、一同は窃に武器を蒐集して手くばりおさ〳〵怠りなかりき。五月十五日に聖ペオトル及び聖パウエル號は解纜の筈なれば、其時を外さず、之を奪取して我ものとし、脱走せんとは余の考なり。十三日、余は飽くまでもロパトカ植民地の經營に專心するが如きを裝ひつゝ、ロパトカ行の許可を知事に得、十四日、四艘の橇に乘りて發し、二十一日、船に乘り變へて南岬を回航し、占守島の西北岸に上陸してこれに一泊し、二十二日ポロムシル島、それよりアライト島に至り、二十三日終にロパトカに至り、舟行、ポリシェレーツクに歸れり。

されど陰謀の計畫は次第にうす〳〵知事及び事務官の嗅ぎ付くる所となり、四月下旬に於て、端なくも衝突を生じ、知事は殺され、我黨は全市府を占領し、又、聖ペオトル及び聖パウエル號を拘禁せり。政廳の財産は凡て我黨の爲めに占められたり。五月初旬、出帆の準備を爲して余はアファナシアを伴ひて船に乘り、五月十一日を以てポーランドの旗を飜しつゝ出帆せり。乘組員は船員七十五人、婦人九人

外乘客二十一人總べて九十二人なり。

ベニヨーヴスキーはこれより直に南せずしてアレウト群島の方面に出向したる旨を記するも、此處、彼の言は甚だ疑はしとす。彼曰く

五月十三日アライトを見、カムチヤッカの南端を回りて、二十日ベーリング島に上陸し、二十四日紀念の十字架を島上に樹てゝ出帆す。氷塊の流れ來るをも屈せずして、チェークチ地方を探檢し、六月十九日にはアメリカ大陸附近のカヂアク島に至れり。かゝる間に食物缺乏し來り、水亦窮乏したれば、一同議して兎に角、南して日本に到るべきを決せり。これ七月五日なりき。

事の順序を明かにせんために、序說は稍〻精に失したり。ベニヨーヴスキーの日本紀行は其實、此以後にあるなり。

七月十四日、余は地圖を出して何れも憂色ある船員に示し、日本の海岸までこれより二四〇乃至三〇〇リーグあり、即ち順風ならば六、七日にして到達し得べきを告げぬ。十五日、夕に至りて陸地見ゆとの知らせあり、翌日、一島の前面に横るを見る。近づきて碇泊し、人をやりて清水を求め來らしむ。爰に良灣あり、衆、踴躍して

上陸す。十七日、病者と女子とを上陸せしめ、樹木を伐り仆して矮屋を建て、互に手わけして或は漁し、或は獵せり。清水の海岸にありけるより、此島を清水島と命名し、なほも其内地を探りたれば、熱帶產の果物を得たり。鑛石をも發見せしに、中に黃金ありとて皆々ざわめきぬ。十九日、數多の鮮魚の收獲あり、船員の多くは此島の天幕生活の樂み多きを見て、復、苦痛の海上生活に入らんとを厭ふの風ありけるも、余は、斷然、これより日本に赴かんと欲する旨を告げて曰く、此島に永住せんことは、余は寧ろ諸君よりも之を熱望するなり。されど之を行ふこと能はざる諸種の事情の存するを忘るゝなかれ。第一に我黨は男子のみ多くして女子は僅に八人に過ぎざるに非ずや。かゝる不均衡を以ては、平和の保持せられがたきこと云ふまでもなかるべし。故に余はこれより日本に航し、そこより數多の女子を奪ひ來つて再び、こゝに引かへし、共に愉快なる生活を送らんと欲す。諸君、以て如何となすと。一同余の意見に贊成なりし故、二十一日、紀念の十字架を此無人島に樹て翌日出帆せり。此島は北緯三十二度四十七分に當れり。

二十五日又もや陸地に接したれば、之に近づき、夕方、人をして之を探らしめしに、

是又無人島にて、日本人が時々漁獵の爲めに來るのみなるを知れり。二十八日、他の島の西南に至れるに、玆に數多の漁船あり、其乘員は我船を見るや、或はフィアシ・ト・オランダ、フィアシ・ト・シンジと叫び、或は又南無阿彌陀佛と叫べり。やがて一の巨船來りて我船を曳きて海岸に行けり。即ち二十九日、ウィンブラートとクズネツォフとに十二人の武裝せる護衛者を伴隨せしめて一書を土地の君主に呈せり。これ蘭文にて航海難澁の次第を認め、食物を乞ふものなり。而して余は三枚の海狸の皮、六枚の貂皮を贈れり。一行は夜に至りて漸くに歸り來れり。日本人一人も之に同伴せず。余は彼の言を解すること能はざる故、通譯としてバサレヨーフを召し來らしめたり。バサレヨーフはイルクーツクに在る三年の間に、カムチヤッカに漂着したりし日本人に就きて少しく之を研究したりし者なれば、一行中、唯一の日本語家なるも、如何せん、永く之を口にせしことなき爲めに殆ど打忘れ、僅に挨拶位を辨じ得るに止まりたり。ウィンブラートは上陸の顚末を語れり。彼等の陸岸に近づくや日本船は之を迎へて上陸せんとを求めたれば、四人を船にのこして八人は日本人に從ひ上陸せしに、そこには騎馬の武士二百人と弓槍を手にせる二百

人の歩士とありて一揖せり。こゝにて與へらるゝがまゝに馬に乘りて、上陸點より凡そ二十町ばかりにして一の城廓に達し、下馬して內廷に導かれ、諸の貴人に遇ひ、更に廣き座敷に通されたるに、こゝには城主あり、先、一行に向ひて曰く、フィアシグザリマスと。其解せざる旨を答ふるや、彼又、ト、オランジと云ひたれば、オランダ人にあらざる旨を告げたるに、又問うて云ふ、ト、シンジと。又解せずと云へば、此度はト、ビリビン、ト、ブラキ、ト、マスイ、ト、ツングーシと云ふ。皆然らずと答へぬるに、彼、やをら側なる大鼓を打ちて侍臣を召し、書籍及び地圖を持ち來らしめて己れの求むるものを探し出すや、近よれと云ひて一の地圖を開き示せり。こは支那、日本、フイリッピン、印度よりヨーロッパに至る迄も記すものなり。彼はウィンブラートの手を取りて此圖に指さゝしめたれば、ウィンブラートはこは、何處より來れるかを知らんとするものなるを思ひて、ヨーロッパを指示したるに、城主は愕然として突如、數多度、ナマンダブツを唱へたり。ウィンブラートはこゝに於て航海中の難義の事共を說明せしに、彼は充分に之を了解せし如く自ら、其口及び腹部を指し、侍臣を召して何やら長く命令せり。一行は早く歸船せんことを欲し、狸皮と貂皮とを差出し、且つもたらす所の手書を手渡しせしに、彼は、手書を受けて贈物をば辭せり。ウィンブラートは曩に上陸の際、日本船の官吏に贈物を與へんとしたるに、彼等が自己の頸を指して之を固辭せるを見たれば、城主にも亦頸を指して見せたり。一行は城主に導かれて隣室に入りしに、こゝに一女子のあるあり、ウィンブラート之に贈物せしに、彼女は彼に花籠を贈れり。

此室より出でゝ更に別室に至るに、一士あり、城主しばらく之と語りて一行と別る。一行にはこれより此士に從ひて上陸の地點に至りしに、そこには二船の糧食を滿載せるありき。即ち、此士を伴ひ、糧船を携へて歸る。同行の日本士人は即ち此人なりしなり。余は以上の始末をきゝて感謝の意を表する爲め、二對の黑貂皮をもたらして之を此士に贈りたるに、彼は一個にて足れりとて固辭せり。强ひてすべてを携へ歸らしむ。彼堅く之を秘せんことを求む。我等はなほ舟の漕手にも何か贈りたしと云ひしも、士は又辭せり。我等の貰ひ受けし品は、米二十五俵、砂糖四壺、茶四瓶、細かに刻みたる煙草一瓶、豚四頭、貯藏の果物十六瓶、外に葱、蜜柑、橙、鳳梨、鹽魚二樽、酒六樽、鳥五十尾ばかりなりしが、中にも最も船員を喜ばせし品は强烈

の酒三樽の贈物にてありき。

翌朝三人の日本人一舟に棹さして來り、其内の若き一人は盛裝して船に上りたれば通譯としてバザレヨーフを出せしに、彼は漸くに略、其來意を解せり。日本人は上りて船を見物せんことを欲するも、大砲ありて恐ろしと云ふにありき。余其掛念に及ばざるを告げければ、彼去れり。即ち船を清めつゝありしに、間もなく、三艘の舟の我船指して漕ぎ來るを見き。其中に傘をさしたる一貴人あり、彼等はフィアシ・グザリマスと呼びながら禮して我船に上り來れり。バサレヨーフは余が通譯たり。貴人はバサレヨーフ通譯の度毎に、深く身を屈して禮せり。余、日本人の各〻に豹皮を與へたるに、彼等大に喜び、又、船の見物を求めたれば、普く導きて示せり。彼等の一人は筆紙を持して頻りに何事かを書けり。此日午前十一時、日本人は又糧船二艘に清水二十六桶、酒二樽を添へてもたらせり。我等、運搬夫に物取らせんとせしも皆辭して去れり。

七月三十日、午後三十の小舟は、樂を奏しつゝ來り、中に一老人と二小兒とを伴ひ來り、之を人質として余の上陸せんことを求めたり。余は何ぞ人質の要あるとて

四人の從者及びバサレヨーフに、該老人小兒をも伴ひて行けり。我等の日本小舟に近づくや、日本人はすべてウリ・ウランと呼べり。

上陸するや、直にそこにて茶菓の馳走あり、我等はこれより肩輿にのりて城に向ふ。やがて一大花園に達せしに、こゝには番兵二人ありて、ウリ・ウランと呼びぬ。我等はさきの老人と共に此花園に入り、中央の小屋に赴きしに、爰には城主ウリカミあり、問うて曰く、足下は何人なりや、何れより來れりや。何故に日本に來れりやと。余はバサレヨーフの通譯を以て答へしも、能く通ぜざりければ、城主は直に畫工を召し、來らしめ繪にて物語れり。ウリカミ、余に此地に二三日の逗留をなさんことを求めぬ。余は日本の國情を知らんことを欲するを以て之を諾す。此夜、盛んなる宴會にて歡迎され、余は箸を持つこと能はずして閉口せり。此夜は此家の隣なる宮殿に宿る。翌日午前十時、ウリカミは三人の坊主を率ゐ來りしに、坊主の一人はオランダ語を語り、余に云つて曰く、余は土佐の生れなれども、兩親は九州に居住するより、長崎にてオランダ人に就き語學を研究するを得たり。ウリカミは此地方の主にして、皇帝の女を娶れり、彼は頗る天文に通じ、人民の崇仰する所た

りと。余は、日本人は耶蘇教徒を嚴罰すと聞きたれば、此地に至るも、實は甚だ恐怖の念なき能はざりきと云ひければ、坊主は外教禁斷を辨明せり。既にして我等はウリカミに招かれて別室に赴きたるに、ウリカミは、余の永く日本に留まりて其兵學の師とならんことを求めたりしも、余は家族の故を以て之を拒み、ウリカミと共に晝飯を喫し、且つ宗教上の物語をなせり。

一七七一年七月三十一日、船中の一同は招かれてウシルバチャル灣なるウリカミ王の宮殿にあり、獸皮を數多の日本人に頒つに、ウリカミは大に喜びて一行を厚く饗せり。坊主等は聖ペオトル號を見物せんとて船に行けり。

八月一日、日本大官の會合あり、余はこれに招かれて赴きしに、日本人は種々なる質問を發し、且つ、余に、宗教傳布の爲めには決して再來相成らずと達したり。我等の用事は既に終を結びたり。ウリカミは將にキリングールの市に退かんとし、我等の船も出帆の準備充分に整へり。我等は王よりの贈物を受けたるが、中には、黃金と眞珠とにて飾りし劔あり、陶器、茶、煙草、旗、寶石入の箱、黃金入の箱等あり。ウリ・ウランの聲にかこまれつゝ出發して海岸に至りしに、さきの坊主の二人の武士

が我等の行に伴ひて乘船せり。此二人の武士は余に二個の卷物を手渡しせり。これ日本に來ることの許可を認めたるものなり。我船員は此碇泊の間に、日本人に獸皮を賣りて巨多の金を得たりと云ふ。

八月二日、余はウシルバチャル灣内なる聖ペオトル・イ・聖パウエル號上にあり。余は爰にて再び、清水島に赴かんよりも、寧ろ直に廣東に向つて發するの得策ならんを說きて一同の賛成を得たり。即ち此日、午後三時、二十一發の大砲を放ちて袂別出帆す。航海中オランダ船を見る。我等は今や一の半島に沿ひて回航しつゝあり。

八月四日、又日本の近岸に至る。五日イヅ王國の西方にありて碇泊す、こゝにて兼て依賴に應じて便乘せしめたる日本人若干を上陸せしむ。此時、此等日本人を護送して上陸したる船員は、劔と、槍とを携へし一日本武士に遇へり。其人曰く、長崎カラス・トオラヂ・フイアシ・グザリマスと。我船をしてミサキ・イフィマ・カラスなる港に入らしめぬ。然るに、忽ちにして三人の武士、一小舟にのり來りて、何處より來れりや、何處に行かんと欲するや。何故に來れりや。何日まで碇泊せんとするやと、質問を續發し、且つ、船を見物し、船員の人數を知らんことを求めたり。余答へて曰く、長

崎に赴かんと欲するも、風波にあひて一時難を此港灣に避けたり。我等は又糧食薪水を缺く。願はくは互市を許せ。乘員は百五十人なりと。船の檢視のみは之を謝絶せり。余はボサレヨーフが果して余の言を正しく通じ得たりしやを知らざるなり。されど日本人は、我等の鬚髯や衣服の風を見て我等のオランダ人なることを疑ひ、イスパニア人ならんと推定するが如し。余は由つて日本在留のオランダ人にあてたる一書を草して之が取次を依頼せり。其文左の如し。

オランダ東印度商會の商館長に呈す

余は海上にて遭難し、自身の安寧を求めん爲めに、筆紙に盡しがたき艱苦を嘗め、今現に此處にあり。願はくは通譯者を至急この地に送遣せられ、貴下の港に我等を導き行き給はんことを。余の船は乘員凡そ百人のコルベット船なり。返事を待つ。

モーリツ・アウグスト・ベニョーヴスキー

貴下の余を誤解せらるゝことなからん爲めに、殊に附言す。余はボーランド聯邦の一將なりしが、ロシア人に擒にせられてカムチヤッカに送致せら

れたり。余は終に勇を奮うて九十六人の同志と共に逃れてヨーロッパの歸途、日本海岸に到れるものなり。

ベニョーヴスキーが事蹟は、我國の舊記にもしるされ、彼の事を或はアウスと云ひ、或はモリツ・アフダル・ハンベンゴロとしるしあり。アウスはアウグストなるべく、ハン・ベン・ゴロはファン・ベニョーヴスキーをオランダ流に讀みたるものならん。舊記によりて之を見るに、彼のさきに着せしは、四國の阿波にして、ウリカミと云へるは蜂須賀侯なるが如し。阿波侯の文書によりて當時の實狀を詳にするを得ざるは、少しく遺憾なり。ベニョーヴスキーはなほ、彼が此後に於ける閱歷を物語りて曰く、

六日、到底、戰爭によらずしては、日本人をして我意を容れしむるの望なしと見て取りたれば、余は此日斷念して出帆せり。九日、西北に當りて陸地を見る。夕に至りて一灣に入れり。翌日、人をやりて上陸せしめんとせしに、日本人拒みて上陸せしめず。此附近に一市街ありたれば、そこに近く船を寄せ、バサレヨーフを通譯者として二十餘人を上陸せしめ、余自らも赴きたるに、日本人は數多武裝して居り、余

を見て一老人近より來りて曰く、オランダ人と雖、許可を得ざれば、上陸を得ざるの此地に何用ありて妄りに上陸せりやと。余答へて曰く、我等はオランダ人にも、イスパニア人にもあらず。水と食物とを求めんとて來れる窮民なりと。彼やむなく、三艘の舟に之を搭載してもたらせり。日本人は又數多我船に來りて毛皮を買求せり、其中の一人の年若きが驚きたる樣にて呼んで曰く、ト、オランダ、ト、シンジ、ブ、チッポー(鐵砲)と。十一日午後二時頃、陸上に太鼓の響あり、騎馬及び徒歩の武者多く槍を携へて現れ出でたり。かゝる間に三艘の舟にて來れる日本人あり、余試みに大砲を放たしめたるに彼等愕き恐れたり。其人曰く、余は土佐王國の海岸の守備長ウチウミ・ママスと申すものなり。外國人が君主の許可なくして上陸したりときゝて捕縛に打ち向ひたるなりと。彼は一の卷物を懷より取り出して示せり。余更に害意を挾めるものにあらざるを陳辯し、彼に與ふるに海狸の皮一枚、豹皮六枚を以てしたるに、彼は欣んで歸れり。我等は彼の去りたる後、こゝも亦貿易の望みなきを見て出帆したり。

十二日、午後六時、六里ばかりの彼方、右舷にあたつて陸地を見る。七時、更に他の一

陸地を見る。十時正南にも西南にも島の存するを見たり。此大島と小島との間に泊せしに、はしなくも、日本船と衝突して彼等は弓もて、我等は鐵砲もて交戰し、我等は終に若干の日本人を虜にせり。十三日、高島の附近に碇泊す。こゝにて昨日捕へし日本官吏を吟味したるに、彼等は九州の人にて、即ち長崎と高島との租稅を徵收する役目のものなりき。余は出帆の時まで之を拘留しおかんと思ひしも、彼等は八日間の中に、ウランダの港に歸りて護送の船と會せざるべからざればとて哀訴したれば、餘義なく放ちやれり。此等の船が五百隻ばかりウランダの港よりしてオサクタの港に向けて發するなりと云ふ。九時出帆、廣き水道にさしかゝり、西南指して走りぬるに、十四日、二島間の海峽に至れり。此時聖ペオトル號漏水の爲めに難澁し、やむなく、良灣を求めて入りしに、こゝには住民ありき。即ち上陸して天幕を張りぬ。こゝはウマメー・リゴン島なり。やゝありて二人の日本人、我天幕を音づれ來りしも、言語通ぜず。彼等の一人は我等に一の紙片を示せり。取りて閲するにラテン文にて左の如く書かれたり。

此書を讀む人に

一七四九年五月二十四日、余は三人の他のエスイタ教徒と共に此地に到りしに住民は我等を厚遇し、余は先づ、福音を宣傳せん爲めに、こゝに暫らく定住せんと決したり。此島の番人は支那語をはなし、熱心に唯一の善たり、良信仰たるカトリック教を布教せられんことを求め、しかのみならず、信仰流布の余の事業に尠からざる助力をなしたり。余はかくして一方に於てはエスイタ團體の守護者の神秘的の補助によりて最初の一年中に二百六十人を新に洗禮せしむるを得たり。何れも熱心、恒心、及び耐忍を以て余をして頗る前途の希望を抱かしめぬ。一七五〇年、余の三人の同志は他の島に移り行けり。彼等はもとより余と同じ熱心を以てこれまで働きしものなり、一七五四年、余、病みたれば、將來を謀る爲めに、島の貴人をしてエスイタ教徒の他のものとひきあはさしめ、此支那にも日本にも屬せざる獨立の人民に來り說教せんことを求めしめたり。支那日本の若干の商船の外には余は未だ何ものをもこゝにて見たることなし。但し此島に接近して走れるオランダ船をば見しことあり。

ウスメー・リゴン島にて一七五四年九月十八日

エスイタ教徒及びポルトガル人より印度への布教使

イグナチオ・サリス

漏水の爲め、船内のものすべて浸されたれば、之を陸あげして日に乾かせり。此日武裝せる三百人ばかりの日本人又來り、二人の隊長は十字を手にて描きたり。これ教父イグナチオによりて洗禮を受けし耶蘇信者たるなり。住民、木材を運搬し、我等の爲めに假屋を建築し、又米、馬鈴薯、甘蔗、火酒、魚類、肉、果物等をもたらせり。十六日小屋建の爲めに繁忙なり。住民も船員と共に働く。余は即ち船員中の文字ある者に命じ、ロシアの字引體のものを作らしめ、之に一々日本語をあてはめて相互の會話に便せしめたり。島人、天を指してジニャロと云へり。イグナチオと云ふ事ならん。教父感化の著大なるを見るべきなり。余等は又土人の誘導にてイグナチオの墓に詣でたるに、そこには祭殿の設さへあり、崇仰の篤きを思はしめたり。船の修繕も怠なく行はれたり。島人余に永住を勸めて止まず。余は、ともかく一應ヨーロッパに歸りて、然る後諸人を伴ひ再來すべければ、こゝ二年の後ならでは再

來なりがたしと云ふ。我等と島人とは日に日に親密になれり。余は島のニコラスと云へるにも遇へり。これ敬父イグナチオの子なりと云ふ。

十八日、船、完成したれば、荷物を船に運び、島人に再來を告げて出帆の用意す。十九日、島人又種々なる贈物をもたらす。我等の島人との條約は、一は琉球文にて、一はラテン文にて二通作製せられ、前者を島人に付し、我等は後者を得たり。十九日澳門に着せり。

ベニョーヴスキーは此條約文と云へるをも其紀行に採錄せり。こは彼とニコラスとの調印せるものにして、要するに若干年の後に於てベニョーヴスキーが善良なるヨーロッパ人若干を此島に率ゐ來り、此處に歸化すべきを約せしものなりき。彼は澳門に滯在すること暫時にして、一七七二年一月中旬、フランス船に搭じて其地を去り、七月ローリアン着、終にパリに歸着せり。こゝにて彼は己れの紀行を時のフランス政府に上り、由つてマダガスカル島の征略を建言せしが、フランス政府は彼に先づ、其探檢を依囑せしかば、彼は一七七四年二月を以て此島に渡り植民地を創開せり。然るに節操なき彼は、此後イギリスにて植民

協會を建て、一七八五年七月、再びマダガスカルに赴きしも、此島よりフランス人を排除せんとするに及び、フランス政府は附近のフランス島より其兵を派して之を伐たしめ、翌年ベニョーヴスキーは敗れて死したり。彼の紀行は、もとフランス文にて認められしものなるが、イギリス王室學會の一會員たるニコルソンと云へるが、之を英譯して一七九〇年ロンドンにて刊行せり。これより直に各國語に飜譯せられ普く行はる。

一般に冒險者の紀行には誇大の記事多きを常とするも、其誇張虛造、ベニョーヴスキーの如く甚しきはなし。これ彼の諸傳記家の一致する所、一度、彼の自叙傳を繙かんものは、何人にても容易に實らしからざる事の數々なるを認め得べし。然れども不幸にして吾人は日本紀行中の足らざるを補ふだけの材料を有せず。我舊記には、ベニョーヴスキーが阿波にて先、蜂須賀侯にロシア人北海に於て頻に我を窺窬しつゝあるの實狀を告げ、後ウスメ・リーゴン即ち薩摩の大島に到りし時にも、島人に日本の大事に關することを密告したれば、島人は之を薩摩藩に報じ、島津侯よりは有司直に赴きて之をたゞしたるに、ベニョーヴスキ

一は横文の書六通外に地圖一枚を殘し、謝して去れりとあり。此等の書を長崎蘭館に送致して譯せしめたるに二通は館長あてのもの、他の四通は二通づゝ同文なり。皆獨逸語とラテン語との二通づゝなり。二對中の一は、

うしま（大島のこと）の人へ

異國の八月上旬、うしまへ上陸候處、饑渴に及び候段、仕方を以て相歎き候處、島の人來り、薪水菓子類被相與恭仕合奉存候。存掛なき漂着に付右返禮に差送候品無之候。御國の人情厚き事、恩義謝しがたく存奉候

バロン・モリツ、アラータル・ハンベンゴロー

他の一對は、

うしまの人へ

唐國廣東を指して至り候處、異國七月二十日大風に遭ひ、うしまと申所へ舟つなぎ候へば、所の人懇切に取扱申候。先達、日本地に於て兩度書狀、長崎なるオランダ國頭御役人へあて差出申候通、此節も右の御禮奉謝候へども、國風不案内に候間一書を以て申述候。

ベニョーヴスキーが長崎蘭館長にあてしと云ふ書は、我日記によれば、他の紀行に載せられしものと大に異る所あり。

長崎へオランダ國より差越候御役人へ

バロン・モーリツ・アラタール・ハンベンゴロー

數日の難風にあひ海上を凌ぎ罷在候中、再び日本の地に漂流致し懇切の慈（なさけ）を以て御國の救を得申候。然れども面會を不得事、甚だ不幸の至りに候。茲に一書を以て信を明し候は、我今年ガリヨット船二艘、フレガット一艘カムチャッカよりロシア國の命を請け、要害の爲め、日本國の筋を來り廻り見、一所に集まり候筈にて候。必定考へ候は來歲に至りては、松前の地其外近所の島々へ手を入れ候事相きこへ候。此等の地は赤道以北四十一度三十八分と測量を得候。隨つでカムチャッカの近所クルリイス（千島）と申島へ砦を築き、武具等を込置候。件の次第ホーコエキセレンスへ對し、聊も隱さず、告げ知らせをき申度候へども、かくの如き書を通じ候事、元來、ルス國の禁じ申處に候へば今こゝに信を盡し、義を以て朋友にも秘され候義奉希候。且

つはヨーロッパの人物に候故の事に候。私に云ふ、貴邦より船を出し置かれ、其害を御防ぎあれがしと謹んで告げ申候。

一七七二年ユーリー二十日　うしまに於て

バロン・モーリツ・アラタール・ハンベンゴロー

書添の文

若し御用にも可相成やと存じ、カムチャッカの圖を殘し置き候。

ロシアが北海の經營に鋭意しつゝありしは、當時の實際なりき。此際ヨーロッパにては、其國際の離合よりして、端なくもイギリス、ロシアの二國が同盟して日本を侵略すべしとの流說を釀さしめたるの珍事あり。其事情は次の如し。スッラスブルヒの人にてシエレルと云へるあり、夙に東洋の語學を修め、東ヨーロッパの諸國を歷遊して終にロシアに到り、其學士會院秘書局に勤務せしが、公務の傍、ロシアの內地を旅行し、又其東洋に於ける徑路に就きて專ら、研究する所あり、居る事三年にして一七七三年、フランスに歸り、翌年、自己所持のロシアに關する書籍及び記錄をフランスの外務省に賣却せり。其中、彼は、ベラルブルグ

在勤中、目覩したりしロシア政府の施設、例へば、ロシアがイルクツクに海軍學校を興し、日本語學其他を研究せしめつゝあること、ロシア朝廷は近時に至り、他に必要を認むること能はざる、シベリヤの地方に急にコサック兵を集屯せしめたる事等も告白したり。時にイギリス、フランスは北米の獨立戰爭に關して戰ひを交へつゝある際なりければ、此際ロシアの如き强大國の行動は、兩國の最も注意を怠らざる所なりき。恰も北米聯邦の兵を擧げてより二年、即ち彼等が獨立の宣言を公にしたりし一七七六年七月を以てイギリスは有名なるカピテン、クックを擧げて北太平洋の探檢に從事せしめ、クックは直に喜望峰を回りて東洋の地へと向ひければ、世人は頗る此行を訝しみ、或者は、これイリギスの日本を侵略せんとする急先鋒ならざるなきを得んやと云ふに至れり。當時イスパニアは、ウルグアイに關してポルトガルと爭鬪しつゝありければ、之を見てイギリスのポルトガルを助くるに至らんことを憂ひしが、ロンドン駐劄のイスパニア公使マッセラノ公は、ふと、イギリス、ロシアの二國同盟して日本を侵さんとする企ありと聞き、之をロンドンのフランス公使ギース伯に告げしより、

ギースは、即時、一七七六年九月十六日附を以て之を本國の外相ウエルジャンヌ伯に飛報せり。ウエルジャンヌは、ロシアの極東政略に注目しつゝありたれば、之を耳にして棄て置き難しとし、直に各方に訓令して事の眞相を探査せしめたり。然れども、此流言の起源は、如何にも奇にして、且つ此密計を口外したるはロンドンのロシア公使館員なりと云ひ、而も其云ふ所の日本侵略計畫なるものゝ如きは、洵に怪訝すべきの極みなりしかども、ウエルジャンヌは、エカテリナ女帝登祚以來、ロシア極東政略の漸く活氣を呈し來れる事相を目覩して、其野心終には天賦の美地なる日本列島に及ばずして止むべきにあらざるを思ひ、流言も決して單純なる流言にあらず、必ずや幾分の根據あるべきを信じ、種々奔走、對抗の策を施す所ありき。之に對するギース伯の意見によれば、此際速に極東の事情に通ぜるベニョーヴスキーを起して、之を日本に派遣し、ロシア、イギリス兩國の計畫の裏をかゝせ、クックをして其策を施すに所なからしむべく、而して之が爲めにはクックに匹敵せん程の大航海士ブーカンキル(ブーカンキルはフランス人にして世界を周航せし最初の冒險者なり)を遠航隊の首領

に推し、之をして急航マダカスガルに到らしめ、こゝにてベニョーヴスキーを伴ひ、共に日本に赴き、陽には平和の探檢を口にしながら、陰に武器を日本に與へ、之が後援たるべしと云ふにありき。

此フランス政府の憂懼は、當時の實際的形勢より之を推するに、蓋し杞憂にはあらざりしに似たり。第一にロシアの北地に垂涎せるや久しく、實際シエレルの云へるが如く、シベリアの要所に日本語學校を建て、之を研究しつゝありき。第二にロシアが千島の列島を蠶食し、終に日本のエトロフより蝦夷島を窺窺し、通商の平和手段に、侵略の非常手段に種々計畫しつゝありしも、亦事實なり。第三にカムチャッカの亡命者たるベニョーヴスキーがカムチャッカに於て此ロシアの野望に對する記錄類を發見したり。彼は已にボリシエレーツクを占領し、官府の財物を擧げて之を己れの所有とし、所謂、革命に於て成功したる者なれば、文書の如き、繙閲するの自由を得たらんこと疑ひを容るべくもあらず。

ベニョーヴスキーが紀行に其衒誇虛僞の事實を記するもの多きは、疑ひもなき事なるも、彼が此書に載せたる事實に至りては、吾人は其虛なるを信ずる能は

す。彼の、カムチヤッカにありし頃、ポリシエレーツク地方及びオホーツク地方に、日本をして其國を開かしめんことに就きて種々の內相談ありしは、實らしく、これ等の說の自然にベニヨーヴスキーの耳目にも觸るゝに至りたらんは必定なり。ベニヨーヴスキーの去れる後、幾ばくもなくして一七七八年、我安永八年に於てロシア船の初めて我北海の門戶を叩きて通商互市を求めたるの事あるにあらずや。第四にベニヨーヴスキーはフランス政府に報ずるに、日本人民と交通を開くは、さまで難事にあらず。臺灣、大島、國後の如く日本に接近する地に居留地を設置するは容易なり。彼は現に大島の住民より同地に赴くの免許狀を受け居れば、再び、其地に赴くに於ては、優に之を利用するを得べきを云へり。ベニヨーヴスキーは、その紀行に大島々民と結びたる條約文をも揭げ居れり。要するに、フランス政府が深く此流言に動かされて爲す所あらんと決意するに至りしは、以上列擧するが如き理由の存するに由る者なりしも、ウニルジヤンヌが探査の結果イギリス、ロシア同盟と云ふが如きは、全然無根の事實なりしをたしかむるに至りしかば、一時、フランスを驚かせし遠航隊派遣の計畫も、こゝに空しく中止となれり。(カピテン・クックがロシアと謀りて日本侵略の實行に從事すと云ふことは、クック遠征の行動に徵して些かも其形跡なきを明かにすることを得べし)。

何故にイギリス、ロシア同盟などてふ風說は流布せらるゝに至りたりしか。蓋し當時、イギリスは、其大なる植民地を失ふの危險に瀕しつゝありければ、之に對抗する列强は互に强大なるロシアを各自の味方に引き入れて勝をヨーロッパ中原に制せんとし、相競うてエカテリナ女帝の甘心を求むるに汲々たりき。然るに、女帝は寧に心をイギリスに傾けつゝありて、其意を嬖臣ポテムキン元帥に打明けゝれば、イギリス政府は、アメリカ、フランスの同盟に對してイギリス、ロシア同盟を締結し、ミノルカをロシアに與ふる代りに彼の助力を得て新世界に於ける非運を挽回し、舊世界に於ては又益〻其勢力の根基を鞏固ならしめ、ロシアの極東政略には援助を與へてその南侵を容易ならしむべしとし、ピット宰相の如きは、頗る之に就きて其腦漿を絞る所あり、先、ポテムキンを自家藥籠中のものとし、是非共兩國を連結せしめんと銳意したり。然るにロシアの

外務大臣パニン伯はイギリスと友邦となるを以て策の得たるものにあらずとし、寧ろ當時、イギリス王ジョージ二世と相敵視しつゝありし、プロシア王フレデリッキ二世と提携せんことを欲しければ、一七七六年、ジョージ二世がペテルブルグのイギリス公使カンニングをして北アメリカの戰爭に對し、二萬の援兵を得んことをロシア政府に求むるや、忽ちにしてこれを拒絶したり。而してプロシア、フランス等の大陸諸國は、一方に於ては、クルランドとポーランドとを併呑するの寧ろ遙にロシアの利とする所たるべきを以てペテルブルグ政府に慫慂しければ、パニン伯は益〻排イギリスの勢焔を熾んならしめてイスパニア政府と謀り、爰に遂に武裝的中立なるものを中外に宣言し、之を以て少からずイギリスの北アメリカに於ける戰爭を妨害したり。思ふにイギリス、ロシア同盟を形成せんとすることは、北米獨立戰爭の開始と共に交渉の端を開き終に其終りに至るまでも持續したりしとなれば、此同盟熱は、自然にカムチヤッカ地方のロシア人にも傳達せられて彼等は該同盟にして其成立を告ぐるの曉、陸上のロシア兵と海上のイギリス船と相呼應して共に弱國を侵略し、以て

全世界に雄飛するに至るのときあらんを夢想しつゝありしならむ。畢竟日本侵略の流言の如きは、ロシア人平生の志望の機會にふれて世に發露せられたりしのみ。イギリス、之にあづかると云ふが如きは、もとより事實にあらざりしなり。

一六、ツンベルグの日本觀

カール・ペーテル・ツンベルグはスエデンの人、一七四三年(寛保三年)の生れなり。ウプサラ大學にて有名なる植物學者リンネウスの門下生となり、一七七〇年同大學にて醫學を卒業す。彼はこれより博物採集の目的を以てまづ、オランダに遊び、此地より出帆して一七七一年明和八年喜望峰に到り、更に布哇に赴き一七七五年七月(安永四年)長崎に渡來せり。彼の日本に於ける觀察錄は、後、フランス文にて刊行せられたり。實にケムプエルの日本史に續きて外人の日本關係書中に推重する所なり。

ツンベルグの長崎及び出島觀察(一七七五年八月十五日より一七

七六年三月四日に至る)

余の長崎上陸後第一に注意せし事は、オランダ通詞連と結び、又我出島に來訪する日本役人と親交することにありき。余の醫學に關する知識は、大に彼等、及び其縁者、友人に有用となり、之に加ふるに、余が人を待つの公明正大なりし事は、大に彼等をして余に信用を置かしむるに至りぬ。余は又野生の草木中より諸種の有用なる植物を發見し、ひたすら醫學及び植物學の研鑽に餘念なきを示せしを以て、幸ひにして之まで決してヨーロッパ人に許されざりし特權を許されて、植物採集の爲めに長崎の近郊を散策するを得るまでに至りたりしも、此特權は永く余に許されずして、奉行は心窃に危懼の念に堪へざるものゝ如く、幾もなくして之を撤回したり。かゝる際に於て余の幸ひとせし事は、多くのオランダ通詞が醫學に於て余を師と仰ぎ、諸事余が指敎を乞ひたりし爲めに、余は之を利用して彼等をして長崎近郊に發見せし凡ての植物を余の許に齎さしむるを得し事なり。余は又之が爲めに彼等との交話よりして大に日本の政治、風俗等に就きて得る所あり、尙又諸種の書籍や學問、美術の參考に供せらるべき珍品をも手に入るゝ

ことを得たり。

八月十五日牛、羊其他の家畜を船より陸に揚ぐ。日本にては肉類を得ること能はざれば、吾人の消費するだけの物は出島にては備へおかざるべからざるなり。日本人は毎日、三回、吾人の家畜に與ふべき草をもたらす故、余は其智識慾よりして早速に之が取りしらべに取りかゝりたるに、中には頗る珍奇なるものありて、余が出島に於ける幽囚の單簡なる生活は爲めに大に多忙となれり。十六日以後は、衣服食料其他を船内より運び來る。初めには私人の所有物をのみ揚陸して、商品は皆之をあとまはしとせしが、東印度商會所屬の一切の賣買品を殘らず運び終るまでには中々に日子を要したり。

我船には多くの君侯、兩長崎奉行を首として數多の日本人來り訪ひ、三重の甲板を有する我船を見て其大と美とに驚殺せられたるが如し。三十年間出島オランダ商館に專屬せる一通詞も、かゝる船はこれまで全く見しことなしと云へり。

豫て航海中より病ひにかゝり居りし水夫の一人は、終に醫藥効を奏せず出島に於て逝去したり。とりあへず其旨を長崎奉行に報じたれば、彼は其土葬を許す旨

を答へ、日本人來りて精細に其屍體を檢し、然る後、之を木の棺に納めて持ち去り、港の他の方に葬れり。

出島の吾人の居は、オランダ船のバタビアより到着することなくんば、全く世界より隔離せられたる一孤島に止まる。吾人は日本に就きては素より、ヨーロッパの出來事に就きても絶えて之を耳にすること能はず。奴僕はあれども、こは吾人の館内の用に供せらるゝにすぎずして、すべての餘事は日本人專ら、之に任じて處理す。或ものは吾人の食物を調理し、オランダ風に中々巧みに之を鹽梅す。或ものは小使の用をも便じて、通詞の役にこそは立たざれ、一と通りのオランダ語も出來得るなり。吾人若し勞働者に必要なる時は、奉行は之に出島出入の特許票を與へて吾人の許に來らしむ。

一七七六年一月一日、吾人は、新年を壽けり。多くの日本人は吾人と共に樂みを分たんとて來れり。時に地上のありと有ゆる樹木は朽ち果てゝ滿目、殆ど青色なく、寒さ甚だし。午頃、上下の役人、通詞、其他オランダ商館と直接間接の關係あるものは、皆祭典の禮衣をきて吾人を訪へり。館長由つて之に午餐を饗しぬ。食事は凡て

ヨーロッパ風に料理せられたれば、客人は餘り多くを食はざりしも、實を云へば、肉汁をば彼等は盡くすゝり盡し、己れの欲する皿を取りて、其勿體らしきにも似もやらず、一片肉をも殘さゞるまでに之を空虛としたり。是、彼等が其食皿の中なるを包みとして取りわけたればなりき。彼等はかくて其包みの滿溢するや、之に知人の名をしるして町に送り屆けたり。日本人は習慣として肉、牛酪及び鹽漬等を食はず。彼等は或種の病を醫する爲めに之を貯ふるのみ、例へば牛酪を丸め之を肺病の藥として毎日頓服するが如し。食後、吾人は客人に冷きサケを振舞ひたり。

二月七日、余は長崎奉行より前に得たりし許可に從ひて、長崎の近郊に向ひて最初の植物採集にと出かけたり。多くの大通詞、小通詞、役人其他つき從ふ。此數多き從者は、余に向ひては中々に多費なり。これ余は休憩時に彼等に供すべき食物、菓子を一々用意せざるべからざればなり。此採集漫歩は一週に一回、時には二回行はれて余が皇帝の朝廷に赴かん爲め使節に伴ひて發するの時に及びたり。

二月十一日、吾人の江戸參府の期日も近つき來りたれば、兎に角出發の準備にと、とりかゝれり。二月十八日は日本人の大晦日なり。余思ふに日本人は支那人と劣

らぬ高利貸なり。彼等は百に就きて十八乃至二十の利子を徵し、借手、若し年末迄に借金完濟せざれば、之に對する信用も全然こゝに破壞せらるとなす。十九日は支那及び日本の元旦にして彼等は禮裝して回禮せり。

二月二十二日以後、長崎及び其附近に有名なる一の式典行はれたり。これ耶蘇教信徒にあらざるをたしかめしめんために、十字架、耶蘇及び聖母の像を足にて踏ましむるものなり。此奇怪なる式を行ふため、長崎全市だけにて四日かゝり、これより此等の像を其附近地方にさしまはせり。像は銅製なりと云ふ。

二月二十五日、館長は通詞等を率ゐ出島を出で、奉行を訪ひ、江戸參府に就きて打合せをなせり。一七七六年三月四日、使節は愈〻江戸に向けて發足せり。三月四日は日本曆の正月十五日に當る。出發の正月十五、六日にあるべきはこれまでの例なり。使節の一行は三人より成れり。使節フェート、商館の醫長としての格にて余、次に書記官コーレル是なり。但し吾人の從者は夥しき數にして二百人に上れり。多くの關係者は市中を横ぎりて一行を見送れり。奉行は一行往復の指揮官として一人の役人を任命し、彼は乘物に乘り、大通詞駕籠に乘れり。料理人は吾人の食事

を作るの要あれば常に一行に先ちて發す。吾人三人は各〻漆を塗れる頗る美麗なる乘物に乘りたれば、ケムプエルの時よりは厚遇せられたる譯なり。ケムプエルの時は、乘物に乘りしは使節一人にして、他は皆騎して之に從ひたればなり。吾人は皆寢具をも携帶せり。皆絹又はビロードの頗る高價なるものなり。吾人は此等の贅澤なる物品を以てオランダ東印度商會の殷富と權勢とを普く日本人に皷吹せんと窃にたくらめるなり。一行中の日本人は或は騎して或は徒歩にて行けり、皆奇形の帽子を頂けり。

此凡ての階級を網羅せる無數の旅人隊は、外人の目には一面には美に、一面には珍奇に見えたり。吾人は、沿道到る處に於て、國君と同樣の尊敬を以て待遇せられたり。人々は吾人に何等かの變事起らんかと氣遣ひつゝ細心に一行を注意し、吾人の望む所は一々之をきゝて滿足せしめんと努めたれば、吾人の缺乏は何一つなく、飲み、食ひ、讀み、吾人の欲する事を書き、眠るの外、吾人には一の仕事なき有樣なりき。

ツンベルグのこれより江戸までの旅行は殆どケムプエルの旅行と異なる所

なければ、之を省き、彼が江戸着後に於ける觀察中の面白きものゝみを擧ぐべし。一行の江戸の宿舍は、オランダ使節の毎年泊する所にして、其外部より見るも、亦内部の裝飾よりして之を見るも、決して遠き異國より來りたるものを待つにふさわしきものとは云ふを得ざりき。一大室あり、こは、同時に使節の食堂にも亦謁見室にも充てられ、只彼の寢室としては特に別室あり。ツンベルグと書記官との寢室は同間にして、其間に區劃を施すに過ぎず。此外又一行の爲めの浴室ありたり。使節の客室の窓は一の小路に面したれば、こゝには絶えず小兒集まりて騷擾し、中には向ふ側の家に攀ぢ登りてオランダ人をのぞきこまんとするもありき。下に江戸滯在間の日記を抄錄すべし。

江戸觀察

一行の經路は必ずしもケムプエル或は其他の使節一行の經路と同一ならず。其宿泊せし所は、必ずしも常に同じからざりき。殊に海上の航行は著しくひま取りたれば、着京迄の日時は今までの何れの使節よりも多くを要したり。此遲滯は吾人の爲めには却つて仕合せにして、吾人は御蔭にて日本春光の駘蕩と初夏の愉

樂を專にすることなき機會を得たり。此旅行にして若し一ヶ月だけ之よりも短縮せしとせんか、吾人の長崎への歸還はそれだけ早まるべく、かゝらんには、吾人は花木を見、諸種の草木を採集するの時を得ること能はざりしなるべし。

江戸に着するや否や、吾人は此地の學士の若干の訪問を受けたり。實は皇帝への謁見の濟まざる間は、吾人は一切外出を禁ぜられ、又來客を引見すると能はざるの定めなるも、政府は特に免許して學士をして訪問せしめたるなり。客は五人の醫師と二人の天文學士なり。彼等は鄭重に一行の幸ひなる旅行を賀し、其安着を喜べり。使節、書記官及び余の三人は通詞及び諸役人と共に之を謁見室に引きて色々の物語りをなせり。一と通りの挨拶終りたる後、彼等は三人中、余を以て最も學識ある者と見做したるものゝ如くに、サカキ・ブーシン及びスボカワ・スロなる二天文學士は、齊しく余に向ひ日月の蝕に就きて質問を發せり。日本人は蝕を精細に測定し、又其時間を測ることを知らざるものゝ如し。交話は通詞の仲介を要することなれば意の如くなるを得ず、且つ、余が手許に必要なる書籍なかりければ、余は遺憾ながら充分に日本人の疑問を釋くこと能はず、由つて余の天文の事に

於て多く熱せざるものなるを白狀したり。

但し醫師の間に向ひては余はより滿足なる解答をなすことを得き。これ彼等の中の二人は少しくオランダ語を解したると、吾人の通詞の多少醫術の事を解したるとによりてなり。醫師中の岡田イオシンと云へるは七十歳の老人なるが、同僚を代表して色々の問を發し、年少のグリスキ・ドファも之に續いて語り、アマノ・リオシュン、ファクスマト・ドシンは之を默聽せり。彼等は之よりして余が許を音づるゝこと屢〻、時には談話に時の移るを忘れて夜半に及びし事もあり。余は彼等に物理學植物學殊に內外科の醫學を敎授せり、最も年少の桂川甫周と云へるは皇帝の侍醫にして頗る愛すべき人なり。彼より少しく長じたる醫友、ナガワ・スンナンを伴ひて余の許に來れり。二人の中殊に後者はオランダ語を語り、オランダ原書又は漢文の書を開きて物理、動物、植物、金石の諸學に就きて余に質せり。

五月十八日は愈〻皇帝に謁見の日と定まりたり。此日は一行は早朝より身仕度し、最美の燦爛たる衣服を着かざり、乘物にて宮城に赴く。吾人の皇帝、太子及び諸大官への贈物は皆既にそれ〴〵先方に送り屆けられ、吾人の通過する宮城の一室

に置かれつゝあり。吾人の乘物の宮城に達するまでには餘程の道程あり、軈て目的の地に着して見渡せば、水を充てたる濠湟もて圍まれし一廊の巍然たる城あり。こゝには皇帝の居城とは別廊に太子の居殿あり。これ又濠渠と石壁ともてとり圍まる。內城は最も大にして、こゝには廣き美はしき道路あり。諸侯諸大官の邸も居並べり。護衛兵は第一の城門の外に第二の城門にも配置せられ、吾人は第二の城門の前にて初めて乘物を下り、一室にと導かる。待つこと少時にして兵士の列もて固く警められたる道を進み行けば宮殿に達せり。此建物は高所に建てられたれば、一階のみなるも、他の家屋を瞰下するの地位にあり、其占むる地域も亦廣大なり。吾人はそこなる玄關の一と間にて暫く謁見の時の到來を待たざるべからざりしが、日本役人は、外人を見るの好奇心よりして吾人を色々にもてなしたれば、殆ど時の永きを覺えざりき。やがて謁見の時は來れり。其儀式はケムプェルの時の式とは全く異れり。使節のみが皇帝の面前に出で、吾人は之を待たざるべからざりき。其次第はいと簡易なり。即ち、謁見の室に入りて使節跪き、頭を地に觸るゝばかりに低下し、兩手をば疊の上に置きて拜す。これ日本人が其服從尊敬

を示すに用ひるの禮法なり。禮終れば使節は導かれて、もとの玄關に歸り、こゝにて吾人は尙しばらく留まりて朝廷諸臣僚の訪問を受け、又其間に答ふ。此時は皇帝も吾人を熱見せんとて微行して衆臣の間に伍し來るも、日本人が俄に其容を改めて尊崇の意を示すが爲めに、吾人は初めてそれと推するなり。皇帝は打ち見たる所、中背にて逞しき容貌し、年の頃四十を過ぎたらんと覺ゆ。

諸大官の好奇心が滿足せらるれば、吾人はこゝに自由を得て宮城內の拜觀を許され、先程、使節の謁見を許されたりし所にも行きて見たり。こゝには、皇帝は右に太子を左に諸大臣を率ゐて引見せられしなり。此室を右に出づれば、百疊の大廣間あり。これ諸大官の詰め所なり。吾人はかくて宮殿の諸室を拜見し終りたれば、橋をわたりて他の一廊なる太子の居殿に參殿せしに、太子は未だ歸館せられざりしも、役人は等しく吾人を迎へて挨拶せり。吾人はこれより乘物に乘るべく誘はれたるが、時已に晝飯の期を過ぎしと雖、なほ、直に十二大官を訪問せざるべからざる筈なりしかば、轉じて其各〻を居館にたづねたるに、皆御歸館せずとのことにて役人に迎へられ、各家の女子小兒は殊に一同を珍客として凝視せり。此訪問

は各戸に於て半時間位づゝを要し、吾人は通常二人の役人の應接によりて一の大廣間に通ぜられ、こゝにて婦人小兒は其姿を隱しつゝ頗る透明なる障子の後へより吾人を窺ひ見たり。茶と煙草と饅頭と又吾人の前に供せられたれども、吾人は茶を飲みしのみにて煙草をば喫せざりしが、去るに臨みて通詞は吾人をして饅頭を吾人の宿舍に携へ歸らしめたり。

二十三日、宮城に召されて一行は皇帝及び太子に面謁し、恭しく其下賜の品を受く。この翌二日間は諸大官より一行にあてたる贈物宿所に送達せられたり。こは主として絹布の衣なり。

余は吾人の宿舍に訪ひ來りし數多の客人の中に一婦人のありし事を記するを忘れたり。彼女は夫に追はれて居るに所なく、やむなく哀を我使節に求めたるなり。彼女は斷髮し居りき。之を聞く、日本にてはすべて事情の如何に關はらず、離婚せられたる婦人は頭髮を剃り落すが習ひなりと。

余の忠實なる門下生なる宮廷の二侍醫は、其間に一日として來りて余を見ざるはなかりき。彼等は熱心に研學し、余も亦喜んで之に敎へたれば、二人は日本の醫